

平成 26 年度文部科学省委託事業 武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）

中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査



平成 27 年 3 月

研究代表者 横浜国立大学 高橋和子

2015年3月3日

関係各位

研究代表者 横浜国立大学 高橋和子

平成26年度文部科学省委託事業

中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査報告

平成26年度文部科学省から委託を受け、全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等の調査を行いました。文部科学省、各県教育委員会、横浜市教育委員会、神戸市教育委員会はじめ、多くの関係者にご協力をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。多忙にもかかわらず、横浜市立西中学校と横浜市立橘中学校の先生方には授業実践をお引き受けいただきました。また、小中連携に繋がる表現運動の事例研究は、横浜市小学校体育研究会表現運動部会の先生方にやっていただきました。心より感謝申し上げます。教員への質問紙調査時にはダンス研修会を同時に開催して、教材や指導法を提供させていただきました。ダンス研修会は初めてという先生方も、喜々として全身を使いリズムに乗ったり、表現世界を遊んでくださったり、手をつなぎあって各国のフォークダンスを踊ったりされていました。この時からだで味わった表現のダイナミズムを、生徒とともに授業実践の中で展開していただければ幸いです。

本調査で明らかになった柔道とダンスの指導状況等の結果からは、いくつかの面白い傾向や、教員の指導法への工夫が浮かび上がりました。また、事例研究や映像資料には、すぐ使えるヒントも満載しております。柔道やダンス指導を通して中学生が全身で仲間とかかわり、それぞれの運動特有の楽しさを体験できるような指導が展開されることを願っています。

特に今回の調査で明らかになったことは、次の点です。

1. 男子中学生は柔道を、女子中学生はダンスをより肯定しており、性差が明らかにみられたこと。男子は運動のコツやポイントを明確にした指導によって、女子はほめることによって運動意欲が喚起されること。男子のダンス指導、女子の柔道指導に、この結果が反映されてほしいと思います。それとともに、女子中学生の運動離れにはダンスが歯止めになると強く思いました。
2. 柔道が「得意」な教員ほど「経験」には左右されず授業成果を実感し、ダンスが「得意」で「経験」がある教員ほど授業成果を実感していること。両領域とも「指導経験」だけでは、教員自身の技能が身に付くとは思っていないこと。このことより、得意になるための研修の機会が重要になります。
3. 柔道の指導内容では、受け身、基本動作は約6割、固め技、投げ技は約5割が指導しており、特に投げ技の楽しさを体験させるためには、本調査で提案した「安全な約束練習から自由練習につなげる指導法の開発」が必要です。
4. ダンスの指導では、現代的なリズムのダンスは約8割、創作ダンスは約6割、フォークダンスは約4割の生徒が履修していること。現代的なリズムのダンスでは振付したダンスを発表することが多く、リズムに乗り自由に踊るのは5割弱。創作ダンスでは簡単な作品創作を発表することが多く、即興的に表現するのは約3割。フォークダンスは外国のフォークダンスを踊るのが約4割。基本的な内容の指導があまりなされていない結果でした。

目次

第1章 調査結果からわかったこと

横浜国立大学 高橋和子・山本光・高橋耕平

- I 調査の概要
- II 中学生の調査結果
- III 中学教員の調査結果
- IV 調査項目の関係性

第2章 柔道の取り組み事例

横浜国立大学 木村昌彦 横浜市立西中学校 藤野信行

第3章 ダンス・表現運動の取り組み事例

1. 小中連携を意識した表現運動

横浜市立矢向小学校 田屋多恵子

- ①「題材の特徴のイメージを豊かにもって踊れる」「なりきって踊れる」楽しさを味わえる

表現リズム遊びの授業

横浜市立左近山小学校1年 成瀬聡子

- ②できる・わかる喜びを味わい、進んで学習に取り組む子の育成

—子どもの姿に応じた表現運動の指導—

横浜市立潮田小学校4年 加藤 拓

- ③できる・わかる喜びを味わい、進んで学習に取り組む子の育成：表現運動を通して

横浜市立寺尾小学校6年 木村恭子

- ④指導と評価の一体化を目指した授業の実践

横浜市立桜岡小学校6年 須藤憲司

2. 初心教員が取り組む中学校のダンス

- ①生徒も先生もダンスが好きになる！—文部科学省の手引きに基づいた授業実践—

横浜市立橋中学校 竹生田恵美・河野寛子・三浦明希子

- ②生徒の興味・関心をひく楽しいダンス授業の在り方

横浜市立洋光台第二中学校 寺田峰子

第4章 21世紀の体育科/保健体育科の学習評価—学習と評価の一体化に向けて—

横浜国立大学 梅澤秋久

第5章 映像教材

1. 中学校柔道の実践

横浜市立西中学校 藤野信行

2. ダンスの実践

- ①中学 教材「新聞紙」 横浜国立大学 高橋和子 横浜市立橋中学校 竹生田恵美・河野寛子

- ②教員養成大学 教材「走る・跳ぶ・転がる」「スポーツいろいろ」 横浜国立大学 高橋和子

- ③小学校での4年に渡る取組 元横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校 赤坂桂

- ④大学生の授業作品『未知の窓』 日本教育大学協会第34回全国創作舞踊研究発表会出展

●資料編

1. 集計結果の図表

2. 調査票（生徒調査票・教員調査票）

第2章 調査結果からわかったこと

I. 調査の概要

1. 調査の目的

全国の中学校における「武道（柔道）」「ダンス」領域の指導状況を把握・分析することにより、中学校で新たに必修化した領域の成果と課題を検証し、その改善を図る。

2. 調査の名称

平成26年度文部科学省委託事業 武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）
「中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査」（以下「本調査」という。）

3. 調査の対象と方法

(1) 国・公・私立学校の中学生

全国の地方ブロックから1～2県選び、その県の教育委員会等から推薦された中学校に質問紙を郵送・回収する方法で実施。なお、全校生徒数が300名以上の学校は各学年約100名ずつ、全校生徒数が300名未満の学校は各学年約50名ずつ調査を依頼した。

(2) 国・公・私立学校の中学教諭

上記の中学校の保健体育教諭並びに、本研究者がダンス実技講習を行った中学校教諭に質問紙を郵送・回収する方法で実施。

(3) 対象とした領域は「柔道」「ダンス」である。特に武道の中でも「柔道」のみの調査に絞ったのは、柔道を学校選択している中学校が多いことと、怪我などへの配慮も含めた指導方法が課題になっているためである。

4. 調査事項・調査実施日

(1) 中学生に対する調査：平成26年7月から12月までの期間

柔道とダンスの履修、並びに、運動習慣等に関する40項目の質問紙調査（巻末資料）

(2) 中学教諭に対する調査：平成26年7月から12月までの期間

柔道とダンスの指導状況、並びに、体育授業等に関する42項目の質問紙調査（巻末資料）

5. 分析の方法

(1) 統計処理

統計ソフト IBM SPSS Statistics22 にて、調査項目を単純集計後、一元配置分散分析と多重比較検定、カイ二乗検定と残差分析を行い、有意なものにはその確率 p 値を、有意でなかったものには n. s. を表示した。また、文部科学省の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査項目も参考に本調査を行った。そのため「結果及び考察」には、『平成25年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』（文部科学省、平成25年11月）』（以下、「文科報告書25」という）、及び『平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』（文部科学省、平成26年11月）』（以下、「文科報告書26」という）も比較対象として参考にした。

(2) 質問項目の分析

問14「最近の健康状態について」は、体育やスポーツやダンスによって回復力を得られるという仮説のもと、質問項目を設定したが、本調査は「柔道・ダンス」領域の指導状況を把握が主目的であるため、今回は分析項目から省いた。

また、ダンス領域において「現代的なリズムのダンス」は「リズム系ダンス」と表記している。

Ⅱ. 中学生の調査結果

1. 集計の結果（図表は巻末）

1-1 対象者の属性

(1) 対象中学生の性別（問1） 有効数は8,786名、男女比はほぼ同じ割合である。

(2) 学年（問2）

学年の内訳は1年生が約17%、2年生が約38%、3年生が約46%と、3年生の割合が多い。これは、本調査期間を12月までとしたために、柔道やダンスの履修が3学期の学校は、中学校1年生を調査対象から除いた学校もあった。その結果、調査対象は2・3年生が多かったと考えられる。

(3) 運動部への所属（問3）

運動部へ所属している生徒は64.3%おり、「文科報告書26」とほぼ同様の結果である。

その一方、運動部へ所属していない生徒は29.6%いる。

(4) 授業を除く運動（柔道・ダンス含む）実施状況（問4）

「週に3日以上」「週に1～2日」運動を行っている割合は62.4%、「全く運動していない」生徒は27.2%おり、これらの数値は問3の「運動部に所属している・していない」割合とほぼ同率である。

このことから、約3割の生徒は授業のときだけ運動をしている状況であり、授業をきっかけとして、少しでも体を動かす習慣や運動が好きになる工夫が大切になると言えよう。

1-2 体育やスポーツに対する意識

(1) 体育やスポーツは得意ですか（問5、問6）

「体育やスポーツは得意ですか」の質問で、「得意」「やや得意」と答えた「得意群」は61.6%であり、「文科報告書26」の「得意群」65.9%と比較すると、若干低い値を示している。

「体育やスポーツは好きですか」の質問で、「好き」「やや好き」と答えた「好き群」は80.8%であり、「文科報告書26」の「好き群」85.1%と比較すると、若干低い値を示している。これらの2項目の男女差をみると、「体育やスポーツは得意」「体育やスポーツは好き」では、男子が有意に高い値（ $p < .001$ ）を示しており、この傾向は「文科報告書25、26」と同様である。

(2) もっと運動してみたいと思う条件は何ですか（問7：複数回答）

この質問は複数回答である。

「好き・できそうな種目があればもっと運動してみたい」と答えたのは69.5%、

「自由な時間があれば」は36.8%、「友達と一緒にできたら」は34.9%、

「体型の変化に効果があれば」は14.9%の順である。

4つの選択肢の男女差をみると、「自由な時間があれば」のみ、男子が有意に高い値を示している（ $p < .001$ ）。「好き・できそうな種目があれば」「友達と一緒にできたら」「体型の変化に効果があれば」は、女子が有意に高い値を示している（ $p < .001$ ）。つまり、女子中学生に運動をさせたいならばこれらの条件を満たすような環境や仕掛けを作ればよいと言えよう。

1-3 ダンスや柔道に対する意識

(1) ダンスは得意、柔道は得意ですか（問8、問9）

「ダンスは得意ですか」の質問で、「得意」「やや得意」と答えた「得意群」は37.9%、「柔道得意群」は27.2%であり、これらの値は「文科報告書26」の他種目と比べ低い。

男女差をみてみると、「ダンスは得意」では女子が有意に高い値を示している ($p < .001$) のに対して、「柔道は得意」では男子が有意に高い値を示しており ($p < .001$)、性差が顕著に表れている。

(2) ダンスや柔道でどんな力が身に付きましたか (問 10、問 11：複数回答)

ダンスで身に付いた力として、「表現力」と答えたのは 43.4%、「身体感覚」は 35.6%、「創造力」は 25.3%、「コミュニケーション力」は 25.1%の順である。4つの選択肢の男女差をみてみると、すべての項目で女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

柔道で身に付いた力として、「技術」と答えたのは 35.8%、「護身」は 29.8%、「日本の伝統文化への興味」は 19.0%、「仲間との協調性」は 17.4%の順である。4つの選択肢の男女差をみてみると、「技術」「護身」は男子が有意に高い値を示しているが ($p < .001$)、「仲間との協調性」は女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。また、「日本の伝統文化への興味」について、性差は認められなかった。

(3) ダンスや柔道はどこでやりたいか (問 12、問 13：複数回答)

ダンスをやりたい場所について聞いたところ、「授業でやりたい」と答えたのは 47.4%、「どこでもやりたくない」は 34.6%、「部活」は 13.8%、「外部のおけいこ場」12.9%の順である。4つの選択肢の男女差をみてみると、「どこでもやりたくない」のみ男子が有意に高い値を示している ($p < .001$) のに比べ、他の 3 項目はどれも女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。この結果と「文科報告書 26」を比較してみた。「文科報告書 26」では、「もう一度ダンスを授業でやりたい」では男子 24.1%、女子 36.8%、「もうやりたくない」は男子 23.9%、女子 13.1%である。本調査よりも低い値であるが、同じ傾向であることがわかる。

次に、柔道をやりたい場所について聞いたところ、「授業でやりたい」と答えたのは 42.2%、「どこでもやりたくない」は 40.4%、「外部の道場」6.1%、「部活」は 3.7%の順である。これら 4つの選択肢の男女差をみてみると、「授業」「部活」は男子が有意に高い値を示している ($p < .001$) のに比べ、「どこでもやりたくない」は女子が有意に高い値を示しており ($p < .001$)、「外部の道場」について性差は認められなかった。この結果と「文科報告書 26」を比較してみた。「文科報告書 26」では「もう一度授業でやりたい」は男子 32.0%、女子 29.7%。「もうやりたくない」は男子 19.8%、女子 26.1%であり、女子のこの武道の数値は他の 7 領域の中でも一番やりたくない種目になっている。

このように「ダンスをやりたい」のは女子で「やりたくない」のは男子、「柔道をやりたい」のは男子で「やりたくない」のは女子と、性差が顕著に表れている。

以上の結果から、ダンスに肯定的なのは女子、柔道に肯定的なのは男子という図式が明確であり、この様相を変えるための方策を探る必要があると思われる。また、この傾向を積極的に受けとめれば、運動をあまりしない女子中学生には、ダンスの授業をもっと行うことによって運動欲求をかきたて、生涯ダンスに親しむように意識付けすることも一つの方策かもしれない。また、武道の必修化(柔道)において女子中学生に対してどのような内容を教えれば良いのか、あるいは、身体接触の多い柔道を男女共修で行えるのか等が学校現場で課題となっている。今回の柔道に対する女子中学生の否定的な回答が多いことから、より一層、女子中学生対象の指導方法を検討する必要がある。

1-4 中学校の保健体育の授業に対する意識

(1) 「運動のコツやポイントが分かる」「体育は自分にとって大切なものか」 (問 15、16)

「授業で運動のコツやポイントが分かったか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 79.1%である。また、「授業を通して体育は自分にとって大切なものと思ったか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 80.9%である。男女差をみてみると、2項目とも男子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

(2) 教師の指導（問 17、問 18）

「先生にほめてもらえたか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 64.1%である。また、「先生にいてねいに教えてもらったか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 80.5%である。

男女差をみると「先生にほめてもらえた」と思っているのは女子が有意に高い値を示している ($p < .001$) が、「いてねいに教えてもらった」について、性差は認められなかった。

以上の結果から指導法を考えると、男子生徒には技術のポイントを、女子には意識してほめることに留意するとよいと思われる。

1-5 中学校のダンス授業に対する意識

(1) ダンス授業の成果（問 19、問 21、問 23）

「ダンスの授業は楽しかったか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 67.2%、「ダンスの授業で踊れるようになったか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 63.0%である。「ダンスの授業を経験してスポーツにも関心が持てたか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 46.4%である。男女差をみると、ともに女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

この結果と「文科報告書 26」を比較してみた。「文科報告書 26」の「保健体育の授業は楽しいですか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は、男子 88.9%、女子 82.6%であった。この数値は本調査に比べ高く、ダンスがより楽しい授業であると評価されるには、特に男子生徒への指導の工夫が必要と思われる。

(2) ダンス授業の履修形態（問 25、問 27）

「ダンスの授業は男女共習か別習か」の質問に対して「男女共習」は 36.0%、「別習」は 50.9%、「学年によって違う」は 8.1%、「ダンス授業はなかった」は 5.0%である。男女差をみると「男女共習」「ダンス授業はなかった」は男子が有意に高い値を示し ($p < .001$)、「別習」は女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。この結果から、ダンス授業を男子は共習で、女子は別習で行う傾向であることがわかる。本研究者の指導経験上、男女共習では、男子は女子にかっこいい所を見せようと張り切るけれど、女子は男子の目を気にして恥ずかしがる傾向があると思われる。教師も同様に感じていれば、このような履修形態にしているのではないかと推察できる。

次に「外部指導者からダンス授業を受けた学年」を聞いたところ「中学 1 年」は 9.5%、「中学 2 年」は 8.1%、「中学 3 年」は 4.2%と、どの学年とも 1 割弱であり、「全く受けていない」と答えた者も 72.8%いる。このことから、必修化が完全実施されても、授業を外部委託はしていないと考えられる。男女差をみると、「中学 1 年・2 年」で女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

(3) ダンス領域の履修学年（問 29、問 31、問 33：複数回答）

「ダンスの履修学年」と「ダンス 3 領域の授業内容」が本研究の最も関心事であり、学習指導要領（解説）をどのように受け止めて実践しているかを把握する上で、重要な項目になる。「創作ダンス」「リズム系ダンス」「フォークダンス」の履修学年を質問した。

創作ダンス : 中学 1 年は 35.4%、2 年は 27.1%、3 年は 15.7%、履修なしは 38.4%
リズム系ダンス : 中学 1 年は 47.6%、2 年は 37.1%、3 年は 19.6%、履修なしは 20.8%
フォークダンス : 中学 1 年は 22.6%、2 年は 9.0%、3 年は 4.0%、履修なしは 55.9%

3 つの領域とも、中学 1 年時、2 年時、3 年時の順に履修割合が多い。領域別では「リズム系ダンス」は約 8 割、「創作ダンス」は約 6 割、「フォークダンス」は約 4 割が履修して

おり、多くの学校で「リズム系ダンス」を教えている現状が浮き彫りになった。これらの男女差をみてみると、「創作ダンス」と「リズム系ダンス」領域の履修では、どの学年も女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。その一方で、履修していないのは、男子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

(4) ダンス 3 領域の授業内容 (問 30、問 32、問 34 : 複数回答)

3 領域とも、選択肢の初めに提示した項目は、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。「創作ダンス」の授業内容については、「即興的に表現する」は 19.6%、「簡単な作品創作」は 35.8%、「発表・鑑賞」は 37.8%、「体育祭や地域で踊る」は 19.0%であり、基本的な内容よりも、発展的な内容を中心に教わっている。「リズム系ダンス」の授業内容については「リズムに乗り自由に踊る」は 31.1%、「振付ダンスを踊る」は 41.9%、「発表・鑑賞」は 32.9%、「体育祭や地域で踊る」は 16.6%である。学習指導要領解説には「既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではなく」と書かれているが、振付ダンスを踊るイメージが強いことが伺える。「創作ダンス」と「リズム系ダンス」領域の男女差をみてみると、全ての内容とも女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。「フォークダンス」の授業内容については「外国のフォークダンス」は 21.5%、「日本の民踊」は 16.6%、「発表・鑑賞」は 10.8%、「体育祭や地域で踊る」は 12.6%である。

(5) ダンス指導実態からの考察

以上の結果から、創作ダンスやリズム系ダンスの指導内容のいかんにかかわらず、女子生徒は男子生徒よりもダンス授業を楽しんでいると感じ、踊れるようになったと認識していることが明らかになった。その一方で男子生徒にとってのダンスは、それほど楽しい領域ではないようであり、指導に当たっては、男子生徒が夢中になって表現し踊れるような工夫がより一層求められると言える。また、3 領域の中でも、特にリズム系ダンスについては振付ダンスを踊ることを主内容にしていることがわかった。先行研究では、リズム系ダンスの指導はビデオ教材の映像を大きなスクリーンに流し、それを生徒が真似して踊ることから始まり、グループでアレンジして発表する形式が多いことも報告されている。そこでの教師はどのような役割を果たしているのだろうか。

ここで、戦後のダンス教育を振り返りながら本調査を意味づけたい。戦後 70 年間、ダンス教育は生徒の思いや動きを引き出す授業を大事にしてきた。『学習指導要領・解説 保健体育編』『学校体育実技指導資料第 9 集 表現運動系及びダンス指導の手引』(文部科学省 2013)にも示しているとおりである。特に、いま、世界共通に求められている力が「21 世紀型スキル」と言われている。そこで挙げられている「創造力」「問題解決能力」「コミュニケーション能力」「コラボレーション能力」「自立的に学習する力」等は、特に、創作ダンスの学習現場で聞き慣れた目標(ダンスで培われる力)である。つまり、ダンスの教育デザインは時代を先取りしてきたとも言える(『(公社)日本女子体育連盟創立 60 周年記念 第 48 回全国女子体育研究大会(東京)紀要』2014)。

しかし、ダンス指導の現状が、「運動会や体育祭で全員がそろってダンスを観客の前で発表すること」でおしまいにしているとすれば、生徒が即興的に自己を表現し、リズムに乗って自由に踊って楽しむ場は、果たして保証されるのだろうか。もちろん、生徒はカッコイイダンスをみんなで踊る達成感を得ることや、他学年の生徒や教師、保護者の羨望のまなざしを浴びることもあろう。その影で、振りを覚えられない、恥ずかしくて動きが小さくなる、間違えるたびに仲間や先生に指摘される等の生徒たちもいる。このことは教員養成大学の学生の聞き取り調査からわかっている。AKB や EXILE などのメディアで流れるダンスシーンにあこがれる生徒の願いもわかるが、年間 10 時間位の授業の中で、生徒たちにダンスを通して何を身に付けさせるのか、今回の現状をみて改めて再考する時であると思った。

1-6 中学校の柔道授業に対する意識

(1) 柔道授業の成果 (問 20、問 22、問 24)

「柔道の授業は楽しかったか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 58.3%、「柔道の授業で技がかけられるようになったか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 58.9%である。「柔道の授業を経験してスポーツにも関心が持てたか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 38.7%である。男女差をみてみると、「授業は楽しかった」「技がかけられるようになった」では、男子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

この結果と「文科報告書 26」を比較すると、「ダンスの授業は楽しかったか」で前述したように、女子生徒にとって、柔道の授業が楽しく思える工夫が必要と思われる。

(2) 柔道授業の履修形態 (問 26、問 28)

「柔道の授業は男女共習か別習か」の質問に対して、「男女共習」は 24.7%、「別習」は 61.0%、「学年によって違う」は 4.1%、「柔道の授業はなかった」は 10.3%である。男女差をみてみると、どの項目も有意差は認められなかった。

「外部指導者から柔道授業を受けた学年」を聞いたところ、「中学 1 年」は 7.7%、「中学 2 年」は 5.8%、「中学 3 年」は 4.2%と、1 割弱であり、「全く受けていない」と答えた者も 70.7%である。このことから必修化しても授業を外部委託はしていないと考えらる。男女差をみてみると、全ての項目で男子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

(3) 柔道の履修学年 (問 35 : 複数回答)

柔道の履修学年を質問した。中学 1 年は 63.0%、2 年は 41.3%、3 年は 13.5%、履修なしは 14.30%であり、中学 1 年時、2 年時、3 年時の順に履修割合が多い。これらの男女差をみてみると、どの学年も男子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。その一方で、履修していないのは、女子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

(4) 柔道の授業内容 (問 36、問 37、問 38、問 39、問 40 : 複数回答)

選択肢の初めに提示した項目は、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。

柔道の授業内容については、「基本動作」は 64.3%、「受け身」は 66.2%、「投げ技」は 41.6%、「固め技」は 54.5%であり、基本的な内容の「基本動作」と「受け身」は 6 割強の生徒が教わっている。技では「投げ技」よりも「固め技」を半数以上が教わっていることがわかる。

次に、「基本動作」「受け身」「投げ技」「固め技」の具体的内容を聞いた。

「基本動作」の授業内容については「姿勢と組み方」は 62.3%、「進退動作」は 22.7%、「崩し」は 32.6%であり、基本中の基本である「姿勢と組み方」を重視していることが分かる。「受け身」の授業内容については「前回り受け身」は 58.2%、「横受け身」は 59.4%、「後ろ受け身」は 58.2%、「前受け身」は 24.3%であり、「前回り受け身」「横受け身」「後ろ受け身」を約 6 割の生徒が教わっている。「投げ技」の授業内容については「支え技系(膝車から支え釣り込み足等)」は 26.1%、「刈り技系(大外・大内・小内)」は 26.8%、「まわし技系(体落とし・大腰)」は 32.2%、「投げ技は教わっていない」は 24.9%であり、どの投げ技も約 3 割の生徒が教わっている。「固め技」の授業内容については「けさ固め」は 61.8%、「横四方固め」は 53.3%、「上四方固め」は 37.7%、「縦四方固め」は 14.8%であり、「けさ固め」「横四方固め」は半数の生徒が教わっている。

これらをまとめてみると、姿勢と組み方を覚え、受け身を習得したあと、投げ技よりも固め技を教わる傾向が強いことがわかる。投げ技まで学習を展開する時間的余裕がないため、教師自身が柔道事故につながりやすいと考え、投げ技は教えていないのかとも推察できる。また、柔道の授業内容の「基本動作」「受け身」「投げ技」「固め技」の男女差をみてみると、上述した全ての項目において男子が有意に高い値を示している ($p < .001$)。

Ⅲ. 中学教員の調査結果

*集計結果について、単純集計の数値は「文科報告書 26」の数値と比べながら考察を行う。また、教員「自身の経験」「指導経験」「得意」の項目と、ダンス指導や柔道指導に関する質問項目のクロス集計を行い、関連性が見られた点について考察する。並びに、教員と生徒に対して行った同じ質問項目についてもクロス集計を行い、関連性が見られた点について考察する。図表については、巻末にまとめて掲載する。

1. 対象者の属性

(1) 有効数（問 1） 有効数は教員 255 名である。

(2) 対象の学校規模（生徒数）（問 2、問 3、問 4）

学校規模の内訳は、小規模校 71 校 (28.2%)、中規模校 102 校 (40.5%)、大規模校 79 校 (31.3%) であり、男子生徒数、女子生徒数の割合も、学校規模の割合とほぼ同じである。

(3) 質問紙調査への記入者、及び教師歴（年数）（問 5、問 6）

質問紙調査への記入者で、一番多いのは保健体育教諭の 139 名 (55.8%)、次に多いのは保健体育主任 76 名 (30.5%) である。教師歴は、1～5 年が 85 名 (33.3%)、6～15 年が 72 名 (28.2%)、16～25 年が 49 名 (19.2%)、26 年以上が 49 名 (19.2%) であり、30 代まででほぼ 6 割を占めていると考えられる。

(4) 記入者のダンス経験・指導経験・得意度（問 7、問 8、問 9）

ダンス経験がある者は 78 名 (31.7%)、指導経験がある者は 209 名 (82.0%) である。

ダンスの得意度について「得意」「やや得意」と答えた「得意群」は 75 名 (29.4%) である。ダンス経験がある者の割合と得意とする割合は、ほぼ同率である。また、自身のダンス経験の有無にかかわらず、ダンス授業は指導していることがわかる。

(5) 記入者の柔道経験・指導経験・得意度（問 10、問 11、問 12）

柔道経験がある者は 118 名 (47.2%)、指導経験がある者は 138 名 (55.4%) であり、自身の柔道経験が指導の要因になっていると推察される。柔道の得意度において「得意」「やや得意」と答えた「得意群」は、107 名 (43.5%) である。柔道経験がある者の割合と得意とする割合は、ほぼ同率である。

ここで、ダンスと柔道を比べてみると、自身の経験が多い方は柔道であり、経験の有無にかかわらず指導しているのはダンスである。また「経験はないが指導する予定もない」と応えたのは、ダンスは 11 名 (4.3%)、柔道で 92 名 (36.9%) であることから、柔道は経験がないと指導につがりにくいことがわかる。このことからダンスは誰でもが指導できる領域とも考えられる一方で、柔道の実技指導には自身の経験が大きく影響していると考えられる。

2. ダンスの指導法全般に対する意識

(1) 授業の冒頭で授業目標を生徒に示す・授業の最後に学習の振り返りをする（問 14、問 15）

ダンス「授業の冒頭で授業目標を生徒に示している」と答えた教師は 230 名 (93.1%) である。ダンス「授業の最後に学習の振り返りをしている」と答えた教師は 220 名 (89.4%) である。「文科報告書 26」では体育「授業目標を生徒に示している」は 97.4%、「振り返りをしている」は 92.3% であり、これに比べ本調査は若干低い値を示しているものの、授業の初めで目標を示し、授業の最後に学習の振り返りを行うのは、定着している。

(2) 生徒同士で助け合うことを大切にしている（問 16）

ダンス授業で「生徒同士で助け合うことを大切にしている」と応えた教師は 235 名 (95.9%) であり、「文科報告書 26」の 99.2% と比べ、本調査は若干低い値を示しているが、ダンス授業はグループ学習の形態が多いために、生徒同士の助け合い（学び合い）を重視していると、当然のように考えているのではないだろうか。

(3) 昨年研究授業を行った (問 17)

「昨年ダンスの研究授業を行った」と答えた教師は 92 名 (37.7%) である。「文科報告書 26」では「平成 25 年度に第 1 学年で保健体育に係る研究授業を行いましたか」という全領域の授業を対象としており、40.8%が「行った」と答えている。両者は異なる質問ではあるものの、本調査では 4 割近くの中学教師がダンスの研究授業を行ったことは、驚きでもある。筆者は小学校ではよく研究授業は行うが、中学校ではあまり行わないと思っていたからである。授業研究を行った理由を推測すると、質問紙の記入者は、教師歴が 1~5 年が 3 割以上いたこと、初任の教師は研究授業を行う場合が多いこと、ダンスが必修化したことなどが要因とも考えられる。

(4) 教師の指導 (問 18、問 19、問 20)

ダンス授業で「運動のコツやポイントを指導しているか」の教師への質問に「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 225 名 (91.5%) である。生徒は「保健体育授業について、運動のコツやポイントが分かった」と答えたのは 79.1%であり、教員のほうが有意に高い値を示している ($p < .001$)。ダンス授業で「生徒をほめるようにしているか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 239 名 (97.2%) である。それに比べ「保健体育授業で先生にほめてもらえた」と受け止めている生徒は 63.1%であり、教員のほうが有意に高い値を示している ($p < .001$)。ダンス授業で「ていねいに教えようとしているか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は 221 名 (90.2%) である。それに比べ「保健体育授業で先生にていねいに教えてもらえた」と受け止めている生徒は 79.4%であり、教員のほうが有意に高い値を示している ($p < .001$)。

以上の結果から、指導時の意識を教師側と生徒側で比較して見ると、教師が思っているようには、生徒は思っていないことが明らかになった。

(5) どんな資料を活用しているか (問 21 : 複数回答)

「研究会・学校作成資料」152 名 (59.6%)、「文科報告書 26」では 45.7%。
「文科省作成資料」105 名 (41.2%)、「文科報告書 26」では 53.9%。
「民間企業作成資料」95 名 (37.3%)、「文科報告書 26」では 58.6%。
「都道府県・市町村資料」は 88 名 (34.5%)、「文科報告書 26」では 41.8%である。

本調査では、「研究会・学校作成資料」の活用のみ「文科報告書 26」の数値を上回っており、身近なところの資料を活用していることがわかる。ただし、他の項目は「文科報告書 26」の数値より全て低い傾向である。「ダンス授業は何をしたらよいか分からない」という教員が多いと先行研究では言われているが、様々な資料を参照してダンス授業に臨んでいる訳でもないことが伺える。本調査でご協力いただいた小学校、中学校の先生方のなかにも、「文科省作成資料」の指導資料集を知らない先生もおられた。文科省のホームページからもダウンロードできるシステムになっている。本調査の末尾に参考資料として掲載しておく。

(6) 努力を要する生徒への取り組み (問 22 : 複数回答)

比較の対象として「文科報告書 26」の数値を挙げた。「個別にコツやポイントを教える」「友達同士の教え合いを促す」は共に 186 名 (72.9%) 「文科報告書 26」では前者は 93.4%であり、後者は 85.2%である。本調査が「文科報告書 26」より低い値なのは、ダンスはグループ学習が主に行われていることから、「個別にコツやポイントを教える」働きかけをするよりも、グループで動きづくりをしている時に、グループ全体に働きかけていること。「友達同士の教え合い」は「努力を要する生徒」だけでなく、グループ全体の中で当たり前に行われていることから、敢えて促すことをしていない実態があると推察できる。

「練習の工夫を促す」は 122 名 (47.8%)、「文科報告書 26」では 50.4%と、ほぼ同率であ

る。「自分の動きの映像を見せる」は51名(20.0%)。「文科報告書26」の設問「授業中に自分の動きを撮影したビデオを見られるようにする」では25.1%である。ダンス授業では、努力を要する生徒にのみ映像を見せるのではなく、グループの動きを撮影して見せることの方が多いため、文科省に比べ、低い割合になっていると考えられる。

3. ダンス授業の指導実態

(1) ダンス授業の成果(問23、問24、問25、問26、問27)

「ダンスの授業はやっていて楽しいですか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は183名(75.9%)、生徒側は67.2%。「ダンスを経験してスポーツにも関心が持てたか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は141名(58.5%)、生徒側は46.4%である。「ダンスは生徒にとって大切なものであるか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は201名(83.8%)、生徒側は80.9%である。「ダンスの授業を通して自身が踊れるようになったか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は143名(59.3%)、生徒側は63.0%である。教師は生徒以上に、授業を楽しみ、ダンスを経験して「スポーツにも関心が持てた」と思い、「ダンスは生徒にとって大切なものである」と捉えている半面、技能習熟の点では、生徒より若干厳しい評価をしている。

(2) ダンス授業の履修形態(問27、問31)

「授業は男女共習か別習か」の質問に、「男女共習」で行っていると応えた教員は107名(44.2%)、生徒側は36.0%である。「別習」は、教員は95名(39.3%)、生徒側は50.9%である。「学年によって違う」は、教員は40名(16.5%)、生徒側は8.1%である。

以上のことから、ダンスは男女共習、別習の順で多いことがわかった。教員と生徒側に差異があるのは、教員はこれまでの経験を踏まえて答えているのに比べ、生徒は自分が受けた時の履修形態を答えているからだと思われる。

次に、「ダンス授業に外部指導者を導入している学年」を教員に聞いたところ、「中学1年」では13名(5.1%)、生徒側は9.5%。「中学2年」は16名(6.3%)、生徒側は8.1%。「中学3年」は12名(4.7%)、生徒側は4.2%と、どの学年とも1割に満たない状況であり、生徒側の認識と同じような割合である。このことから、必修化が完全実施されても、外部指導者の導入はあまり行っていないと考えられる。

(3) ダンス3領域の授業内容(問28、問29、問30:複数回答)

中学校のダンスは「創作ダンス・現代的なリズムのダンス・フォークダンス」3つの領域があり、各内容とも質問の選択肢の初めに提示した項目が、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。この質問項目が本研究では一番知りたい項目である。

「**創作ダンス**」の授業内容では、「即興的に表現する」と答えた教員は81名(31.8%)、生徒側は19.6%。「簡単な作品創作」は教員148名(58.0%)、生徒側は35.8%。

「発表・鑑賞」は教員129名(50.6%)、生徒側は37.8%。

「体育祭や地域で踊る」は教員68名(26.7%)、生徒側は19.0%である。

教員の方が生徒側よりも高い割合を示している。具体的には、「簡単な作品創作」「発表・鑑賞」は半数以上が指導しており、基本的な内容である「即興的に表現する」と応用発展の内容である「体育祭や地域で踊る」は、共に3割くらいが指導している。創作ダンスも簡単な作品創作をして、発表する流れが多く取られていることがわかる。

「**リズム系ダンス**」の授業内容では「リズムに乗り自由に踊る」と答えた教員は120名(47.1%)、生徒側は31.1%。「振付ダンスを踊る」は教員142名(55.7%)、生徒側41.9%。振付ダンスといっても、教師の振付か、生徒たちの振付か、それともDVDの映像の振り移しなのかは分からない。

「発表・鑑賞」は教員119名(46.7%)、生徒側32.9%。

「体育祭や地域で踊る」は教員 75 名 (29.4%)、生徒側 16.6%である。

「リズム系ダンス」は「振付ダンスを踊る」「リズムに乗り自由に踊る」「発表・鑑賞」が約半数指導しており、創作ダンスよりも、基礎基本を押さえた指導がされていると考えられる。

「フォークダンス」の授業内容については「外国のフォークダンス」と答えた教員は 106 名 (41.6%)、生徒側は 21.5%。「日本の民踊」は教員 55 名 (21.6%)、生徒側 16.6%。「発表・鑑賞」は教員 35 名 (13.7%)、生徒側 10.8%。

「体育祭や地域で踊る」は教員 59 名 (23.1%)、生徒側 12.6%である。

「外国のフォークダンス」を体育祭等で踊っていることがわかった。

4. 柔道授業の指導実態

(1) 柔道授業の成果 (問 32、問 33、問 34、問 35)

「柔道は生徒にとって大切なものであるか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は 139 名 (85.8%)、生徒側は 80.9%である。「柔道の授業はやっていて楽しいですか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は 128 名 (80.5%)、生徒側は 58.9%。「柔道の授業を通して自身が上達したか」の質問では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は 120 名 (75.5%)、生徒側は 63.0%である。「柔道を経験してスポーツにも関心が持てたか」の質問に、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員側の「肯定群」は 106 名 (65.8%)、生徒側は 46.4%である。

以上の結果より、教師は生徒以上に、「柔道は生徒にとって大切なものである」と捉えて、授業を楽しみ、技能も向上し、柔道の授業を経験して「スポーツにも関心が持てた」と思っている。この割合はダンスよりも高い。その背景には、柔道を指導した教員は約 6 割で、その多くが柔道経験者であり柔道を得意としているのに比べ、ダンスを指導した教員は約 8 割でその半分にも満たない者がダンス経験者でありダンスを得意としているため、柔道においては指導の成果を肯定的に捉えていると推測される。

(2) 柔道授業の履修形態 (問 36、問 42)

「授業は男女共習か別習か」の質問に、「男女共習」で行っていると答えた教員は 51 名 (31.9%)、生徒側は 24.7%である。「別習」は、教員は 94 名 (58.8%)、生徒側は 61.0%である。「学年によって違う」は、教員は 15 名 (9.4%)、生徒側は 4.1%である。

以上のことから、柔道は別習、男女共習の順で多いことがわかった。教員と生徒側に差異があるのは、教員はこれまでの経験を踏まえて答えているのに比べ、生徒は自分が受けた時の履修形態を答えているからだと思われる。

次に、「柔道授業に外部指導者を導入している学年」を教員に聞いたところ、「中学 1 年」では 6 名 (2.4%)、生徒側は 7.7%。「中学 2 年」は 3 名 (1.2%)、生徒側は 5.8%。「中学 3 年」は 0 名 (0%)、生徒側は 4.2%と、どの学年とも 1 割に満たない状況である。「外部指導者を導入していない」と答えた教員は 143 名である。柔道のこれらの項目に答えたのは約 160 名なので、ほぼ全員が導入していないと答えており、必修化が完全実施されても、外部指導者の導入はほとんど行っていないと考えられる。

(3) 柔道の授業内容 (問 37、問 38、問 39、問 40、問 41、問 42：複数回答)

選択肢の初めに提示した項目は、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。

授業内容については、「基本動作」について教員は 146 名 (57.3%)、生徒側は 64.3%。

「受け身」について教員は 151 名 (59.2%)、生徒側は 66.2%。

「投げ技」について教員は 111 名 (43.5%)、生徒側は 41.6%。

「固め技」について教員は122名(47.8%)、生徒側は54.5%である。

基本的な内容の「基本動作」と「受け身」は約6割の教員が指導しており、続いて「固め技」「投げ技」の順であり、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

次に、「基本動作」「受け身」「投げ技」「固め技」の具体的内容を聞いた。

「基本動作」の授業内容については「姿勢と組み方」は教員154名(60.4%)、生徒側は62.3%、「進退動作」は教員77名(30.2%)、生徒側は22.7%、「崩し」は教員141名(55.3%)、生徒側は32.6%である。教員は基本中の基本である「姿勢と組み方」と「崩し」を重視している一方で、生徒側は「崩し」はあまり教わった意識はないようである。

「受け身」の授業内容については「前回り受け身」は教員141名(55.3%)、生徒側は58.2%、「横受け身」は教員150名(58.8%)、生徒側は59.4%。

「後ろ受け身」は教員151名(59.2%)、生徒側は58.2%。

「前受け身」は教員59名(23.1%)、生徒側は24.3%である。

「前回り受け身」「横受け身」「後ろ受け身」は約6割の教員が指導しており、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

「投げ技」の授業内容については「支え技系(膝車から支え釣り込み足等)」は教員89名(34.9%)、生徒側は26.1%。「刈り技系(大外・大内・小内)」は教員84名(32.9%)、生徒側は26.8%、「まわし技系(体落とし・大腰)」は教員94名(36.9%)、生徒側は32.2%、「投げ技は教えていない」教員は27名(10.6%)、生徒側は24.9%であり、どの投げ技も約3割の教員が指導しており、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

「固め技」の授業内容については「けさ固め」は教員147名(57.6%)、生徒側は61.8%、「横四方固め」は教員133名(52.2%)、生徒側は53.3%、「上四方固め」は教員93名(36.5%)、生徒側は37.7%、「縦四方固め」は教員27名(10.6%)、生徒側は14.8%であり、「けさ固め」「横四方固め」は約5割の教員が指導しており、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

これらをまとめてみると、姿勢と組み方と崩し、受け身(後ろ受け身、横受け身、前回り受け身)を習得したあと、投げ技よりも固め技(けさ固め、横四方固め)を教える傾向が強いことがわかる。

5. 柔道授業の指導実態

以上の結果から、男子生徒に比べ女子生徒にとっては相手と直接に組み合って技を掛けあうような運動形態は初めての経験なので、より安全に過度の痛みの伴わないような柔道の授業が楽しく思える工夫が必要と思われる。柔道は痛いというイメージが多くあり、痛さが運動の興味・関心を低くしていると考えられる。過度の痛さを制限し楽しさを追求できる指導方法の工夫が、より一層求められる。

授業の外部指導者の導入に関しては、ほとんどの学校において行われていなかったと考えられる。現在、全日本柔道連盟では平成24、25年度文部科学省の委託事業において外部指導者養成システムを構築し外部指導者のコーディネーターを都道府県に配置し、教本を作成し外部指導者の養成をおこなっており、派遣人材のデータベースも整っているが、今回の結果からほとんど活用されていないことが明らかになった。活用されていない原因は今回の調査からは明らかにできないが、今後は外部指導者の活用も重要な要素になってくると考えられる。

授業内容に関しては、「受け身」が6割という数値は低いと考えられる。完全に習得しているか否かは別として「受け身」実施率が低いと考えられる。具体的には「前回り受け身」「横受け身」「後ろ受け身」の割合が同等であり、受け身の指導順位性についても検討が必要だと考えられる。受け身に関しては『柔道指導の手引三訂版』(文部科学省)にも記載してあるように単独の受け身から相対的な対応による受け身が必要であり、その段階に進めるためにも、受け身の実施率を高める事が必要である。

「投げ技」の授業内容については、指導者の教えやすさによって教える技の割合が異なっていると考えられる。投げ技よりも固め技を教わる傾向が強いのは、教員が安全面を重要視し危険性が低い固め技を重視していると考えられる。しかしながら、柔道の技術の中心である投げ技の楽しさを授業で展開する必要性を感じる。そのためにも年間 10 時間程度の授業の中で柔道の攻防（投げ技）を体験させ楽しさを味あせるためには、本研究での柔道の取り組み事例「授業展開の例示Ⅱ」で示した安全な約束練習から自由練習につなげる指導方法を用いることが有効であると考えられる。武道必修化において柔道の授業が全国で数多く実施されているが、今回の現状をみて柔道の授業で何を身に付けさせるのか、改めて再考する時であると思った。

IV 調査項目の関連性

各項目間の関係性を調べるために統計的な検定を行い、有意差が顕著にみられた質問項目について、考察する。有意なものにはその確率 p 値を、有意でなかったものには n. s. を表示する。尚表中の数値は平均値であり、数値が少ない方が肯定している度合いが高いことを意味している。検討する項目は「生徒の性差」「生徒と教員」「教員のダンス・柔道経験や得意度」である。

1. 生徒の性差による違い

男子生徒と女子生徒によって有意差が顕著にみられた 5 項目について、考察する。次の 5 項目「体育やスポーツは得意ですか」「体育やスポーツは好きですか」「体育は大切なものですか」「柔道は得意ですか」「ダンスは得意ですか」と、性についてクロス集計を行った。その結果、「体育やスポーツは得意」「体育やスポーツは好き」「体育は大切なもの」「柔道は得意」については、男子が肯定的であり、「ダンスは得意」については、女子が肯定的であることが分かった。この傾向は「文科報告書 26」と同様である。中学校 1・2 年では、ダンスも武道も必修化して 3 年が経過した。つまり、性差に関係なく、誰しもが履修することになった。しかし、本調査結果からは「ダンスは女子、柔道は男子」という図式が見えている。これは、戦前戦後の長い間にわたり、学習指導要領では性差で種目が決められていたためなのか、性役割意識なのか、様々な要因があるとは考えられるが、大きな課題を突き付けられた結果ともいえる。その一方で、中学女子の運動離れが指摘されている現状への対処としては、中学 1・2 年の必修化の時期に、女子にはとりわけダンスを積極的に導入することが一策である。

質問項目	男子	肯定度	女子	有意差
体育やスポーツは得意	2.10	>	1.92	p<.001
体育やスポーツは好き	1.58	>	1.92	p<.001
体育は大切なもの	1.78	>	1.88	p<.001
柔道は得意	2.81	>	3.05	p<.001
ダンスは得意	3.01	<	2.55	p<.001

*表中の数値は平均値であり、数値が少ない方が肯定している。

2. 「授業の成果」に対する意識の違い

(1) 生徒の性差と教員の違い

「授業の成果」をみる次の 3 項目「授業は楽しかった」「技が身に付いた」「ダンスや柔道を経験してスポーツにも関心が持てた」について、生徒の性差と教員間の関係をみた。その結果、女子生徒は「ダンス」に、男子生徒は「柔道」に肯定的であり、性差で違いがみられた。

次に、「ダンス・柔道で技が身に付いたか」について、生徒と教員間に差があるかをみてみた。

「ダンス」では教員は生徒に比べ「技が身に付いた」とはあまり思っていないのに比べ、「柔道」では教員は生徒に比べ「技が身に付いた」と思っていることが分かった。これは、ダンス

指導では教員自身が模範演技や示範することは、ウォームアップや課題提示やフォークダンスの踊り方などでは多いと思われるが、創作活動をグループ学習で行う際は少なくなる。しかし、柔道では、様々な技を明確に示範することは重要であるため、授業実践を通して教員自身は「技が身に付いた」と認識しているのではないかと考えられる。

また、「ダンスや柔道は生徒にとって大切なものですか」の質問に対して、生徒と教員間の差をみたところ、ダンスや柔道を「大切だと思っている」のは生徒であり、「やや大切だと思っている」のは教員であることが分かった。生徒の方は教員が思う以上に、ダンスや柔道の大切さを実感していると言える。しかし、教員にとってはダンスや柔道だけでなく、体育の他の領域も大切だと思っているために、「そう思う」よりも「ややそう思う」が多かったのではないだろうか。

質問項目	【ダンス】			【柔道】		
	男子	女子	有意差	男子	女子	有意差
授業は楽しかった	2.39	<1.82	p<.001	2.24	>2.43	p<.001
スポーツにも関心	2.60	<2.29	p<.001			n. s.
技が身に付いた	2.50	<2.01	p<.001	2.26	>2.47	p<.001

*表中の数值は平均値であり、数值が少ない方が肯定している。

質問項目	【ダンス】		生徒	教員	【柔道】	
	生徒	教員			生徒	教員
技が身に付く	あまり思わない	187名	75名△	思う	135名▼	48名△
				全く思わない	100名△	7名▼
大切なもの	そう思う	390名△	77名▼	そう思う	390名△	57名▼
	やや思う	312名▼	124名△	やや思う	312名▼	82名△

*表中の数值は人数を示し、△は限りなくその確率が高く、▼はその確率が少ないことを意味する。対象の生徒数の母数は8,786名、教員の母数は255名である。

(2) 教員の経験や得意度との違い

次に、教員のダンスや柔道の「得意」「自身の経験」「指導経験」の差と、「授業の成果」との関係を見た。「授業の成果」は「楽しい」「技が身に付いた」「ダンスや柔道を経験してスポーツにも関心が持てた」「ダンスや柔道は生徒にとって大切なもの」の4項目である。

その結果、教員はダンスが「得意」で「経験」がある人ほど、「授業の成果」を認めているが、「指導経験」は「授業の成果」に影響を及ぼさないことが分かった。このことから、ダンスでは、自身の「経験」を増やして「得意」になるような機会を増やすことが「成果」につながるのではないだろうか。ますます研修会などでの学習に期待がかかっている。

柔道では「得意」な人ほど「授業の成果」は認めているが、自身の柔道「経験」や「指導経験」は「授業の成果」の項目によって影響に違いが見られた。具体的には「楽しい」と感じたのは「経験・指導経験」がある教員であり、「柔道は大切」と思えたのは「指導経験」がある教員であった。「柔道を経験してスポーツにも関心が持てた」や「技が身に付いた」については、自身の「経験」や「指導経験」は関係していない事が分かった。この事から、柔道では「指導経験」を積むことが、「楽しさ」や「大切さ」をより感じる事に繋がるのではないだろうか。

質問項目	【ダンス】			【柔道】		
	得意	経験	指導経験	得意	経験	指導経験
授業は楽しかった	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	p<.001	p<.001
大切なもの	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	n. s.	p<.001
スポーツにも関心	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	n. s.	n. s.
技が身に付いた	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	n. s.	n. s.

3. 指導方法に対する意識の違い

教員の指導方法と生徒の性差と教員間の関係をみてみた。指導方法は「運動のコツやポイントを指導している」「生徒をほめるようにしている」「ていねいに教えようとしている」の3項目である。その結果、「運動のコツやポイントがわかった」のは男子生徒であり、「先生にほめてもらえた」と思ったのは女子生徒である。このことから、男子生徒には技能を中心に指導し、女子生徒には少しのことでもほめることに留意すれば、授業への意欲を喚起できると思われる。

生徒と教員の受け止め方では、教員は「運動のコツやポイントを指導している」「生徒をほめるようにしている」「ていねいに教えようとしている」つもりでも、生徒側は「あまり思わない・全く思わない」としており、両者間の受け止め方にギャップがあることが分かった。これらを踏まえれば、教員は今まで以上に意識して、生徒の指導に当たる必要性が示唆された。

質問項目	男子	肯定度	女子	有意差	生徒	教員
コツやポイント指導	1.92	>	2.02	p<.001	そう思う	248名
					あまり思わない	110名△
					全く思わない	140名△ 40名△ 2名
ほめる	2.24	<	2.19	p<.001	そう思う	19名
					あまり思わない	202名
					全く思わない	145名△ 230名△ 6名
ていねいに教える	1.87	>	1.88	n. s.	あまり思わない	80名△ 1名
					全く思わない	126名△ 23名
					全く思わない	42名△ 1名

*表の数値は平均値であり、数値が少ない方が肯定している。

また、△は限りなくその確率が高く、▼はその確率が少ないことを意味する。

4. 教員の経験や得意度と指導内容の違い

教員のダンスや柔道の「得意」「自身の経験」「指導経験」の差と、「指導内容」との関係を見た。以下にクロス集計の結果を示す。

(1) ダンス

学習指導要領のダンス領域では、創作ダンス、現代的なリズムのダンス（リズムと略す）、フォークダンス（FDと略す）の3つの内容と、各ダンスの具体的内容も提示されている。しかし、先行研究によると、「振付ダンス」や「体育祭などの特別活動で踊っておしまい」にしている現状も見聞しており、それらも考慮して4つの設問を設定した。

その結果が次の通りである。創作ダンスや現代的なリズムのダンスやフォークダンスにおいては、自身の経験や指導経験があるほど、基本的な内容である「即興的に表現する」や「リズムに乗って自由に踊る」、そして外国のフォークダンスを行っていることが分かった。また、指導経験があるほど、創作ダンスや現代的なリズムのダンスでは、作品創作や振付ダンス、作品を発表・鑑賞するところまで、フォークダンスでは日本の民踊を行っている傾向があることがわかった。これには、教員のダンス得意度や経験は影響していない。

この結果は、実は大きな課題もはらんでいるのではないだろうか。創作ダンスの作品創作や発表鑑賞、現代的なリズムのダンスの振付ダンスや発表鑑賞において、教員の指導の仕方は、作品発表までの数時間のやり方だけ指示すれば、何も教えなくとも成立する可能性もあるからである。だから、教員の得意や自身の経験は反映されていないのかもしれない。

創作ダンス	得意	経験	指導	リズム	得意	経験	指導	FD	得意	経験	指導
即興表現	***	***	***	自由	n. s.	***	***	外国	***	***	***
作品創作	n. s.	n. s.	***	振付	n. s.	n. s.	***	民踊	n. s.	n. s.	***
発表鑑賞	n. s.	n. s.	***	発表	n. s.	n. s.	***	発表	n. s.	***	n. s.
体育祭	n. s.	n. s.	n. s.	体育祭	n. s.	n. s.	n. s.	体育祭	n. s.	n. s.	n. s.

表中の***は $p < .001$ (有意水準 0.1%以下) を示す。***は未経験の教員ほど発表鑑賞をしている。

(2) 柔道

柔道の指導内容は『中学校学習指導要領解説 保健体育編』の中に例示された内容を設問にしている。教員の柔道の「得意」「自身の経験」「指導経験」の差によって、「指導内容」に違いがあるかをみたところ、「得意」「自身の経験」「指導経験」がある教員ほど、「基本動作」「受け身」「投げ技」「固め技」を指導していることが分かった。つまり、経験に裏打ちされて得意と思えた教員は指導経験もあり、そうでない教員はこれらの内容を「教えていない、教えられない」とも考えられる。これらの傾向は、ダンスと比べ大きな違いである。この背景には、柔道は習得すべき技が明確であり、経験がなければ教えられないということになる。しかし、基本動作、特に姿勢などは経験の有無に関係なく、指導している。また、投げ技については未経験者は指導していない。以上の結果から、柔道では、学習指導要領解説に提示された内容を指導できるようになるには、経験を積まなければならないということが示唆できた。

指導内容	得意	経験	指導	基本動作	得意	経験	指導	受け身	得意	経験	指導
基本動作	***	n. s.	***	姿勢	***	n. s.	***	前回り	***	***	***
受け身	***	***	***	進退	***	***	***	横受け身	***	***	***
投げ技	***	***	***	崩し	***	***	***	後受け身	***	n. s.	***
固め技	***	***	***					前受け身	***	n. s.	***

投げ技	得意	経験	指導	固め技	得意	経験	指導
支え技	***	***	***	けさ固め	***	***	***
刈り技	***	***	***	横四方	***	n. s.	***
まわし技	***	***	***	上四方	***	***	***
指導なし	n. s.	***	n. s.	縦四方	n. s.	n. s.	***

***は未経験の教員ほど投げ技の指導をしていない。

第2章 柔道の取り組み事例

* 武道の必修化を受け、全国でも多くの実践が行われている柔道を、横浜市立中学校1年生で行った。指導者は柔道経験者であり、これまでも指導実践がある。今回は技能の獲得を主眼にして、中学女子に14時間で取り組んだ事例であり、指導助言者はオリンピック選手の強化指導にも当たっている一方で、生徒や学生の指導法にも卓越している木村昌彦教授である。

わかる・できる・つかえる技能の獲得を目指して学習に取り組む！

横浜国立大学教育人間科学部 木村昌彦 横浜市立西中学校 藤野信行

1. 授業展開の例示 —「つかえる」ための具体的表現の提示—

一般的に「わかる—できる」の学習機序が言われているが、身体動作においてはわからなくても「できる」場合が多く見られる。しかしながら、「できた」動作が様々な場面で「つかえる」のかというとなかなか上手い出来ないのが現状である。本授業においては「わかる（できる）—できる（わかる）—そしてつかえる」への段階に発展させる事を重要視して授業を展開する。

「つかえる」技能にするためにはコツを運動感覚として理解させる必要がある。そこでこれまで授業の展開においてコツの提示を行ってきた。例えば、受け身ならば単純に後ろに転がって後ろ受け身を実施するのではなく、転がる必要性や状況を具体的にイメージさせることを重要視してきた。バナナの皮に滑ってしまった時はどうするか？（以下、通称「バナナスリップ」と言う）等の具体性を持たせ、実際に投げられた際の受け身の技能を重視している。

2. 単元目標及び評価規準、並びに単元計画（14時間：図1参照）

【単元目標】

- ・ 基本技能と対人技能を身に付け、相手の動きに対応した攻防を展開できるようにする。 【技能】
- ・ 武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解することができる。 【知識】
- ・ 技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けることができ課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。 【思考・判断】
- ・ 武道に積極的に取り組むとともに相手を尊重し伝統的な行動の仕方を守ることができるようにする。 【関心・意欲】

3. 授業展開の例示 I —ICTを活用した運動感覚の提示—（9/14時間：図2参照）

柔道の投げ技は頭で理解していても身体が思うように動かないことが多く見られる。教師からの言葉での指導（聴覚的）を理解しても個人に適した運動感覚を提示できないのが現状である。また教員による投げ技の示範（視覚的）においても同様のことが考えられる。さらに生徒同士での言語活動においても示範された動作と対象者が行った動作を即時に比較してアドバイスを与えるのは困難である。そこで今回はipadを用いて自分たちのパフォーマンスを即時フィードバックし、互いに技の確認を行うことで運動感覚の提示を行うと共に、アドバイスや自分たちの動きを表現するという言語活動に結びつけていく。

<実践のポイント> 柔道の投げ技の時術は相手との関係で行われるために技能獲得が困難であり、運動感覚の提示が重要である。教師が指導の手立てを工夫し、ICTを活用し自らのパフォーマンスを即時フィードバックすることで、生徒達は表したい感じのイメージをもつことができ、動き方がわかり、進んで学習に取り組むことができる。

図1 単元計画（14時間）

段階	時間	学習内容と活動	指導上の留意点
導入	1	○柔道に関する基礎知識 <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・柔道の歴史・特性・礼法 等 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○学習計画の確認 ○学習上のきまりの確認（礼法を含む） <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・畳の敷き方・整列の仕方・礼法 ・柔道衣の扱い方・着方 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○基本動作と受け身 1. 受け身について 【後受け身】 ・頭を打たないための動きの確認 ・基本動作の確認 <単独> ・仰向けの姿勢・中腰の姿勢 ・立位の姿勢（バナナスリップを含む） ・移動しながらバナナスリップ ※倒れた際左・右どちらでも受け身が取れるように逆手でも練習する <相対> ・蹲踞の姿勢で大外刈りを掛けられてからの受け身の練習 	○基礎知識の習得からどのように柔道を学習させていきたいか生徒自身に目標を持たせる。 ○学習計画の確認をし、授業でどのような点を学ぶのか意識させる。 ○学習の決まりを確認することで、けがを予防するための意識を高めさせる。 ○受け身の指導を通して、受け身の基本的な形を指導する。（一斉指導を中心として） ○安全に配慮し、禁止事項の徹底をはかる。 ○受け身は「易→難」「単独→相対」というように多様な方法で指導する。 ○投げ技と関連させた受け身の練習を工夫する。 ○注意事項を毎回確認させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>取：受けの引き手を離さない。</p> <p>受：帯を見ることで頭部を守ること 畳を正しく叩くこと 叩く手を確認すること</p> </div>
		展開	2 5 7
【横受け身】 <ul style="list-style-type: none"> <単独> ・仰向けの姿勢・中腰の姿勢 ・立位の姿勢 ※倒れた際左・右どちらでも受け身が取れるように逆手でも練習する <相対>			
○蹲踞の姿勢で出足払いを掛けられてからの受け身の練習 ○蹲踞（片膝姿勢）から前に崩してからの受け身の練習			
8 5 1 2	2. 抑え込みについて 【けさ固め】 【横四方固め】 <ul style="list-style-type: none"> ・形と逃げ方の練習 ・受、取を決めての練習 ・寝技の自由練習 	○抑え込みの条件を理解させて、形にこだわらず抑え方を工夫させる。 ○相手をかえるときに、礼法を徹底させる。 ○一人打ち込みで技の基本的な動きやポイントを意識させる。 ○技に入る前の崩しや体さばき、投げられたあとの受け身のとり方を指導する。 ○投げ技と関連させた受け身を習得させるため、約束練習に時間をかける。 ○反復の回数を多くし、生徒自身工夫しながら技を身につけられるように練習時間を確保する。	
	3. 投げ技について 【膝車】 【支え釣り込み足】 【体落とし】 【大腰】 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>一人打ち込みで技のフォームの確認</p> <p>↓</p> <p>お互いに組んで技の練習</p> <p>↓</p> <p>実際に投げる</p> </div>		
まとめ	1 3 4 5	○技能試験 ○体育ノートのまとめ	○技能試験を通して、技の理解度を確認する。 ○ノートのまとめを行い、学習の振り返りをする。

3-1 ICT 機器活用のポイント

- 1) ICT 機器の視覚的に動きを提示できる機能を活かし生徒に投げ技への興味・関心を高めさせる。
- 2) 自分の動きを静止画的に想像させるのではなく、3 次的に動作を確認することで思考力・判断力を高める。
- 3) 自分の思い描く動作と実際の動作を比較することでフィードバック性を高め技能を高める。
- 4) 互いに動画を見ながらアドバイスをし合うことで言語活動を促進させる。

3-2 取り組みの成果 -生徒たちの感想から-

- 1) ipad を用いる前は技のイメージが湧かなく自分が何をやればいいのか難しかったが、自分の動作を確認することで思い描いていた動作との違いを理解できた。
- 2) 仲間のアドバイスも最初は何を言っているのか理解できなかったが、映像を通して言葉を聞くとやっと理解できた。
- 4) 最初はただ映像が面白かったが、徐々に友達のアドバイスが変わってきた。
- 5) 最初は写真のようなイメージでしか自分の動作を想像できなかったが、全体の中の動作で見ることができてわかりやすかった。
- 6) 映像を見て面白かったが、何をアドバイスしてあげるか分からなかった。

以上のような意見があり、ICT を用いた即時的なフィードバックを利用することでイメージと実際の違いを理解し、自らも誤差を修正するための運動感覚を理解できると共に、他者へのアドバイスも表現しやすくなり、言語活動の充実も図れた。

3-3 ICT を活用した学び合い

ICT を用いた学び合いでは、映像を見ながら話し合うことで、互いの動きの特徴を明らかにすることができた。動画を用いて互いに意見を交わすことで、理想とする動作と実際の動作の比較をすることができた。互いに動きを振り返ることで、言語活動の充実も図れたと考えられる。生徒達も実際の動きを即時フィードバックできたことで、今までにない具体的な課題を発見できた。今後は、タブレットの台数を増やし、子どもたちが扱いに慣れ、日常的に活用しきる環境を整えていきたい。

3-4 今後の課題

- 1) 生徒の感想にもあったように、映像の「見る視点」を明確にして、どのようにアドバイス（助言方法）をするか等の具体的な指示を行わないと、単なる娯楽になる危険性も感じた。
- 2) 授業のどの場面で ICT を用いるかが重要なポイントである。また、「即時的に用いるのか？」「時間差を持って用いるのか？」などが重要である。

4. 授業展開の例示Ⅱ —投げ技の攻防に焦点を当てて— (12/14 時間：図3参照)

安全に留意した柔道の楽しさ！

柔道授業では、いかに安全に投げ技の攻防まで展開するかが、大きな関心・課題になっている。学習指導要領においては「基本の技を用いて攻防まで」と明記されているが、基本の技から自由練習への展開が困難である。練習ではできた投げ技が自由練習では出せない、互いに腰を引いた防御姿勢で自由練習が成立しない。また、教師側としても安全面の確保に自信が持てないなどが、課題としてある。そこで、本授業においては、基本の技を用いた約束練習を3ステップ設定にした。

<実践のポイント> 柔道の自由練習は実際に投げる投げられる際の安全確保が重要であり、柔道の攻防を通して柔道の特性が学ぶことができる。基本の動作を用いて、最終的に攻防へつなげるために約束練習を3パターンに変化させた。

図3 授業展開の例示Ⅱ（12/14時間） 安全面に特化した投げ技の攻防を体感する！！

<p>導入 10分</p>	<p>1. 学習の準備をする。 ・集合隊形に集合する。 着座～黙想～座礼 ・生徒の出欠確認をする。</p> <p>2. 準備運動をする。</p> <p>3. 受け身のドリルを行う。 ・横受け身 ・後受け身 ・バナナスリップ ・前回り受け身 ・大内刈りの後ろ受け身 ・小内刈りの後ろ受け身など</p>	<p>○安全に留意して学習に取り組む構えをつくらせるために黙想、座礼を礼儀正しい態度で行わせる。 ◎礼儀正しい態度で取り組むことができているか。</p> <p>○自分の体や心の状態に気付かせるように準備運動をさせる。 ○受け身のポイントを理解させて、各種類の受け身の復習をさせる。また、投げ技に応じて受け身を変化させて実際に投げられた際の安全確保を行う。</p>
<p>展開 30分</p>	<p>4. 前時の復習 (1) 抑え込みの約束練習をする。 ・赤帯、白帯をつける。 ・「取」と「受」をローテーションする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>○横四方固めの復習 ・抑え方、逃げ方</p> <p>○けさ固め復習 ・抑え方、逃げ方</p> </div> <p>5. 本時のめあて発表</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>安全な技の攻防を行う！！</p> </div> <p>(1) 「ステップ1」の説明をする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>①自分がしっかり立っておく ②相手が一歩足を出した時に技を掛ける ③タイミングを考える</p> </div> <p>(2) 「ステップ2」の説明をする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>①相手が技を掛けて戻った所に技を掛ける ②リズムカルにおこなう</p> </div> <p>(3) 「ステップ3」の説明をする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>①相手が技を掛けて戻った所に技を掛ける ②リズムカルにおこなう</p> </div>	<p>○前回教えたポイントを意識させながら、練習に取り組ませる。 ◎前回教えたポイントを意識してできているか。 ○赤帯・白帯を付けさせ「受」と「取」の役割をはっきりさせる。 ○投げる方向を統一し、安全面に配慮して行わせる。 ○周りながら適宜指導、助言をする。 ◎安全面を考えて、練習に取り組むことができているか。 ○（補）抑え込みのポイントを理解できていない生徒には、教師がついて指導する。</p> <p>○一人ひとりが目的意識をもって、学習に取り組むことができるように流れを確認させ、めあてを理解させる。 ◎前時の反省からのつながりを持って本時の学習内容を理解し、学習の見通しを立てることができているか。 ○「取」には、組み合った状態で、進退動作や体のさばき、崩しなどのポイント確認させる。 ○できるだけ体格が近い生徒同士で練習させる。 ○「取」は、相手を投げたあと引き手を離さないように指導する。</p> <p>○「受」には、どのタイミングで受け身をするのか理解させる。 ○安全に気をつけ、ケガのないように注意する。また、「受」は頭を打たないこと、腕全体で受け身をとれるようにさせる。 ◎基本動作が理解できているか。</p> <p>○3人一組で実施させる。一人が二人の攻防を見てアドバイスを行う。また、動作が終わった後も次の展開に向けたアドバイスを行う。 ◎効率的な技の入り方を工夫することができているか。</p>
<p>まとめ 10分</p>	<p>6. 本時のまとめをする。 ・取は、技を掛けるポイントを意識できていたか？ ・受は、相手の技のタイミングを理解し体感できたか？ ・約束練習のステップ1、2、3を理解して行えたかの確認、また仲間のアドバイスを自分の動きに活用できたについて改善できたのか？ (1)学習ノートに反省を記入する。 (2)あいさつ、健康観察 着座～黙想～座礼</p>	<p>○「取」と「受」の視点に立って、学習の成果を確かめることができるように反省をさせる。</p> <p>○ポイントをおさえて、反省できているか確認をさせる。</p> <p>○練習の成果や課題・めあての達成状況を確認するように促す。</p> <p>○黙想、座礼を礼儀正しい態度で行わせる。 ◎礼儀正しい態度で取り組むことができているか。</p>

4-1 約束練習導入の目的

学習指導要領に基本の投げ技を用いて攻防までを目的とするとあるが、多くの場合において基本の投げ技から自由練習の攻防まで繋がらない。できた技が攻防でつかえないことが授業中では多くあるこのことから、最終的に自由練習へ繋げる前段階としての安全な攻防を行える約束練習を考案した。

4-2 約束練習の3ステップ

- (1) ステップ1：「取り」と「受け」に分かれて1分間、「取り」が自由に動きながらさまざまな技を仕掛ける。1分後、「取り」と「受け」が交代し同様のことを行う。次に相手が一步出た時にタイミングを見計らって技に入る。
- (2) ステップ2：1分間、自由に動きながら交互に技を掛ける。この際、同じ技を交互に掛けなくてもよいことを強調する。できるだけ多くの種類の技を掛けさせることがポイントになる。
- (3) ステップ3：この段階では3人一組に編成する。以下に留意事項を記載するが、その事項を厳守し思いきり攻防を行う。この時は試合時の礼法を同時に行わせる。約2分間の間合いで直立になり立礼をする。次に左足から1歩前を出て全力で互いに技を施す。二人が約束練習を実施している際にもう一人は二人にアドバイスをを行う。また終了後に次へのプラスになるアドバイスを行う。

4-3 留意点

- ① 積極的に技を掛けること
- ② 腰を引いた防御姿勢にならないこと
- ③ 相手を絶対投げないこと（投げたら反則負け）
- ④ 技を掛ける人は絶対に潰れないこと

4-4 取組の成果 -生徒たちの感想から-

- (1) 最初はどの様に技をかければ良いのか分からなかったが、「相手の足が一步出た時」という技を出すキッカケが示されてからは、技を出しやすくなった。
- (2) 技に入るタイミングが難しいが、相手が抵抗しないので失敗しても繰り返し技をかけることができた。
- (3) 投げたら反則負けになるが、ついつい投げてしまいたくなる。
- (4) 投げるつもりはないが、時々タイミングよく投げてしまうことがあった。
- (5) 実際に投げ合いをしないので怖くなかった。
- (6) 実際に投げ合った攻防をしたくなった。

以上のような意見があり、最初はタイミングがつかめなかったが、投げられることはないという安心感から、徐々に思い切った技を施せるようになった。また、短い時間ではあるが運動強度も高く、柔道の醍醐味を体感していた。また、常に第三者が評価することで他者へのアドバイスも表現しやすなり言語活動の充実も図れた。

5. 実践の成果 -約束練習から自由練習へ-

約束練習を経験することで、同じ技ばかりに偏重しやすい自由練習で多くの技が用いられるようになる。また、投げない攻防を経験したことで、腰を引いた姿勢や手を突っ張るなどの動作を抑制できる。さらに攻防の動きを既に約束練習で経験しているので、自由練習の動きのコツを理解することになる。約束練習から自由練習への発展させることが有効的だと考えられる。

安 全 に 配 慮 し た 投 げ 技



「スポーツいろいろ」から
『カップ何コンマの差が人生を決める』



「走るー跳ぶー転がる」から『乙女たちの舞い』



第 3 章 ダンス・表現運動の取り組み事例

1. 小・中連携を意識した表現運動

横浜市立矢向小学校 田屋 多恵子

1. はじめに

【小学校の現状】 小学校の体育において多くの領域の中で表現運動は、指導者から「どのように指導してよいかわからない」や「どのような動きがよい動きなのか」など聞かれることが多いが、表現運動も他領域と同様であり、経験させたい動き、つまり指導目標を明確にもっていれば、よい指導が行えると考えます。指導と評価の一体化の考えからすると、指導をおこなったあと評価を子どもに返し、指導目標が定着するための様々な手立てや支援をおこなっていけば、表現運動の特性にふれる楽しさを十分味わうことができると考えます。今回の4本の授業実践は、それらを検証できる実践であったと思う。

【本取り組みについて】 この授業実践は、横浜市の教育課程研究委員会の表現運動の提案向けに実践されたものである。授業者は横浜市の表現運動研究部の部長である。授業者自らが授業を組み立て実践し、まとめている。よい授業では、授業者が子どもたちの実態を把握したうえで指導目標を明確にもち指導にあたることが重要だとされている。しかし、その評価は子どもの様子を見とり、随時子どもにフィードバックするものであり、子どもたちとのずれが生じた時には随時改善を行い軌道修正を重ねてよりよい授業にしていく必要がある。この実践はそのような意味からも単元の中で適正な評価を行い、それを子どもに返し、授業改善をおこなっていくものであったと思う。

① 低学年 熟練教師の観察による市の研究会所属者の授業実践

本実践は、横浜市小学校体育研究会表現運動研究部の授業である。授業者は、この市の研究会に所属しているものである。市の研究会では、ここ数年高学年の実践が多くなされており、低学年の授業実践は研究会としても、ここ数年ではめずらしい。けれども、表現運動が低学年から中学年へそして高学年さらに中学校と繋がって行くことを考えると、低学年ではどのような楽しさを味わわせておくことが大切なのかについて研究が深まったと考える。またそのことによって中学年や高学年の表現運動の姿についても明確になったと授業者は述べている。

② 中学年 熟練教師の観察による初心者の授業実践

本実践は、初任者である授業者が、熟練教師のアドバイスをを受けて実践した授業である。表現運動に取り組む際の課題として、いつも多くだされる疑問は、「どのように動けばよいかわからない。」や「自分が表したいものがうまく表せて、相手に伝えるられているか。」というものである。そこで、本実践は教師としても初任者が取り組むということで、同校の熟練教師（表現運動指導経験30年）が、かかわりながらともに授業を創っていった。心と体を解放するためのほぐしを十分行うことその他、表現運動の指導で課題となる「どのように動いてよいかわからない。」を解決するために、①よりよい動きの全体化と②タブレット端末を活用した学び合いに取り組んだ。このことにより、表したい動きが明確になり、わかる・できる授業が成立したことは、若手教員が多くなった現状において、経験のない教員でもこのような手立てをうつことによって「わかる・できる学習」が展開できるという一つのよいモデルとなったと考える。

③ 高学年 熟練教師の観察による中堅経験者の授業実践

本実践は6年生の実践である。授業者は、経験15年の教師である。区の体育の授業研究の実践である。高学年の多様な題材の領域であり、授業者は、小学校の思い出という投げかけから、表わしたい印象的な出来事をつめ、表したいイメージを強調するように、「はじめ一なか一おわり」を付けた簡単なひとまとまりの動きにして友達と感じをこめて踊ることをねらいとした。またこの授業の熟練教師である観察者は体育の指導主事経験者であり、この小学校の高学年の表現運動で特性にふれる楽しさを十分味わうことによって、中学校や高等学校そして生涯体育へつながっていくことを期待してまとめた述べている。

④ 学年表現運動Ⅱ 横浜市の表現運動研究会部による実践

「指導と評価の一体化」を目指した授業の実践」

①【低学年】「題材の特徴のイメージを豊かにもって踊れる」「なりきって踊れる」 楽しさを味わえる表現リズム遊びの授業

「にこ☆きらランドにレッツゴー」

横浜市立左近山小学校 1年 成瀬聡子

＜実践のポイント＞「題材の特徴のイメージを豊かにもって踊れる」「なりきって踊れる」
楽しい授業の実現のために、身近な動物や関心のある動物を題材とし、イメージがわくよ
うな資料の準備や授業の組み立ての工夫をする。さらに前半に軽快なリズムに合わせて踊
る時間を確保することによって楽しさを味わえる授業を展開しようと考えた。

1 取り組み時の課題

素直で好奇心旺盛で新しいことに挑戦することが大好きなクラスである。身体を動かすことが好きな子どもが多くリズムカルな音楽がかかると自然と身体を動かしている。低学年の表現リズム遊びは、「表現遊び」「リズム遊び」で内容を構成している。これらの運動は身近な動物や乗り物などの題材の特徴をとらえて、そのものになりきって全身の動きで表現したり、軽快なリズムの音楽に乗って踊ったりして楽しむことができる運動遊びである。しかし、子どもたちの中には特徴ある動きが見つけれず自信がないせいか動きが小さくなってしまったり、友達を見ながら動いても一人では動けなかったりする子どももいて、十分に授業に楽しく取り組んでいるとはいえない様子が見られた。

2 取り組みの目的

- ① 子どもが題材の特徴のイメージをとらえて、そのものになりきって全身の動きで表現できるような手立てを考え、なりきって踊る楽しさを味わえるようにする。
- ② 「表現遊び」を中心にして扱うが、ほぐしの前半の部分では軽快なリズムの音楽に合わせて踊る時間を十分確保することにより、より子どもの発達特性にあった授業を展開する。

3 取り組みの内容と工夫

①他教科との関連の重視

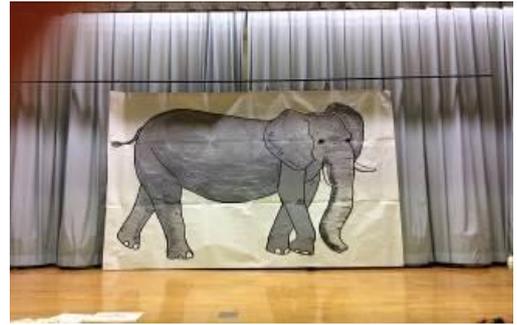
今回の実践では、特に「題材の特徴のイメージを豊かにもって」と「なりきって」というところに視点をあて授業を考えた。学級の中で、子どもたちが、どのような動物に興味をもち、またその動物の特徴についてどの程度知っているかなど、聞き取りで調査をおこなった。

子どもたちは動物の大きさや住んでいる所などについては断片的に知っているものの、それぞれの動物の動きの特徴についてはイメージがわからずどう動いてよいかわからない姿も見られた。そこで、この時期に学年の行事として設定されている「ズーラシア動物園」の遠足や生活科の「いきもの大すき」と関連させて扱うことで、子どもたちが自分の好きな動物や生き物を見つけ、題材の特徴を具体的につかむことで動きにつながるようにした。

②題材の特徴がわかりやすい資料の準備

動物の絵の掲示

ズーラシア動物園にいる様々な動物や生活科の「いきもの大すき」で学んだ生き物を壁等に掲示した。



③低学年の特性を生かす前半のほぐしの工夫

「表現遊び」に入る前の前半の時間に、軽快なリズムに乗って踊れる「エビカニクス」や「妖怪ウォッチ体操」で律動的に楽しく踊る時間を十分確保した。

④題材の特徴を動きに表しやすい言葉がけ

身体のいろいろな部分を使って
大きく動くことができるように

「ゾウさんにへーんしん!」「どっしーん」
「鼻を伸ばして水あびしよう。」

変身するものの特徴のある動きで踊れるように

「ゴリラがバナナを見つけて大喜び」



4 取り組みの成果

- ① 行事や生活科などに関連させて扱ったことで踊りたい動物の「題材の特徴」がしっかりと捉えられ、具体的な動きがわかり踊ることができていた。
- ② ゾウの動きを表そうとしていた子どもは、絵の掲示を見て、どっしりした歩き方など特徴をとらえた動きができた、言葉がけによって子どもたちが動物の特徴をとらえやすくなったりした。具体的な特徴のある動きで踊ることができた。
- ③ 前半では「エビカニクス」「まねっこ遊び」「これくらいのお弁当箱」「妖怪ウォッチ体操」など律動的なリズムに乗って踊ることや子どもたちが夢中になって全身を動かせる動きを十分取り入れたことにより、子どもが、なりきって楽しく踊れる授業が展開できた。

5 低学年の表現リズム遊びから表現運動へ

「表現リズム遊び」の時になりきって、身近な題材の特徴をとらえて全身で踊ったり、「リズム遊び」ではリズムに乗って楽しく踊ったりする楽しさを十分味わえていれば、さらに中学年では、身近な生活などの題材から主な特徴をとらえて即興的に踊ることを楽しんだり、リズムの特徴をとらえてリズムダンスを楽しく踊ったりすることができると思う。

(横浜市立矢向小学校 田屋多恵子)

②【中学年】

できる・わかる喜びを味わい、進んで学習に取り組む子の育成 ～子どもの姿に応じた表現運動の指導～

「Let's ○○探検」

横浜市立潮田小学校 4年 加藤 拓

<実践のポイント>

- ・ ボール運動や器械運動などには意欲的に取り組む姿が見られるが、表現運動となると、不安や抵抗を示す児童が多い。表現運動の楽しさや喜びに触れ、表したい感じを表現するには、子どもの姿に応じた指導を行うことが大切である。
- ・ 教師が指導の手立てを工夫すれば、子どもは表したい感じのイメージをもつことができ、動き方がわかり、進んで学習に取り組むことができる。

1 子どもの姿と指導の手立て

表現運動の学習経験が少なく、どのように動いたらよいかわからない、人前で踊るのが恥ずかしいという児童が多い。そこで、進んで表現運動の学習に取り組むために、以下の手立てを行うことで、できる・わかる喜びを味わえるようにしていく。

① 十分なほぐしの確保

表現運動の経験の差を踏まえて、心と体を解放するためにほぐしを十分行う。最初は音楽を使ってリズムカルに自由に動き、曲の途中で変身タイムを設け自分のイメージで好きなように体全体を動かす。次にタンバリンの合図で多様な動きを経験させ、2人組で対立・対応など相手を意識しながら動くほぐしを行う。1時間目は20分、2時間目は15分、3時間目は10分と学習時間が進むにつれてほぐしの時間を少なくしていく。子どもの実態に合わせ、ねらいに合った様々なほぐしを十分確保していく。



② 資料の掲示・よりよい動きの全体化

イメージを膨らませ、動きのヒントとなるような資料を掲示しておく。児童が活用している体育読本を拡大し、イメージした題材を書き込んで、いつでも誰でもすぐに見れるようにしておく。「場面・様子・音・リズム・空間・動き」など、子どもの動きや言葉からよりよい動きにつながるヒントを資料に記入し、掲示して全体化していく。

③ タブレット端末を活用した学び合い

「踊る一見合う一踊る」活動の中で、見合いの際にタブレット端末で撮影した動画を使って、自分の動きを客観的に見ながら、友達からのアドバイスを映像で確認する。その後、踊りを直してよりよい動きにしていく。タブレット端末を活用して、動きを共有しながら学び合いを充実させる。

2 取組の成果

① 十分なほぐしの確保 → 意欲的な活動

表現運動の学習に慣れていない児童は、教師が率先して動きや言葉かけを行うことで、体を大きく動かし思い切り声を出しながら楽しく踊ることができた。ペアでのほぐしでは、はずかしがっていた児童もみんなと一緒に動くことで安心感や楽しさを味わうことができ、意欲的に活動することができた。



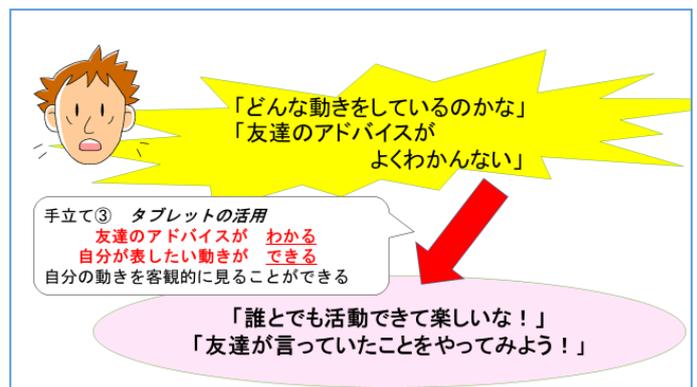
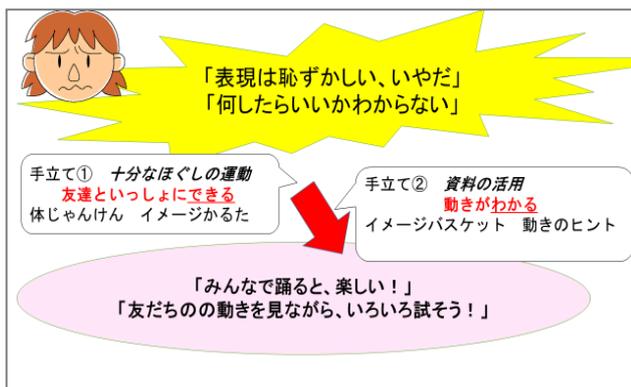
② 資料の掲示・よりよい動きの全体化 → わかる・できる学習



子どもたちが掲示してある資料をみて、どんな探検をしようか、イメージを出し合って決めていた。イメージしたものを動きに表すために、ヒントとなる動き（多様な動き）の例や場の使い方、工夫の仕方を参考にしながら踊っていた。子どもが工夫している動きを認め、全体化することで、他の児童も自分の動きに取り入れていこうとする姿が見られた。

③ タブレット端末を活用した学び合い → 表したい動きの明確化

タブレット端末を用いた学び合いでは、動きの映像を見ながら話し合うことができた。動画でめざす姿を意識しながら動きを考えたり、アドバイスされた動きを確認したり、自分の動きを振り返ることができた。全員にタブレットを見せながら、よい動きを全体化することもでき、子どもたちは表したい動きを明確にしながら進んで学習に取り組んでいた。今後は、タブレットの台数を増やし、子どもたちが扱いに慣れ、日常的に活用しきる環境を整えていきたい。



3 中学年から高学年の表現運動へ

成長のプロセスにおいて高学年になると、表現運動に対してさらに抵抗を感じる子が増えると予想される。中学年で表現運動の楽しさに触れ、自分の思いを動きに表すことができる学習を充実させることで、高学年になっても進んで表現運動の学習に取り組むことができると考える。

③【高学年】熟練教師の観察による中堅経験者の授業実践

できる・わかる喜びを味わい、進んで学習に取り組む子の育成

～表現運動を通して～

「大好き BEST 寺尾の思い出☆」

横浜市立寺尾小学校 6年 木村恭子

<実践のポイント>

- ・「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」の育成には、体育科の学習で「できる喜び」「わかる喜び」を実感させることが大切である。
- ・表現運動は、他の領域に比べ「できる喜び」「わかる喜び」を実感しにくい領域ではあるが、単元計画などを教師が工夫すれば、子どもは「できる喜び」や「わかる喜び」を実感することができる。

1. なぜ、「できる喜び」「わかる喜び」が大切なのか

体育科の目標である「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ためには、体育科の学習で運動の楽しさを十分に味わわせる必要がある。運動の楽しさの中核となるのは「できる喜び」であり「わかる喜び」である。

「運動をしたい」という思いや願いを原動力にして、進んで運動に関わりながら自分のめあてを達成したり実現したりして、「運動って楽しい」と実感する。その過程で、身のこなしや技ができるようになっていたり、友達との関わり方や運動の行い方がわかったりする。そのような授業が、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ために必要である。

2. 表現運動における「できる喜び」と「わかる喜び」

「平成 26 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果報告書」によると、表現運動やダンスを「教えやすい」と感じている教師の割合は他の領域に比べてやや低い。また、「よくできた・ややできた」と「できる喜び」を実感している児童生徒の割合も、相対的にやや低い。つまり、表現運動・ダンスは、体育学習の中核である「できる喜び」や「わかる喜び」を実感しにくい領域ということがいえよう。

しかし、教師が工夫をすることで、表現運動やダンスでも、子どもは「できる喜び」や「わかる喜び」を実感することができる。本実践では、その具体例を提示したい。

3. 「できる喜び」「わかる喜び」を味わわせ、進んで取り組むことができるようにするために

表現運動において、子どもに「できる喜び」や「わかる喜び」を味わわせ、進んで取り組むことができるようにするために、以下のような点を工夫して実践した。

①単元計画の工夫

イメージをどのような動きで表せばよいかかわからない子どもが多かったので、身近に感じているもの（修学旅行、トリムコースなど）を題材にして単元を構成した。

身近に感じるものを題材にしたので、子どもはイメージを持ちやすく、動きに表しやすかった。その結果、「わかる喜び」や「できる喜び」を実感することができた。

②身に付けさせたい動きの明確化

身に付けさせたい動きを明確にし、それを身に付けることができるようにするために、ほぐし（慣れの運動）を繰り返し行った。具体的には、リズムダンスをしたり、運動課題（「走って倒れる」など）やイメージ課題（波の動きなど）をした。そして、その時間を十分確保した。その結果、単元後半では、身体全体で動いたり、空間を大きく使って動いたりする子どもが増えた。

③ペア・グループ学習

お互いに声をかけ合いながら学習を進めることができるように、ペアやグループで学習した。子ども同士の関わりが増え、動きの高まりが見られた。また、自分以外のペアやグループのめあてを知ること、動きのポイント等の理解を深めることができた。



④学習カードの工夫

身に付けさせたい動きを明確にとらえたり、自分のめあてを確認したりするため、学習カードに動きのポイントやめあてを言語化するようにした。一人ひとりがめあてを書くことで、めあてが明確になり、個人や集団での動きの高まりにつながった。また、教師にとっても一人ひとりをとらえる貴重な情報となり、個に応じた指導・支援につながった。

⑤学習資料の工夫

イメージをとらえたり、動き方を確認したりするために、絵や図、コメントなどの入った学習資料を掲示し、子どもが活用できるようにした。それらの資料を使いながら、自分のイメージを動きにしたり、動きの質を高めたりする子どもの姿が見られた。



4. 表現運動からダンスへ

現代において、ダンス（ポップホップ、民謡、社交ダンス等）は生涯スポーツとして重要な領域である。それは、ダンスは特別な運動経験がなくとも、みんなで楽しむことのできる運動だからである。小学校の表現運動では、十分「踊る楽しさ」を実感できるような学習が求められる。小学校で「踊る楽しさ」を味わった子どもたちが、中学校や高等学校でのダンスの学習に意欲的に取り組み、生涯スポーツにつなげていくことを期待したい。

＜横浜市立潮田小学校 熟練教師 近藤 浩人＞

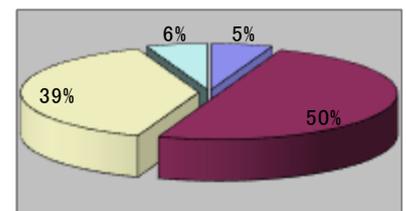
④【高学年】市の表現運動研究会部長による実践

「指導と評価の一体化」を目指した授業の実践

単元名 「心に刻んだ思い出を表そう！日光物語」(6年生) 横浜市立桜岡小学校 須藤 憲司

1 実践のポイント(実態の適正な把握)

＜子どもの実態＞表現運動に関する事前アンケートから見ると、36人中「とても好き2名」「好き18名」「あまり好きではない14名」「好きではない2名」という、約半数が表現運動に対しマイナスイメージを持っているという結果だった。好きではない理由として、「どう動いてよいのか分からない」「この動きで合っているのか分からない」「失敗しないか」「恥ずかしい」「幼稚である」などが上げられていた。逆に楽しさを感じることは、「体いっぱい動けた時」「友達と協力できた時」が多く、友達と協力し励まし合い、自分たちがやってみたいことを表現し、友達のよいところを見つけていきたいという意見が多かった。これらの実態を踏まえ、「いつ(時期)」「何を(視点)」「どのように(方法)」見とるかが授業改善のポイントと考えた。



- とても好き
- 好き
- あまり好きではない
- 好きではない

2 指導と評価の実際

授業に入る前



体を思いきり動かして自分の表したいものになりきって踊る表現運動の楽しさを味わわせたい。どうやって動けばいいのか、学習内容をしっかり教えることで、学び合い認め合えるようにな

第1時

Aさん

Aさんは、バトンクラブで動くことは好きだが、表現運動は低学年向けのように思えてあまり好きではないという。嫌なことは表情にも表れ、友達に対する影響力が強い(アンケート・日



<子どもの実態をとらえた上での単元の手立て> ~ほぐしを多く取り入れる~

事前アンケートから児童の実態を把握し、第1時はほぐしを多めにしてどのようなほぐしにのってくるか様子を見る。「友達のよいところを見つけたい」という項目を選んでいた児童が多かったので、2人組、4人組で行うほぐしも取り入れた。

<評価> Aさん 表したい感じをとらえて踊ることができる。(観察・学習カード) 方で少し踊っていた(観察)。4段階の自己評価カードには、「楽しく踊れた→2」「友達の動きの工夫を見つけた→2」と評価が低かった。(自己評価カード)



<授業改善>

- ① お互いのよさを認め合えるように、2人組で踊る時間を増やそう。
- ② ビデオを見せ、2人組でイメージを共有し、具体的な動きを考えることができるようにしよう。



第2時

<第2時の手立て> イメージを共有して、初めから2人組で活動するなど、2人組で踊る時間を多く確保した。

<評価> 友達の動きや活動のよいところを見つけ、認め合おうとする。(観察・学習カード)

Aさんは友達と協力し、自分達でアイデアを出し合って踊り、表したいものをイメージして踊る楽しさを味わっていた。(観察) 自己評価カードには、ほとんどの項目で最上位の「4」をつけていて、満足のいく活動ができた。(自己評価カード)



第3~5時

<評価> 一番表したい感じを強めるように、動きや群の動きの取り入れ方を工夫している。(観察・学習カード)

互いを意識して動くなど、自分やグループの持ち味を生かすような課題を見つけている。(観察・学習カード)

第3~5時ではリーダーシップを発揮し工夫を凝らし、グループの持ち味であるヒップホップ系の動きを生かした作品を作り上げ、発表することができた。(観察)



第3時

Bさん

Bさんは、「自分の動きが周りから変に見られていないか」という不安から、好きではないと答えている。先生や友達から褒められ認められたいと思っている（アンケート・日常会話の間



<授業改善> 具体的に褒め、友達とよいところを見つけ合い励まし合える場面を作ろう。

<第3時の手立て> ~イメージの共有~

題材とめあてをグループごとに十分に話し合いイメージを共有することで、安心して友達と活動できるようにした。また群の動きを具体的に指導し動きのバリエーションを増やせるようにした。

<評価>

☒ 一番表したい感じを強めるように、動きや群の動きの取り入れ方を工夫している。（観察・学習カード）

湯滝の水の流れの激しさを表すのに、順番に岩にぶつかる様子を表した。同じ動きを繰り返し、動きはやや単調だった。（観察）



<授業改善>

群の動きの「順番に!」「一斉に!」「バラバラに!」などのキーワードの中で一つだけ取り上げていたので、組み合わせることで迫力が増すことを助言した。そして、それを見合っている他のグループにも伝えるようにし



第5時

<評価>

☒ 「はじめ—なか—おわり」の起伏を考え、簡単なひとまとまりの作品にまとめて発表することができる。

第5時の発表会では、男体山の噴火を「一斉に!」「バラバラに!」等の群の動きを取り入れ、「はじめ—なか—おわり」をつけた迫力ある作品にして発表した。（観察）

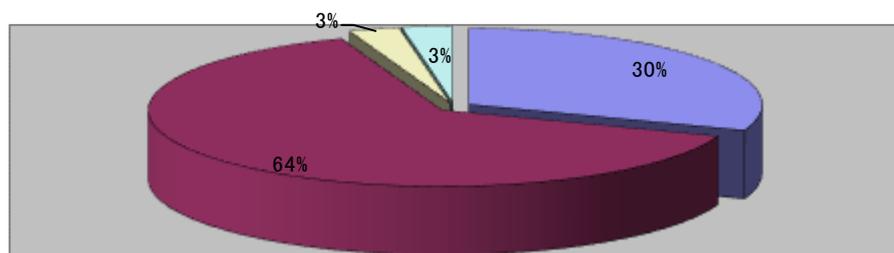
自己評価カードでは、多くの項目で4をつけ、事後アンケートでは、表現運動は「とても楽しかった」と満足のいく活動ができたようだ。（学習カード、アンケート）



3 単元のまとめと今後の展望

事前アンケートや聞き取りから、児童の表現運動に対する思いや願いを把握し、実態に合った計画を立てた。1時間ごとの自己評価カードがとても参考になり、毎時間の授業改善に生かされた。特に高学年の活動として、ペアやグループでの活動を充実させることが大切で、学習内容に即したアドバイスをし合い、認め合うことで、満足のいく活動ができた。さらに他のグループに見てもらいアドバイスももらえるような時間が確保できれば、学び合いを深めることができる。事後アンケートでは、「とても楽しかった」「楽しかった」と9割以上の児童が答えていた。「中学校でも、自分の表したいものを友達と協力して力いっぱい表現したい!」という児童もいた。自分の表したいものになりきり、心と体を解放して踊る表現運動を、これからも楽しんでもらいたい。

事後アンケート結果



■とても楽しかった ■楽しかった □あまり楽しくなかった □楽しくなかった

2. 初心教員が取り組む中学校のダンス

試して得する

① 生徒も先生もダンスが好きになる！！

～文部科学省『表現運動及びダンス指導の手引き』に基づいた授業を実施して～
横浜市立橋中学校 竹生田恵美・河野寛子・三浦明希子

Plan 取り組み時の課題と目的

1. 取り組み時の課題

平成 20 年の改定で、中学 1 年生及び 2 年生において、ダンスの授業が必修となった。本校においては、ダンスを習っている者もあり、多くの生徒はダンスに対する興味や関心が高い。例えば、「みんなで振り付けを考えたり、踊ったりするのが楽しい」「自由に踊れて全身で表現できる」と感じている。一方、「人に見られるのが恥ずかしい」「リズム感がない」「ステップができない」と感じている生徒もいる。

必修化に伴って、ダンス未経験の教員がどのようにして授業を展開していけばよいかを考え、そこで何を身につけたらよいか、授業実践を通して検証していきたい。

本校のダンス領域授業は、次のように行っている。1 年生では 6 月頃に「マイムマイム」「オクラホマミキサー」「コロブチカ」のフォークダンスを学習している。入学後比較的早い時期のため、創作ダンスでは積極的にアイデアを出していくことが難しい。フォークダンスのような型のあるダンスを踊り、交流して楽しめることは、スタートして間もないクラスにおける生徒間の距離を縮める効果もあると感じている。

2 年生では学年の状況に応じて、男女別修で創作ダンスを学習している。授業時間の多くを班ごとの創作にあてているが、座って話し合っている時間が長くなりがちで、運動量の確保ができていないことが課題である。また、ダンス経験者が振りを考え、それをみんなで覚えて発表することが多い。体全体を使って大きく自由に表現できないことも課題である。

これらのことを、『学校体育実技指導資料 第 9 集 表現運動系及びダンス指導の手引』（文部科学省 2013）を参考にすることで、どのような効果があるかを試してみたい。

学年	履修形態	時数	ダンスの領域
1 年	男女共修	4	フォークダンス
2 年	男女共修（クラスのよっては別習）	10	創作ダンス・現代的なリズムのダンス
3 年	男女共修	11	現代的なリズムのダンス

2. 取組の目的

- ① 『ダンス指導の手引』の単元計画を参考に実施する。また、生徒の反応、教師が感じたことや課題をまとめ、今後の授業に活かす。
- ② ダンス未経験の教員でも、自信をもって授業を実施し、生徒が「踊る楽しさ」を味わえるようにする。
- ③ 運動量の確保、メンバー全員による創作活動を行うために、どのような指導をするべきか考える。

Do 取り組みの内容

1. 参考にした実践

『ダンス指導の手引』の単元計画を参考に授業を実施する。また、生徒の反応や教師が感じたことや課題をまとめる。

2. 授業のねらい

ダンスの單元には、「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の3つがある。本校では、1年で「フォークダンス」を実施しているため、2年のダンス單元では、ウォーミングアップで毎時間、現代的なリズムのダンスで体をほぐし、その後、創作ダンスを行っている。

現代的なリズムのダンスでは、リズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って全身を弾ませて踊るようにする。

創作ダンスでは、多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化を付けて即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ることができるようにする。また、多様なテーマを自分がイメージしたことを即興的に表現し、仲間と関わって踊る。動きを見せ合い、発表では仲間の動きのよさをお互いに認め合えるようにする。

3. 単元の目標

- (1) 積極的に取り組むとともに、よさを認め合おうとすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。(態度)
- (2) ダンスの特性や、踊りの由来と表現の仕方、課題に応じた運動の取り組みを工夫できるようにする。(知識・思考・判断)
- (3) 多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化を付けて即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ることができるようにする。(創作ダンス・技能)

※他のダンス領域の単元目標

(1) フォークダンスの単元目標

踊り方の特徴をとらえ、音楽に合わせて特徴的なステップや動きで踊ることができるようにする。

(技能)

(2) 現代的なリズムのダンスの単元目標

ロックやヒップホップなどのリズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って全身で自由に踊ることができるようにする。

(技能)

4. 単元計画

学習段階	多様なテーマを手がかりに、変化を付けたひと流れの動きで即興的に表現する。				
	整列・挨拶・5分完走・準備体操・補強運動・サバイバルダンス (TRF)				
毎時間の小テーマ	オリエンテーション	身近な生活や日常動作	対極の動きの連続	ものを使う	多様な感じ
	ダンスの特性	「スポーツいろいろ」	「走るー跳ぶー転がる」	「新聞紙」	「鋭い・やわらかい感じ」
1時間の学習の流れ	<p>① 創作ダンスの楽しさ・魅力を知る。 ② 学習の見通しを持つ。</p> <p>③ 太鼓のリズムに合わせて体を動かす。</p> <p>様々なステップ (スキップ、ツーステップ等)</p> <p>隊形の変化をつけて (分散～密集)</p>	<p>毎時間の小テーマから、イメージを膨らませて、思い浮かぶ特徴的な動きを即興的に表現する。</p>			
		<p>↑</p> <p>スピードの変化と緩急を生かした動きの誇張。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大げさな動きで誇張して表現する。 ・一番表したいところを繰り返して踊る。 ・表情も付けて表現。 	<p>↑</p> <p>高さや段差を強調したメリハリのある動きの連続</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対極の動きや極限の動きを組み合わせ、ダイナミックな動きで即興的に踊る。 	<p>↑</p> <p>見立てて踊る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞紙になりきってそのものの質感を表現する。 ・新聞紙を何かに見立ててイメージをふくらませて表現する。 	<p>↑</p> <p>変化のある動きの組み合わせ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緩急、強弱の動きに合わせて踊る。 ・鋭さ、やわらかさというそれぞれの特徴をイメージして表現する。
		<p>表したいイメージをとらえ、動きに変化を付けて踊る。</p> <p>(1) はじめとおわりを工夫する</p> <p>(2) 動きに変化を付けて、ひと流れの動きにして見せ合う (発表)</p>			

表したいイメージを選んで、グループで変化と起伏のあるひとままとりの動きにして踊る。		発表会	
整列・挨拶・5分完走・準備体操・補強運動・サバイバルダンス (TRF)			
テーマにそって振り付けを考える。			
変化と起伏のある「はじめ-なか-終わり」のひとままとりの動きにして表現する。 ・踊りこみをする。 ・動きを見せ合って発表する。お互いのよいところを認め合う。			
・動きに変化をつけて、一番伝えたい表現をさらに工夫する。 ・はじめ・おわり・クライマックスを工夫し、ひとままとりの動きにする。			
① グループ作り ・自分が踊りたいテーマに近い人とグループを組むようにする。 ② テーマ決め 「柔らかな感じ」 「普段の生活で何かを表現」「激しい」 など	・班で見せ場をどこにするかを考える。 ・テーマに合った動きやアイデアを1人1回は、出すようにする。		よいところを認め合える発表会の雰囲気作り ・作品後の拍手で発表会を盛り上げる。 ・作品や発表者のよいところを見つけ、カードに記入する。
	隊形移動の工夫 空間の使い方を考える。 ・手先や足だけでなく、頭から足先まで使って、大きく動いて表現する。	リハーサル ・本番と同じように各班約2分間、体育館半面を使って行う。 ・本番に向けアドバイスし、よりよい発表会になるようにしていく。	

5. 実施報告

(1) 対極な動きの連続「走る—跳ぶ—転がる」

	学習活動	教師の働きかけ
授業展開時の様子	<p>1 学習内容と課題の確認</p> <div data-bbox="209 443 686 685" style="background-color: #76b82a; color: white; padding: 10px; border-radius: 15px;"> <p>「走る — 跳ぶ — 転がる」 対極の動きを組み合わせ、ダイナミックな動きで即興的に踊ろう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 学習のイメージが膨らむよう、例を示しながら説明する。 走る→ゆっくり・速く・小刻みに 跳ぶ→大きく・小さく・前後・左右 転がる→前転・横転 これらの対極の動きをつなげるとダイナミックに見えることを、模範を通して理解させる。 リズム太鼓を使い、動きを誘導する。
	<p>2 それぞれで「走る」「跳ぶ」「転がる」</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <div data-bbox="188 1115 316 1182" style="border: 1px solid green; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;">走る</div> <ul style="list-style-type: none"> それぞれの「走る—跳ぶ—転がる」を組み合わせ、ひと流れにする <p>3 2～4人組でグループ創作（10分間）</p> <ul style="list-style-type: none"> タイトルをつける 3つの動き（走る—跳ぶ—転がる）を入れる <p>4 発表</p> <ul style="list-style-type: none"> 1班ずつ前に行う <ul style="list-style-type: none"> 鑑賞中は作品のよいところ（面白いと思ったところ、動きの良かった人など）を見つけられるようにする。 どこが良かったか、班の代表者が感想を言う。 	<div data-bbox="869 840 1377 958" style="background-color: #3498db; color: white; padding: 10px; border-radius: 10px; text-align: center;"> <p>どんな走り方、跳び方、 転がり方があるだろう？</p> </div> <div data-bbox="890 996 1377 1070" style="background-color: #3498db; color: white; padding: 10px; border-radius: 10px; text-align: center;"> <p>人とは違う跳び方をしてみよう！</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 動きの切り替え時には、流れが途切れないよう声をかける。 10分後に発表ということを始めに伝える。 一人一つはアイデアを出せるように。 <div data-bbox="898 1534 1225 1780" style="text-align: center;">  </div> <ul style="list-style-type: none"> お互いのよさを認め合うために、作品を見る視点を伝える。

★ 学習カードより

<p>【よかったこと】</p> <ul style="list-style-type: none">・自由に弾み動きに変化をつけることができた。・円になったり、密集したりすることができた。・簡単な課題でいろいろ話し合いながら考えるのが、楽しかった。・みんなで息を合わせながら踊った。・全身を使って、大きく踊れるように意識した。・最初は恥ずかしかったけど、楽しくできた。	<p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none">・もっとハキハキとした動きを入れればよかった。・色んな動きを考えることができて、いつも以上に活動して疲れた。
---	---

グループ創作の様子 『ベルトコンベアー』



★生徒の反応

教師のリズム太鼓に合わせ、走りながら跳んだり転がったり出来ていた。真剣に取り組みながらも、どうしたら高く跳べるか、どうしたら綺麗に転がれるかなど考え、意見を出しながら走る様子が見られた。

簡単そうなテーマでもあるが各グループお互いに動きながら、「ここはこうしよう」「それいいね」「もう少し大きく動いてみよう」など自然にコミュニケーションをとっていた。何分後かに発表してもらうことを伝えていたので、座っているグループはほとんどなく活動していた。

★教師の感じたことや課題

生徒にはまず教員が「走るー跳ぶー転がる」の模範を見せてから実施した。模範を見せることで、生徒もイメージしやすく、スムーズに動きに入ることができた。手引きに、教師用の模範例が記載されているとさらによかった。また、対極な動きの例として、「走るー跳ぶー転がる」以外にもいくつかあると、おもしろいと思った。

リズム太鼓を使うことにより教員も指示が出しやすく、生徒も興味を示す。興味が出るので、よく考えて周りアドバイスを出し合いながら、走ったり転がったりすることができた。

	学習活動	教師の働きかけ
授業展開時の様子	<p>1 ウォーミングアップ 新聞紙を落とさずに走る。</p>  <p>2 学習内容と課題の確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> 導入から新聞紙を使い、生徒の関心を高めるとともに、新聞紙の質感を確認させる。 <p>新聞紙を落とさないように、手をあげてやってみよう。</p>
	<p>見立てて踊る</p> <ul style="list-style-type: none"> 新聞紙になりきって多様な質感を動きで表現してみよう。 <p>3 2人組で命のリレー</p> <ul style="list-style-type: none"> 2人で1枚の新聞紙を用意する。 新聞紙を命と見立て、落とさないように大切にパスをする。新聞を持たない生徒もペアの相手と同じ動きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞紙はどんな質感か 上から落とすと？ ギュッと握ると？ 破いてみると？ 動きと指先で新聞紙を操作し、新聞紙の扱い方の模範を見せる。 手で持ってしまうと簡単。新聞紙の不安定さなど、ハラハラ感を楽しませる。 受け渡しのタイミングは、なるべくアイコンタクトで行えるよう、声をかける。
	 <p>大切な命！指先で丁寧に受け渡そう！</p> <p>全身を使って大きく！</p>	
		
	<p>4 新聞紙になりきる</p> <ul style="list-style-type: none"> 2人組で新聞紙になりきり、柔らかさ・軽さなど、質感を大事にして、全身を大きく使って表現する。 始めにどちらがリードするかを決め、もう1人はリーダーの動きを真似る。途中でリーダーをチェンジする。 <p>5 音楽を流して踊る</p> <ul style="list-style-type: none"> 2人組で気に入った新聞紙の表現を決定する。 曲が流れたら、全員で一斉に踊り始める。 2人組で自由に表現する。 	 <ul style="list-style-type: none"> 発想を豊かになりきって動くよう声かけをする。 「ビリビリッ」「フワッ」「カサカサ」等、質感を表す言葉を投げかけ、動きのヒントを与える。 頭の先から足の指先まで使い表現する。 使用曲『Let it go』 体を大きく使う。 場所の使い方も工夫をするように助言する。

★ ものを使う「新聞紙」学習カードより

<p>【良かったこと】・上にふわっと新聞が動いたら手も頭も上にジャンプした</p> <ul style="list-style-type: none">・新聞紙を使って、体を大きく動かして表現することができた。・自分が新聞紙になったつもりで、ふわふわ・くにやくにやしたりした。・色んな角度から新聞紙に向き合ったのは初めてでしたが、楽しかった。・新聞がなめらかな時は手や足を先まで伸ばす事を意識し、激しい時は、頭を回したり足をよく動かすようにした。・新聞以外のものも表現したい。	<p>【課題】・沢山動いて疲れた。</p> <ul style="list-style-type: none">・体を大きく使って新聞を表現するのはむずかしかった。でも、体を全て使って自由に動くのは楽しかった。・簡単そうで意外に難しい。
---	---

★生徒の反応

「新聞紙になるってどういうこと？」「新聞紙を使ってダンスってどういうことだろう？」と感じている生徒が多くいた。実際、新聞紙を使って走っているときに、最初は1人だったのが、2人で走ったり、最後には10人くらいで手をつないで走ったり、楽しそうに活動していた。

「命のリレー」も、体を大きく使って回ったり投げたり、想像以上に動いていた。「新聞紙になりきる」時では最初は恥ずかしそうに行っていたが、曲を流すと恥ずかしさもなくなり、体を自由に動かすはじめ、リズムに合わせて表現をすることができた。

Cheek 取り組みの成果

- ① 生徒達も何かものを使用して授業を行う事に興味をもってくれた。ダンスを踊ることに抵抗があった生徒も楽しそうに仲間と踊ることができた。
- ② 創作ダンスや現代的なリズムのダンスでは、始めから1つの作品をグループで振り付け、単元の最後に発表会をして終わることが多かった。今回の創作ダンスでは、最初に小テーマを提示し、その時間内に発表することを積み重ねた。時間を多く費やすのではなく、1時間1時間内容の濃い授業を展開することができた。
- ③ 単元の最後には総まとめとして発表会をしたが、どのグループも小テーマでの創作発表をしていたので、授業中も座ることなくお互いにアイデアをだし、体を動かす様子が見られた。従来の授業よりも運動量が増えた事は大きな成果である。
- ④ ダンス未経験の生徒も、単元終わりの発表に向けた創作で、より積極的に意見を出すことができていた。小テーマの創作経験が活きたのではないかな。

★教師の感じたことや課題

新聞紙を使用した授業は、生徒たちも興味深々だった。「体を大きく使い表現していこう」など声掛けをしていくと、体育館をめいっぱい使い、頭から足の指先まで新聞紙になりきって表現出来ていた。曲をつけて踊ると、それまでよりも気持ちの入ったダンスになっていると感じられた。私たち教員では発想しないような動きをしていたので、子どもってすごいなと感じた。

また、色々なパターンで、身近な新聞紙を使用して授業できることを知ることができて、勉強になった。自分自身と新鮮な気持ちで、子どもの関心や意欲も新たに引き出したので今後も取り入れていきたいと感じた。指導をしていて、とても楽しくできた。

- ⑤ 2学年のクラス編成上、1クラスだけ男女共修で授業を行った。男子がいることで、女子は恥ずかしさが増し、やりづらさを感じたようだ。男子は特にそのような反応はなかった。男子のダイナミックな表現、女子の柔らかい表現など、それぞれがお互いの刺激になるため、指導者としては男女共修の授業の方がよかったと感じた。
- ⑥ 教員として、『ダンス指導の手引』を実施してみて、細かく単元計画や指導案が記載されているため、ダンス経験がない教員でも、どのように授業展開をし、そこで生徒に何を身につけられるようにしたらいいのかが分かり、丁寧な指導ができた。
- ⑦ 授業では、指示を出すだけでなく教師も生徒と一緒に体を動かすことが大切だと感じた。恥ずかしがっていたり、座っていたりする場合には、近くに寄り添い一緒に踊ることで、生徒も徐々に体を動かすはじめ、ダンスの楽しさを体験させることができた。

Action 今後の課題

- ① 動きが小さい生徒が多くいるため、実際の自分の動きを映像などで撮ってすぐに見られるようにし、お互いにアドバイスなどが活発にできるようにしていくために、タブレットを使用した。しかし、各班で生徒が互いに撮影しては、動きや表現をフィードバックできるようにタブレットの台数を増やしたいと考えている。
- ② ダンスの経験者が振り付けを考え、それをみんなで覚えて発表することが多いことに対して、いい改善策を今後も考えていく。
- ③ 学習の振り返りカードの内容の充実を図りたい。
- ④ 教職員の研修を行ったり、外部の研修に参加して、学んだことを生徒たちに還元できるようにし、自らの指導力向上に繋げていく。

発表会の様子の写真 ㊦㊧『体育祭』『円』
横『春の目覚め』



【実践校の背景】研究代表者 高橋和子のコメント

横浜市の中学校は148校あり、政令指定都市の中では全国で一番多く、5年未満の経験の浅い教師も3割を超える現状である。横浜市教育委員会はダンス必修化に対応するため、研修会も開催しているが、多忙を極める中学教員全員がダンス研修を受けて、授業に生かすまでには至っていない現状もある。

そんな中、横浜市立橋中学校では、経験の浅い教員が授業実践に挑戦した。この中学校の生徒は771名おり、学校管理上、体育館や剣道場などの体育施設は授業時に教員が開錠して、授業後に施錠するやり方をとっている。生徒は体育施設に移動し着替え、窓や暗幕を開けるなどの準備をするため、正味の体育実技の時間は削られてしまっている状況である。

私が6月に初めてダンスの授業を見学した時は、本研究の「取組時の課題」に記述された通りの様相であった。教員の模範のリズムダンスでウォームアップを2回行った後、ダンス好きの生徒がグループリーダーになって、考えた振りをみんなに教え、用意した曲をデッキで流しながら練習していた。グループ内の動きもリーダー以外は小さく、恥ずかしそうにしていた生徒が多かったが、協力して発表会に臨む姿勢が感じられた。しかし、4時間目くらいになっても1分も創れていない。隊形も2列や円形のまま変化がない。創作ダンスのようであるが、現代的なリズムのダンスのようにも見える。そんな印象であった。

【熟練指導者の提案】

2学期に入り、一度もダンス授業を指導したことがない新任の先生が、いよいよダンスの授業をすることになった。そこで文部科学省発刊の『ダンス指導の手引』を参考にして、それに従う授業実践を提案した。教師としては一度もダンスの実践を見たこともないというので、教材「新聞紙」の授業を急遽、私（熟練指導者）が女子中学生にやることになった。12月16日は雨が降っていた。暗幕が引かれた冷え切った体育館の開錠から始まり、生徒が集まり授業が開始された。「音はならない・明かりはつかない」状況のまま、本時のやることを書いてきた紙を見せながら、丁寧に説明した。すぐ音楽をかけてウォームアップするという当初の流れは、変更せざるを得なかった。目を輝かせて説明を聞く子、何をやらされるのだろうかと思っている子、配られた新聞に目をやる子など、様々であった。なぜダンスをするのか、生徒たちにとってダンスをする意味を、踊りながら熱く語った。

いよいよ動き始めた。生徒の笑い声が聞かれた。面白がっている。導入でいかに心身をほぐせるかが、ダンスでは特に大事である。そして、今日やる課題（練習問題）を、シンプルに提示する。どんな動きをしても褒める。何をやってもよいという安心感を持たせる。そのためには、指導者自身の見本も大袈裟に、奇想天外に、表情や声色も変化させて、生徒の動きや思いを誘発させなければならない。授業の最初の10分が勝負である。特に互いに初対面ならば、なおさらである。

対象が子どもであればあるほど、動物的感覚で教師を値踏みして、子どもは自身の行動を決める。褒めてもらえ何でもやってもよい雰囲気の中なら、子どもはどんどん動きを生み出してくれるし、心身まるごとを解放してくれる。だから、単元の始まりは、とても大事なのである。生徒指導で見せる教師の顔が管理的でも、ダンスの授業では自由で解放された顔でなければならない。ここに中学教師は悩む場合が多いが、生徒はよく見ている。「これはこれ、それはそれ」と、各場面での教師の役割をわかってくれる。生徒を信用しなければならない。

さて、新聞紙になりきって動く課題では、「質感を変えて動けるか」「ひと流れで動けるか」「頭も全身も心も新聞紙になる」ことを促す言葉かけが必要になる。そのために、教師は体育館中、動き回り、褒めたり、「何を表現しているのか」「気にいった動きは何か」を尋ねたりする。生徒自身が見つけたイメージがうまく表現できていれば、特に褒める。この双方向のやり取りがあれば、次の時間のダンスも生徒は楽しみにしてくれる。幸い、初めての新聞紙の教材、初めての指導者の前で女子生徒は弾けていたし、冷え切った体育館でも汗をほとぼしりながら動いていたし、笑顔で体育館を去っていった。

【ダンス初心指導者の実践】

この授業を参考に、次は初任指導者が実践を行った。私が作成した授業の流れや課題が書かれた紙を使い、大げさに動きを提示し、明確な目標を掲げ「〇〇でなければ創作ダンスではない！」と熱く語って授業が始まった。先生が示範を見せるたびに、生徒は声を上げ面白がり、先生を受け入れているようであった。このことは、学習カードの生徒の記述からも伺える。実践した先生自身もこれまでのダンス指導と違って、新聞紙という「モノ」を教具に使い、授業展開もわかっている自信をもって指導できたように思う。たった一回の授業実践を見ただけで、初任の教師が生徒が楽しみながら踊る授業を行うことができた。教師としての能力が高いのか、教材が良いのか、生徒が熱心な教師に付き合ってくれたのか。理由は分からないが、「いま・ここで」たった一回きりの授業が何しろ上手いったのである。

以上のことから、初任の先生であっても、設定した目標に向かい、どんな教材をどのように使えばよいのか。どう授業を進め、どのように動いたり、イメージにあった動きを見つけて表現したりすればよいかが、生徒なりにわかれば、先生も生徒も迷うことは少なくすむ。そのことが立証された授業であった。

*筆者が初めて出会った中学生に行った「新聞紙」の授業、初任の女性教員が初めておこなった「新聞紙」の授業の映像の抜粋は、巻末のDVDに収録されている。

②生徒の興味・関心をひく楽しいダンスの授業の在り方

～生徒の意欲を高める導入について～

横浜市立洋光台第二中学校 寺田 峰子

1. テーマ設定の理由

ダンスの授業が必修となり学習に取り組むことになった。男女共に学習に興味・関心を持たせ、楽しい授業展開になるために、生徒の意識調査や授業内容や導入の仕方を研究していきたいと考え、上記のテーマを設定した。研究は、実態調査とそれを受けた実践研究である。

2. 実態調査の内容

(1) 対象者：横浜市磯子区の7校（生徒1,113名と教師7名）に「ダンス授業について」のアンケートを実施（2014年8月・9月）。

教師への項目は、①実践内容・導入の取り組み内容 ②教師が困っていること等

(2) 導入の内容を検討し、実践する。

(3) 実践後、生徒にアンケートを実施し（履修後の生徒の意識の変化）分析する。

2-1 中学生の調査結果

対象者	男子	女子	合計(名)
1年生	182	172	354
2年生	192	202	394
3年生	173	192	365

* 磯子区7校（浜・岡村・汐見台・根岸・森・洋光台第一・洋光台第二）。今年度はダンス授業をやっていない学校がほとんどである。

* 生徒に取った質問は7項目あり、下記にその結果の概要を示す。

質問① ダンスを習ったことがありますか（図1）

質問② ダンスに興味はありますか

質問③ 踊ることは楽しいですか

質問④ ダンス授業は好き（楽しい）ですか（図2）

質問⑤ どんなところが楽しかったですか

- ・ノリノリのできるから・みんなで息が合ったとき・協力できること・みんなで教え合うこと・達成感がある
- ・笑える、元気になる・運動神経が悪くても誰でも楽しんでできる・自分の好きな曲で振り付けできたこと

質問⑥ 楽しくなかったところはどんなところですか

- ・恥ずかしい・大恥をかいたことがある・つまらない・苦手・フォークダンスでの男女の接触
- ・やる人とやらない人の差が激しい・協力してくれない人がいた・作業みたいで面白くない
- ・覚えるのが面倒くさい・動きが決められているから・発表をVTRにとられるから

質問⑦ ダンスの授業でやってみたいこと

- ・ヒップホップ・現代的なダンス・自分の好きな曲・色々なジャンルの曲・学校のダンスを作ってみたい
- ・衣装など揃えたい・プロダンサーに教えてもらいたい・創作ではなくできている曲をクラス全員で踊りたい

図1に関しては「ダンスを以前習ったこと」のある生徒は2・3年生女子では3割程度だが、男子は1割以下であった。それが、1年生では男女合わせ約3割以上であり、ヒップホップ系のダンスをする歌手グループの影響やダンスの大会のテレビ放映などから、興味・関心が年々高まっていると思われる。また、図2の質問②③④に対する解答はほぼ同じ割合であり、学年が上がるにつれ、ダンスの楽しさやグループ活動の楽しさが感じられるようである。しかし、男子の意識はかなり低く、ダンスをあまり経験していないことも原因と考えられる。授業を楽しく導入することで、リズムに乗ってからだを動かすことは恥ずかしいことではなく、みんなで協力し合う楽しさや充実感を味わうことができ、運動が苦手な生徒でも頑張れる単元であることを理解させたい。質問⑤⑥⑦では「ダンスの楽しさや授業でやってみたいこと」を尋ねているが、特に「楽しくないと感じた」生徒の意見も考慮しながら、授業の内容を考えた教材や指導法を再考する必要がある。

図1 ダンスを習ったことがあるか

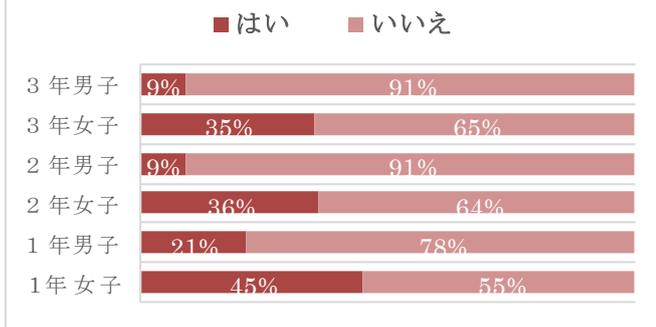
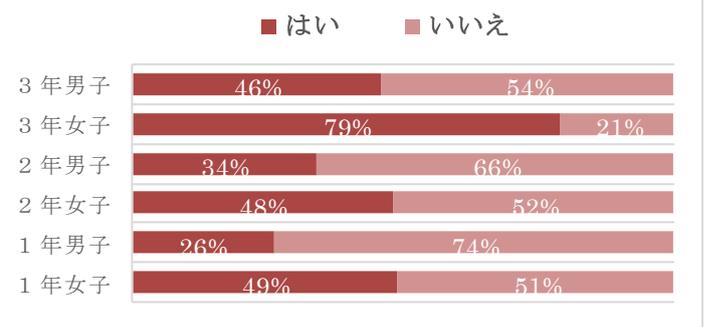


図2 ダンスの授業は楽しいですか



2-2 教師の調査結果

教師に取った質問は7項目あり、下記にその結果を示す。

質問⑧ ダンスの授業の内容は何か (7校)

(各1校) 表現・ヒップホップ・ジャズダンス・ソーラン節 (3校) リズムダンス (4校) フォークダンス

質問⑨ 導入の仕方を教えてください

- ・ビヨンセ・TRF・マイケルジャクソンの踊りの一部・曲に合わせて即興で体を動かす→友達の真似をする
- ・教師が作ったリズムダンスの動きを覚える・EZ DANCE 体操・ストレッチ体操・ジェスチャーゲーム
- ・フォークダンス (ジンギスカン・マイムマイム・ジェンカ・オクラホマミクスー・パティケークボルカ・ハーモニカ)

質問⑩ ダンスの授業で困っていることは何ですか

女性教諭・ダンスが「好き嫌い」な子の差が激しい・男女で組むフォークダンスはやりづらい。接触があるものは男女で組ませない・技術的な評価をするのが難しい・卒業シーズンに実施するので体育館が使えない。

男性教諭・評価がしづらい・共修なのでグループを男女混合にするが、グループ編成が難しい。

- ・ダンスの経験が無いので、映像や実技のテストなどを頼りにまず自分が練習することが必要でした。本当にこれで良いのか?という疑問と不安が常にあります。
- ・勉強不足でどう勉強したらいいかわからない。
- ・ダンスをやったことがない・体が堅くて思うように自分自身が動けない・気持ちが前向きにならない。

以上、生徒のアンケート結果はこれまでの授業の様子から予想されたものでもあり、再確認できた。教師の結果からは、どの学校にも不安や課題があるようである。多様な教材や指導法、評価方法などについて、学内外の研修会を通して、教師自身の学びを深める必要があると思われる。

3. 実践研究

中学生と教員の実態調査の結果を受けて、「中学生の興味・関心をひく楽しいダンスの授業の在り方」を探るために、「生徒の意欲を高める導入」を横浜市立洋光台第二中学校で実践した。具体的には、調査で分かった区内の各校で取り組んでいる「導入」①～④の教材を、中学1・2年生全員に2～3時間行い、生徒への質問紙調査（「ダンス授業前後の楽しさの変容」「導入教材の楽しさ」「感想」）も行った。

【導入教材】

- ① フォークダンス
- ② 曲に合わせて即興で体を動かしたり友達の真似をしたりして動く。その後2～3人組で16呼間の動きを作り、発表する。みんなの作品をつなげて次回のアップにする。
- ③ ジェスチャーゲーム (カードに書いてあることをジェスチャーして、正解をあててもらおう！)
- ④ EZ DANCE 体操を踊ろう！

3-1 実践研究の結果 (図3・4)

ダンス授業の前後に「授業の楽しさ」を聞いたところ、授業前の男子は14%、女子は41%だったが、授業後の男子は94%、女子は98%と、ほとんどの生徒は「授業が楽しかった」と受け止めている。授業の感想からは、「班活動や意見を言う楽しさ、作品を創上げる達成感」などが味わえたようである。特に男子では「最初は恥ずかしかったが、みんなで取り組んでいくうちに楽しくなった」という感想がほとんどであった。男子は「ダンスが嫌い」と決めつけるのではなく、実際にダンスをやってみると多くの生徒が楽しさや充実感を得ることができる素晴らしい領域であると改めて感じた。

ダンスの授業の生徒の感想

- ・やってみたら意外に楽しかった・体育は苦手ですが今までで一番楽しい授業だった
- ・楽しすぎてずっとダンスの授業にして欲しい・みんなで教えあい、創作することがとても楽しかった
- ・皆で作品を創り上げることは大変だったけど達成感は大きい・来年はもっとグレードアップしたい
- ・ダンスは苦手な嫌いだっただけ、みんなで意見を出してダンスを作るのはおもしろかった

ダンス導入教材の楽しさについて聞いてみた結果は、次の通りである。

4つの導入教材のどれもが、8割以上の生徒にとって楽しいと感じたようである。

「フォークダンス」は、体ほぐしはエグザイルの曲に合わせて踊った後、シングルサークルのハーモニカやマイム・マイムを取り上げた。とても盛り上がり楽しさを味わったようである。ただ、ダブルサークルのフォークダンスは性を意識して男女で組むことに抵抗を示しどう扱うかは今後の課題である。「即興で踊る」16呼間の創作ダンスはお互いの動きを真似することで発見があり、色々な動きをリズムに乗って踊れて楽しかったようである。最初は恥ずかしがる生徒も多かったが、面白い動きや大きく表現して動いている生徒を褒めることで恥ずかしさが徐々になくなり、色々な表現が出来て楽しかったようである。授業を行うに当たって、音響・映像機器（プロジェクター・パソコン・マイク・アンプ等）を上手に利用すると分かりやすく、雰囲気も高まり効果的であることが分かった。

導入教材を踊った生徒の感想

- ・どれもやったことがなかったので興味を持って取り組めた・楽しくて気が付くとずーっと笑顔でいた！
- ・即興のダンスが楽しかった。いろいろな動きがあり面白かった。・フォークダンスはみんなで盛り上がり楽しかった・細かい動きがよく分からなかった・やりたくない・もっと丁寧に教えて欲しい。

図3 ダンス授業の楽しさ

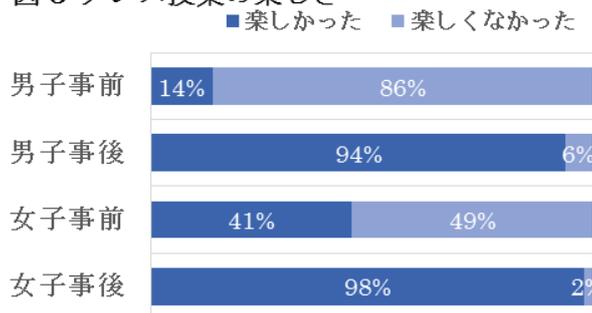
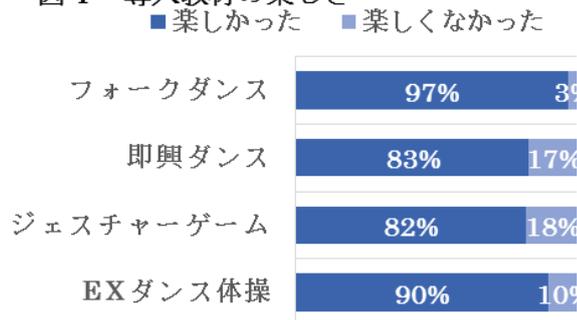


図4 導入教材の楽しさ



3-2 今後の課題

- (1) 教師側の技術の習得や、生徒のニーズに合わせた選曲や指導内容を工夫していく。
- (2) 3年間を見通した学習計画を立て取り組んでいく。
- (3) 音響・映像機材などを上手に利用して工夫する。

研究代表者 高橋和子のコメント

この研究は、平成26年度第52回横浜市学校体育研究会において横浜市立中学校教育研究会保健体育部（磯子区）として発表したものです。横浜市立洋光台第二中学校の寺田峰子先生はじめ、関係各位にこの場をお借りして、御礼を申し上げます。

ダンスが中学1・2学年で必修化し、各都道府県でも教員に対する研修を積極的に行っています（ダンスは85.1%実施：文科報告書26）。しかし、ダンス領域の指導については、どのような教材をどのように指導しどのように評価したらよいか、の知識や経験が少ないのも事実です。これは、横浜市だけでなく、今回の全国調査でもわかったことです。ダンス初心の教員が、まずは、導入教材からやってみるにより、生徒の意欲を高め、興味関心をひくことができます。教員はちょっとした勇気をもって、授業に臨むだけで、輝く生徒がいることが磯子区の研究から明らかになりました。そのことが生徒たちの今後の豊かなスポーツライフにつながることを思って、教員は、教材研究を行い、ダンス授業実践を継続的に行ってほしいと願っています。

<参考になる資料（無料のものもある）>

- 『小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック』、
- 『小学校 低学年・中学年・高学年（運動領域）デジタル教材（*YouTube へリンク）』
- 『新学習指導要領に基づく中学校向け「ダンス」リーフレット』
- 『学校体育実技指導資料第9集「表現運動系及びダンス指導の手引』
- 『中学校保健体育 DVD「ダンス」 第2巻 楽しく取り組む「現代的なリズムのダンス』
- 『学校体育実技 指導資料第2集「柔道指導の手引（三訂版）』
- 『学校における体育活動中の事故防止のための映像資料⑤ 柔道の安全な実施（保健体育科の授業）（*YouTube へリンク）』

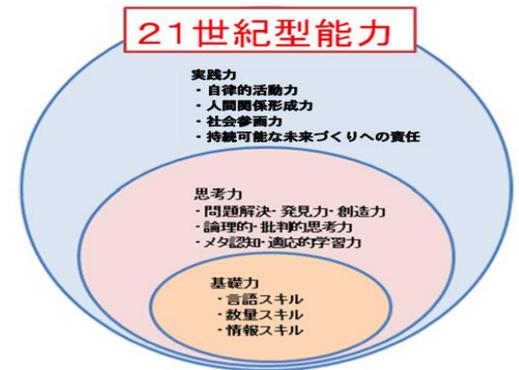
高橋和子公式 WEB サイトにも動画教材がアップされている。<http://kazuko-ynu.jp>

第4章 21世紀の体育科／保健体育科の学習評価

学習と指導と評価の一体化に向けて：アクティブ・ラーニングに即した評価になっていますか？」

「学習評価について再度検討してみましょう」

横浜国立大学 梅澤秋久



アクティブ・ラーニングとは

生涯学習社会における学校教育には、アクティブ・ラーニングが求められている。

アクティブ・ラーニングとは、能動的学習の総称であり、生徒が主体的・協働的に学びを進めていく学習方法だといえる。

そのような学習方法が求められるようになったのは、求められる学力が変容したからにほかならない。

20世紀までの学力、学習、評価

日本の高度経済成長期など産業主義社会では、決められた解答を速く正確にアウトプットする学力が求められた。ゆえに、教師が「教え」、生徒が「学ぶ」なかで既存の知識や技能を全員が画一的に身につける学習方法がとられていた。

体育では、決められた技の獲得が学習であり、いかに技を獲得させるかが指導となり、その獲得状況をチェックすることが評価となった。

しかし、生涯学習社会への変容に伴い、学校体育は生涯スポーツの一部と考えられるようになる。すると進学を含めた学校という社会の中だけで完結する

学力は、「学校内だけでしか使えない力」と揶揄されるようになった。

いくら「できる」ようになって、「わかる」ようになって、反復的なトレーニングによって「学習者がやらされた」と感じている場合は、能動的学習ではない。つまり、生涯学習社会である21世紀の学習ではないということである。

21世紀の学力・学習

21世紀は、知識基盤社会と呼ばれるように、新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる活動の基盤として飛躍的に重要性が増す社会である。「2011年に米国の小学校に入学した子どもの65%は、大学卒業時に、今は存在していない職につく」(C. Davidson, 2011)といわれている。日本は米国よりも資源の少ない先進国であるため、その傾向は一層顕著になると考えられる。

ゆえに、学校教育においても、既存の知識や技能を獲得する学習から脱し、生涯を通じて学び続けるための資質や能力の育成が希求されているのである。

右上の図は、21世紀型能力を表している(国立教育政策研究

所, 2013)。特徴は、「思考力」を中核としているところである。

それは、自ら学び判断し、自分の考えをもって他者と対話し、新しい知識をつくるために必要な力である。さらに、次の問いを見つけ、さまざまな課題を解決するための核となる能力でもあり、新しいアイデアの生成にかかわる問題解決力や論理的・批判的思考力、メタ認知などの能力を含んでいる。

その「思考力」を支えているのが「基礎力」である。「基礎」を反復させてから思考させるのは、20世紀型の手法でしかない。「思考力」を育成する学習に没頭する中で「基礎力」をも育成する授業のデザインが求められている。

体育科においても同様であり、仲間と能動的・協働的に運動とかかわることで、必要に応じて学習者が能動的に反復し「基礎力」を身につけ、結果的に生涯を通じて運動に親しむ「実践力」につなげていかなければならない。

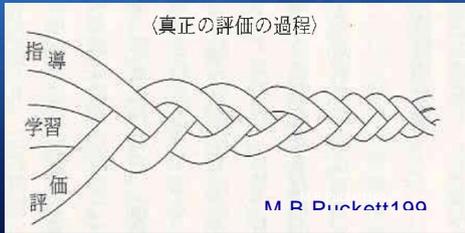
そのような能動性と協働性を融合した体育科のアクティブ・ラーニングにおける評価とはいかなるものであろうか。

アクティブ・ラーニングのための体育の評価

「学習と指導と評価の一体化」

「能動的な学び」では
「学習と指導と評価の一体化」が重要に

教師の「指導と評価の一体」に加え、能動的な学習における学習者の「学習と評価の一体」が強固に結びつけられていく。「評価ありき」ではない。



上の図は、M.Puckett(1994)による学習と指導と評価の関係を示した「シームレスデザイン」である。シームレスとは「継ぎ目がない」ことを意味しており、すなわち「学習と指導と評価の一体化」を表している。

図では、「学習」を中核としている。その学習は、学習者による能動的なものであるがゆえに、評価の主体も学習者が中心となるべきである。その過程において、メタ認知をしたり、問題解決力を発揮したりと「思考力」の育成に資することが可能となる。つまり、「学習と評価の一体化」が何より重要だといえる。

しかしながら、児童・生徒だけで評価をすると、恣意的な評価に陥ったり、専門性のないふりかえりとなったりする。そこで、教師による評価活動が必要となるのである。ここでの評価は、評定づけるための測定やチェックではない。学習者の学びをより良いものとするためのアセスメントである。

アセスメント”Assessment”の語源は、ラテン語の”asider”であり、「寄り添う」という意味である。つまり、学習者の学びに「寄り添い、見とる」評価活動が必要となる。

その評価は、個性的な存在である学習者一人ひとりに応じた

左図は、「真正の評価」

”Authentic-assessment”の過程を示したものである。

シームレス”seamless”デザインといわれる(M.B.Puckett, 1994)。

近年、評定のための評価で終始している教師が散見される。評定は評価の一部であるが、評定のための評価活動に終始しては、学習者の学びが深まったり、

適切なアドバイスといった支援や、ときには直接的な指導となることもある。それらの教師行動がアクティブ・ラーニングをより良いものにするためになされるのであれば、児童・生徒が「学習をやらされている」と感じることはないであろう。

20世紀の「指導と評価の一体化」と異なるのは、教師がアクティブ・ラーニングに応じた指導（支援）となっているかをふりかえるという点である。

以上のようなアクティブ・ラーニングに基づく学習評価は、学習と指導と評価の境界線が曖昧になるほど、継ぎ目なく強固な関係になるといえる。それが21世紀型の「学習と指導と評価の一体化」である。

教師は、学習者一人ひとりの学びを見とるための力、つまり「教育的鑑識眼」を鍛えていか

右図は、カリキュラム上の優先事項と評価法の種類との関係を示したものである。

「永続的な理解」や「知り、行うことが重要」なカリキュラムについては、パフォーマンス課題とプロジェクトによる評価が適している。

一方で、伝統的な筆記試験では、「永続的な理解」が必要なカリキュラムの評価には至らない。

つまり、アクティブ・ラーニングには、パフォーマンス評価が必要となる。



なければならない。

パフォーマンス評価

右下の図は、「真正の評価 authentic assessment」における「パフォーマンス評価」および「伝統的な試験」と「カリキュラム上の優先事項」との対応を示した図である(Wiggins & MCTighe, 1998)。

「永続的な理解」は、21世紀型能力においては「実践力」につながるものであり、生涯学習社会において生きてはたらく力である。そのような「永続的な理解」と親和性が高い評価は「パフォーマンス評価」である。それはプロジェクトが、複雑でオープンエンドな（多様な解答が存在する）パフォーマンス課題で示されることになる。さらにそのプロジェクトが、学校内だけで完結することがない（脱文脈化されてない）課題として、学習者と教師で共有されるべきものである。

体育科／保健体育科においては、創作ダンス、ボール運動の戦術学習などが、オープンエンドな解を探求するプロセスが重視されているものである。ゆえに、「パフォーマンス評価」が求められる

真正な評価の価値《カリキュラム論》から ウィギンスとマクタイによる「カリキュラム上の優先事項と評価法」の対応

《評価法の種類》

伝統的な試験

- 筆記
- 選択回答式
- 自由記述式

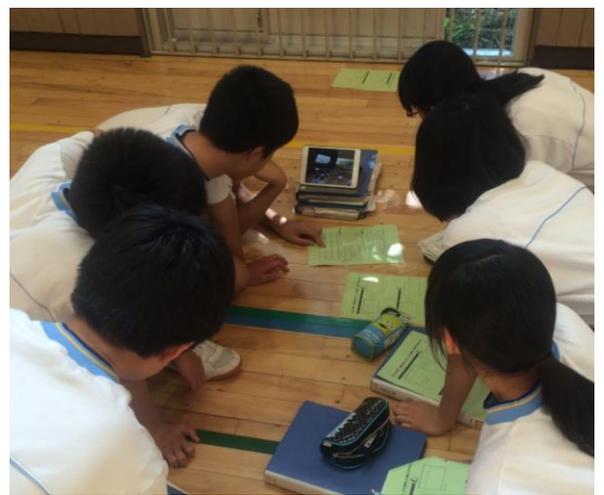
パフォーマンス課題とプロジェクト

- オープンエンド
- 複雑
- 真正

知っておく価値がある□

知り、行うことが重要である□

永続的な理解□



パフォーマンス評価における ポートフォリオ評価とループリック

ポートフォリオ評価

パフォーマンス評価を実践する際に重視すべきは、学習者による「ふりかえり」である。自身の学びをメタ認知し、次の学びを構成していくためには、学びの履歴を蓄積する必要がある。

その学習履歴を蓄積するモノをポートフォリオという。そのポートフォリオに蓄積された学びをふりかえり、新たな学びを創るために活用する評価方法をポートフォリオ評価という。

ポートフォリオは、個人用のファイルやグループファイル（左上画像）や動画データ（右上画像）、学級で生成されたアイデア（右下画像の模造紙）などさまざまな形態をとる。

決められた答えを獲得させる学習カードだけを蓄積してもポートフォリオとはよべない。20世紀型の「画一化された解」を獲得した証にすぎないからである。

ポートフォリオ評価には以下のような手順が求められる。

- 学習者の能動性と学習者同士の協働性を誘発するプロジェクト／パフォーマンス課題を与える。
- そのオープンエンドな学びの経過を蓄積する。
- 蓄積した学びの履歴をもと

- ふりかえりをもとに新たな学びの方向性を定める。
- 以上の「学習と評価の一体化」に教師のアセスメントを加え、「学習と指導と評価の一体化」を図る。
- 教師は、鑑識眼的評価を大切にし、学習活動への価値づけや賞賛、求めに応じて矯正的フィードバックをかける。
- 体育ゆえに、ふりかえりや話し合いばかりに時間を割くことがないように支援し、身体活動も重視する。
- 蓄積した学習履歴は、保護者への学習状況説明に活用する。

ここで新たに生まれる課題は、ポートフォリオ評価をいかに評定づけに活用するかである。

現行の学習指導要領では体育科の評定は到達度評価の形式をとっている。ゆえに、基準準拠型ポートフォリオに必要なループリックが不可欠となる。

ループリックの活用

ループリックは、採点指針ともよばれ、評価規準（見とるべきポイント）と数値（記号）化する段階ごとの基準を言語で示したものである（次ページ上段、表1）。

表1では、「課題設定力」の具体例として「ふりかえりをもとに次のめあてや活動を決めることができる」という評価規準に対し、A（よくできる）、B（できる）、C（がんばろう）の基準をそれぞれ文章で示している。



基準準拠ルーブリックの例

表1 「課題設定力に関するルーブリックの一例」

評価規準	自分の学びを振り返り、A,B,Cに○をつけよう。		
	A	B	C
「思考・判断」観点 ・課題設定力 「ふりかえりをもとに次のめあてや活動を決めることができる」	自分の活動を振り返り、良かった点や修正すべき点を明らかにできる。また、自分に合った新しいめあてや活動を決めることができる。	自分の活動を振り返ることができる。また、新しいめあてや活動を決めることができる。	自分の活動を振り返ることができない。新しいめあてや活動を決められない。(いずれかがあてはまればCとする。)
《A,B,Cを選んだ証拠・理由》 ファイルやVTRのどの学びからそう考えたかを具体的に書こう。(日付や書いたことなど)			

5学年「ボール運動」におけるルーブリックの一例
 「良かった点」や「修正点」はオープンエンドである

例えば、A 段階で求める子どもの姿は、「自分の活動を振り返り、良かった点や修正すべき点を明らかにできる。また、自分に合った新しいめあてや活動を決めることができる」である。

「良かった点」や「修正すべき点」を明らかにするプロセスで、メタ認知や相互評価など仲間との対話の必然性が生まれる。また、そのような「問題発見」は、新たな問題解決のプロセスへと、学習者自身が能動的に進めるように仕組まれている。

さらに、A 段階と B 段階、および B 段階と C 段階との差異は何かが明らかになっているため、学習者にとっても教師にとっても、より具体的な見とり評価が可能になる。つまり、自身に足りないことが明確になり、より能動的に学ぶための評価指針となる。

以上のことから、ルーブリックは、アクティブ・ラーニングにおける「学習と指導と評価の一体化」を誘発するツールだといえる。

加えて、このルーブリックの蓄積をもとに到達度評価を実施する旨を学習者と教師で合意形成していれば、ルーブリックを評定づけに活用することが可能となる。

気をつけなければならないのは、学習者だけの主観的なふりかえりは直接的に評定には活用できないという点である。

なぜならば、主観的なふりかえりは、恣意的になりやすいからである。内申点に直接かかわるとあれば、誰もが高くつけたいであろうし、性向として自分に厳しい児童・生徒は、常に辛めに評価するであろう。

評定づけに活用するためには、根拠をもとに評価することが不可欠となる。「良かった点は、○○だったことから」。「○○さんに『□□がうまい』と言われたから」と根拠のある自己評価はむしろ重要である。



現代は高度情報社会であり、質的な意思決定に際し、勘やひらめきを尊重しつつも、より正確でより信頼性のあるデータや情報を利用して意思決定がなされる社会、すなわち「Evidence Based Society (根拠に基づく社会)」に移行しているからである。

児童・生徒が Evidence (根拠) に基づいて意思決定する経験は重要である。アクティブ・ラーニングにおいて、自身の経験を根拠に、新たな学びを生成していくプロセスは、21世紀をより良く生きる人間形成に資すると考えられる。

教師は、専門職として、学習者の根拠を導き出すコーディネートも必要になる(右下画像)。学習者の主観的なふりかえりには、次のような切り返しが求められる。

「どの動きから、そう感じたの？」
 「『○○さんの動きがうまい』って言うけど、なぜうまく見えるのかな？」

これらは、寄り添い見とるアセスメントの一環であるが、単に既存の知識を教えるという次元を超えた教師行動である。このようなコーディネートは、学習者同士の関係のデザインだといえる。

豊かなかわり合いのなかで、互いの学びに寄り添い、根拠に基づく言葉かけをし合うことが、21世紀型の学習評価である。体育科/保健体育科の実践での活用が期待される。

第5章 映像教材

*この映像はすべてぶっつけ本番、何も練習なしで実践した授業を撮影し、編集している。

1. 中学校柔道の実践

第2章で取り上げた中学校1年生女子の柔道の取り組みの映像である。安全面に配慮した「投げ技」の攻防を体感することが主目的の授業である。本調査でも「投げ技」の指導が不十分である事を受けての事例である。この授業前の数時間は、ipodを用いて「投げ技」の出来栄を確認し、教員の支範やコツと生徒自身の動きの違いを言い合いながら、わかるとできるの統合を目指していた。そのために、本時の「約束練習から自由練習」では、動きのコツを理解し主体的に多くの技を用いようとする意欲が感じられた。

2. ダンスの実践

①中学2年生女子 教材「新聞紙」

最初の映像は、ダンスを初めて教える教員のために、熟練指導者が「もの」（新聞紙）を使って行った授業である。生徒たちとはこの時初めて出会った指導者であるが、「もの」を介して即興的に表現する世界に、生徒たちも面白そうに動いていた。次は、同じ教材を中学校の教員が行った映像である。教員がこの教材で何を生徒に身に付けてほしいかを強調している点も見どころである。

②教員養成大学 教材「走る・跳ぶ・転がる」「スポーツいろいろ」

第3章「初心教員が取り組む中学校のダンス」の単元で実践した、2つの教材「走る・跳ぶ・転がる」「スポーツいろいろ」を熟練指導者が大学生に80分の授業の中で行ったものである。ウォームアップは曲に乗って教員や学生の動きを真似するところから始まった。その後、1つ目の教材「走る・跳ぶ・転がる」につながる下位教材を2人組で遊び的要素を入れて行う。次は対極の動きである「跳ぶ・転がる」（高さが異なる）を、指導者は「ひと流れ」になるように提示し学生が動きを体験した後、イメージを誘発するような言葉かけをする。中間見せ合いをして仲間からアドバイスをもらい、最後の発表で終わる流れである。2つ目の教材「スポーツいろいろ」では、2つのやり方で行った。「ボールなしゲーム」（エアギターのように、あたかもボールがあるようにしてゲームを行う）で様々なスポーツを行うやり方。「群像」（テーマに基づいて即興的にグループでポーズを取る）で始まり、その感じを20秒くらい動き、最後にポーズを作るやり方。両者に強調して指導したポイントは「誇張」することである。「一番やりたい・面白い・見せたい」場面を強調するために、時間や空間に変化を与えること。スローモーションで動く、密集から広がるように動くなど。それらを指導者は班をまわりながら、見つけたテーマに合うようにアドバイスした。使った音楽は、各班の題名を聞いて雰囲気合うように選曲して流した。

③小学校での4年に渡る取り組み

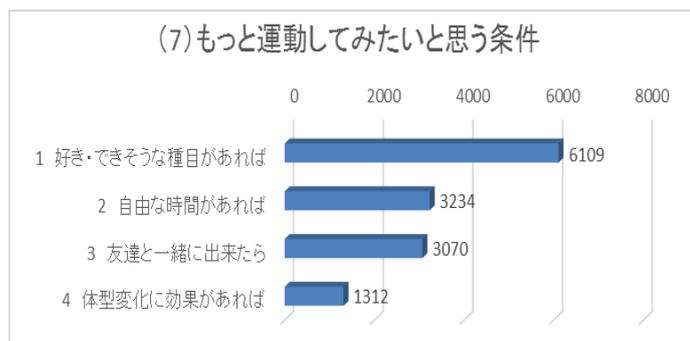
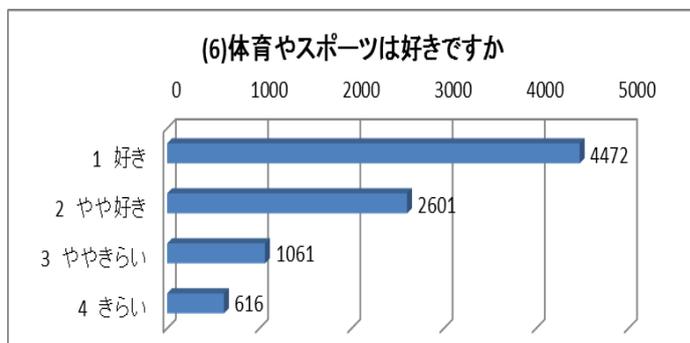
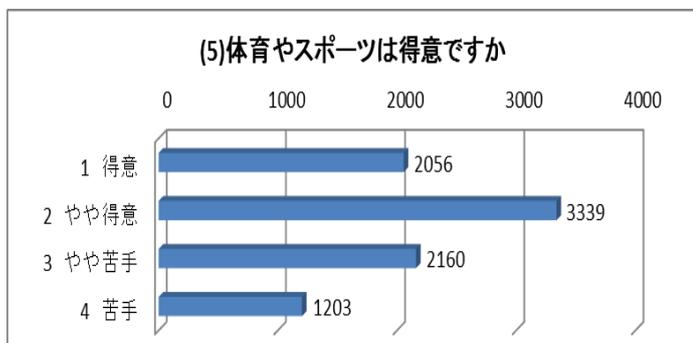
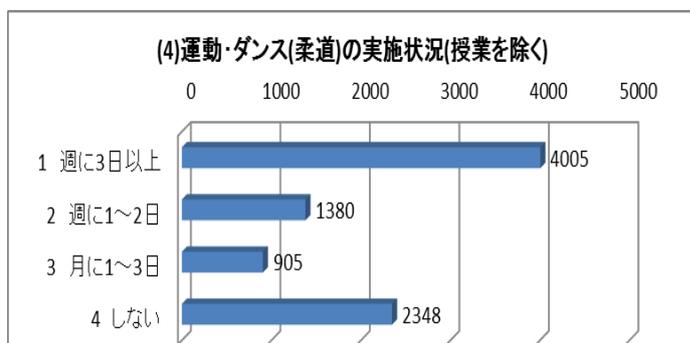
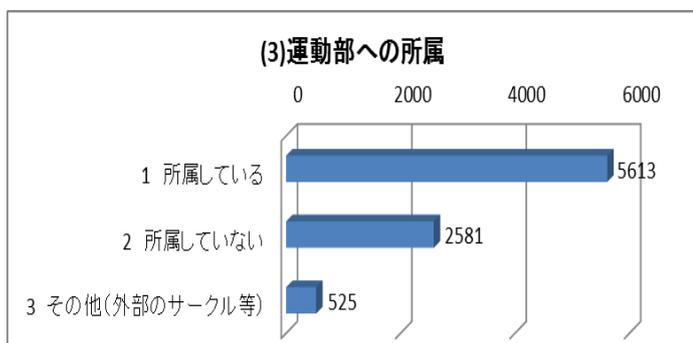
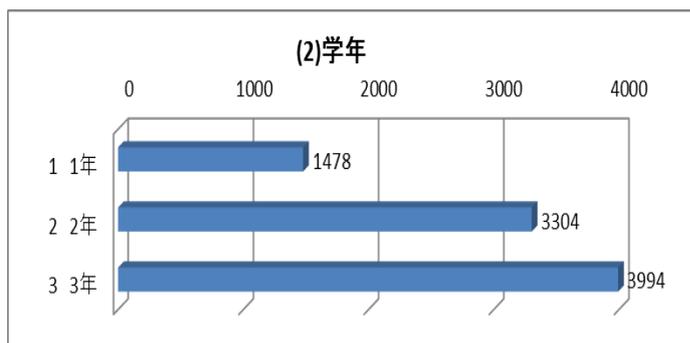
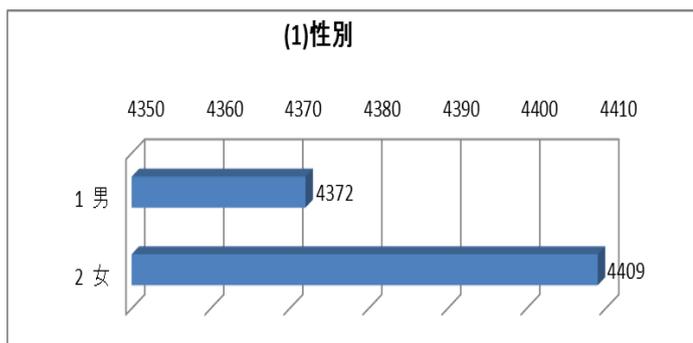
元横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校の赤坂桂先生が、本格的に表現運動に取り組んだ4年に渡る実践のドキュメントを5分間に凝縮した映像である。教員は具象の絵画を真似して動くところから、段々抽象絵画へ挑戦。校外学習で海に行けば波を真似して動く。マットの授業でも流れやポーズを意識するようアドバイス。最初の2年間で児童の表現の中はどんどん広がっていった。次の2年間では、理科の磁石の授業をヒントにクラスの即興的作品。ここでは、男女20名に分かれ各リーダーの動きの変化に伴い他の19名の動きがドンドン変化していく。最後は校外学習で『キャッツ』を鑑賞したのをきっかけに、子どもたちがやりたい思いを実現して、40名によるミュージカル『キャッツ』を上演。保護者も衣装や化粧を手伝い、親子も担任も涙ながらに「表現運動」の幕は閉じた。

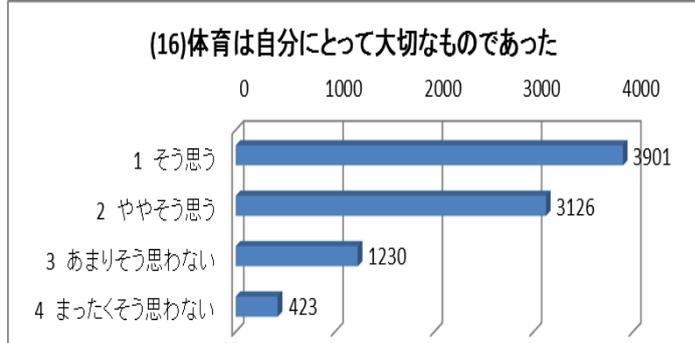
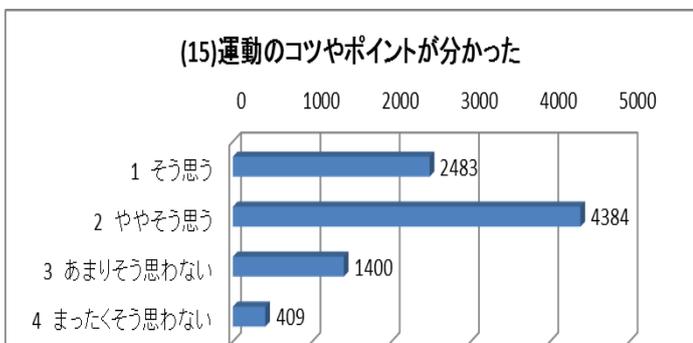
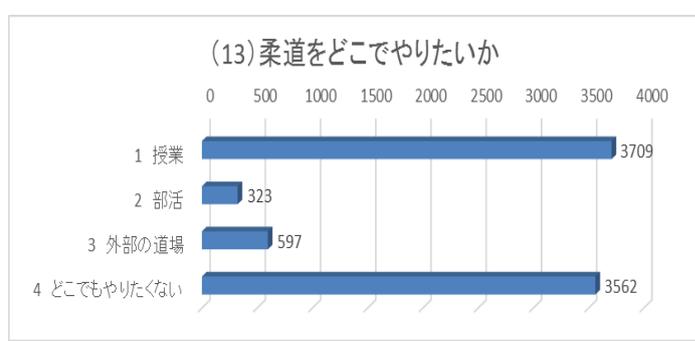
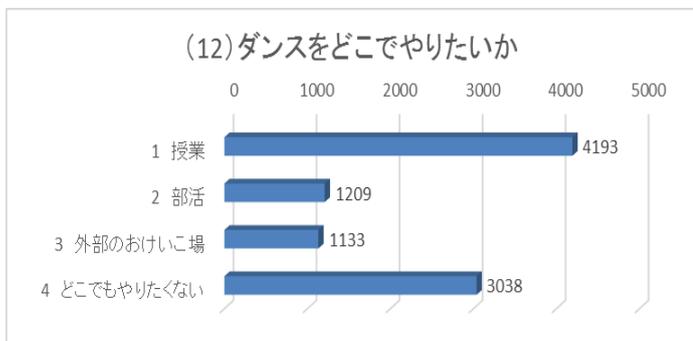
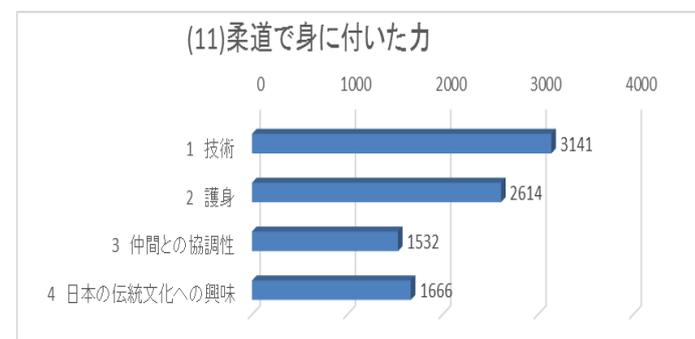
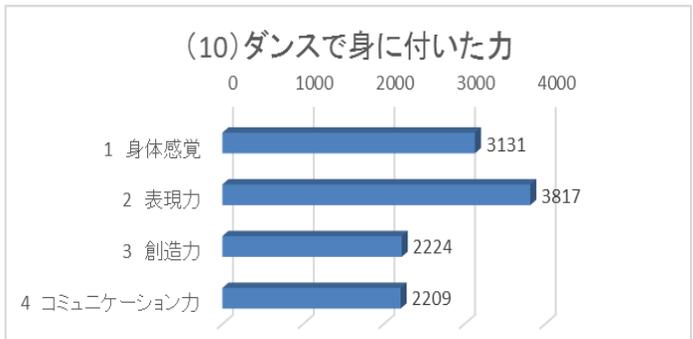
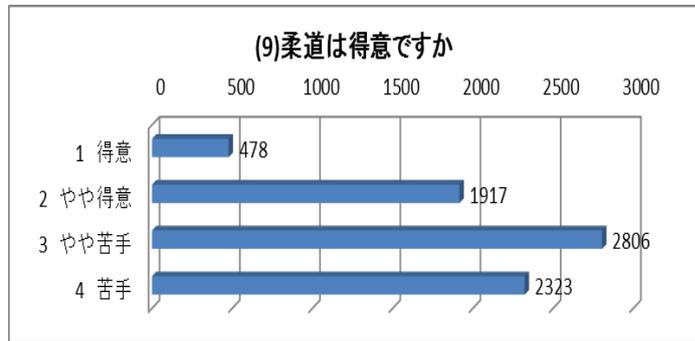
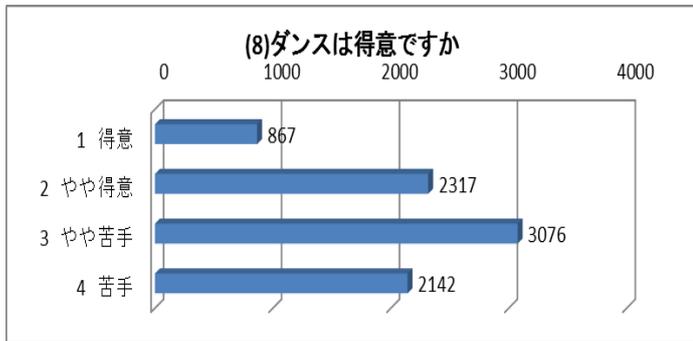
④大学生の授業作品『未知の窓』

横浜国立大学では教員養成系に用意されたダンス授業は2つある。半期の必修授業（中高教諭になるための指導法の授業）と、上演を最終目的にした選択授業である。映像は、選択授業において2014年後期7回（1回は90分）で創った作品『未知の窓』の最後の発表練習のものである。その後、日本教育大学協会第34回全国創作舞踊研究発表会（筑波大学）で上演された。

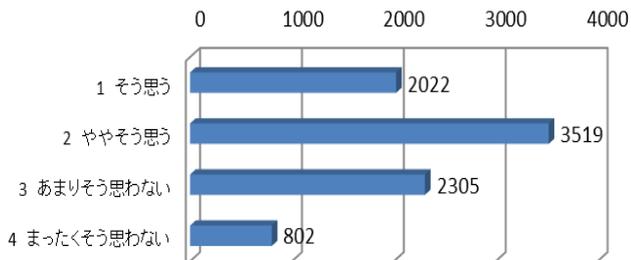
●資料編

集計結果の図表（中学生）

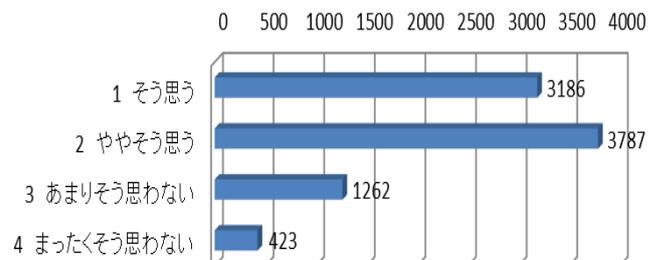




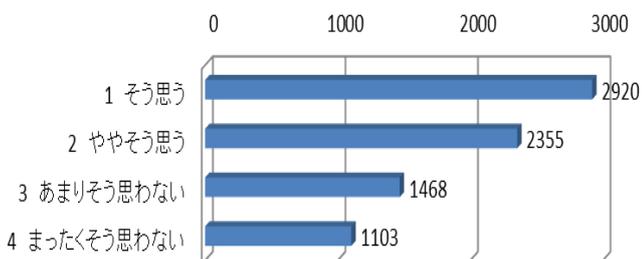
(17)先生にほめてもらった



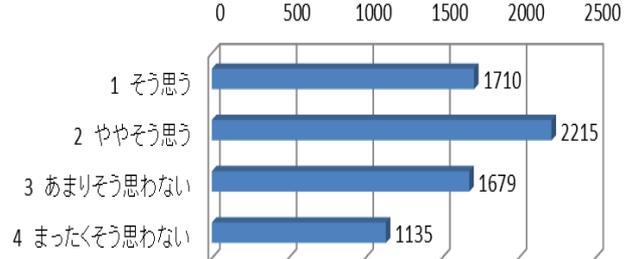
(18)先生にいいに教えてもらった



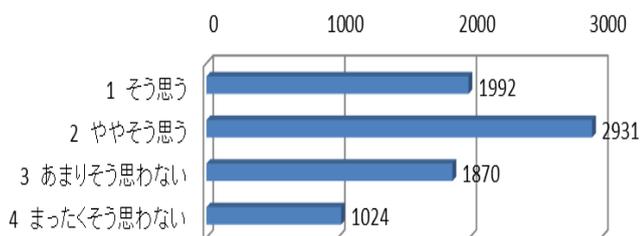
(19)ダンスの授業は楽しかった



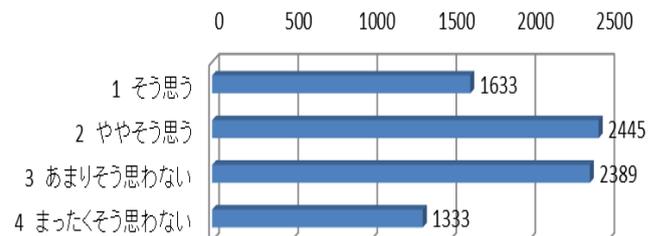
(20)柔道の授業は楽しかった



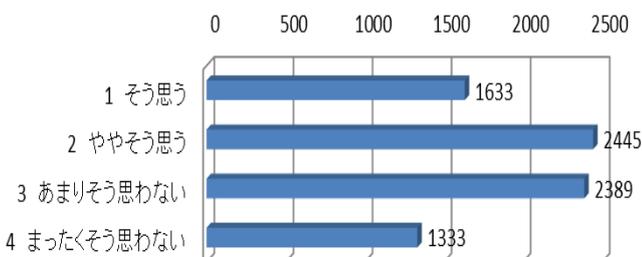
(21)ダンスの授業で踊れるようになった



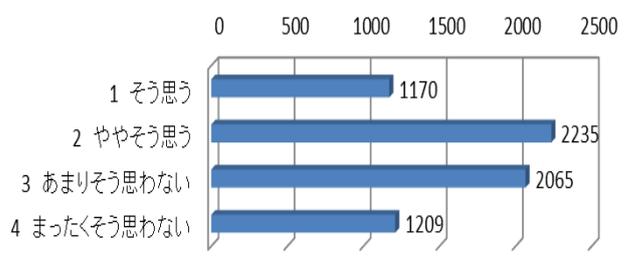
(22)柔道の授業で技がかけられるようになった



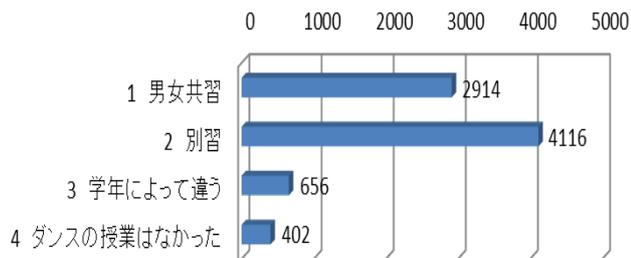
(23)ダンスを経験してスポーツにも関心が持てた



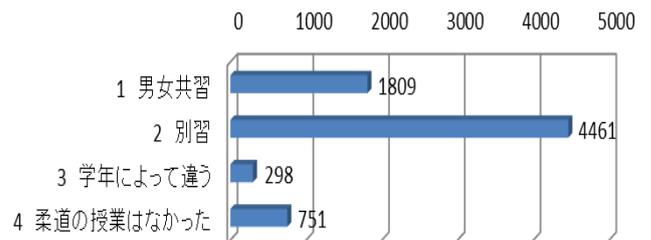
(24)柔道を経験してスポーツにも関心が持てた



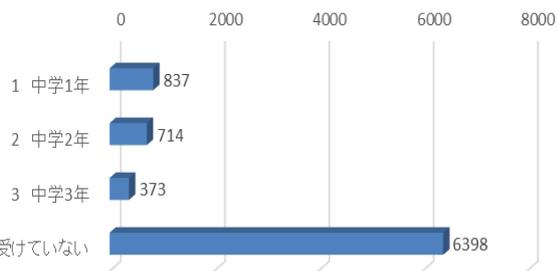
(25)ダンスの授業は男女共習か別習か



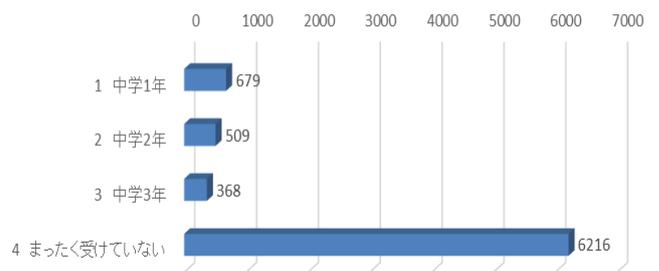
(26)柔道の授業は男女共習か別習か



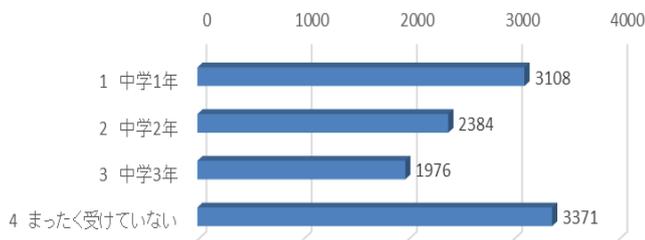
(27)外部指導を受けた学年／ダンス



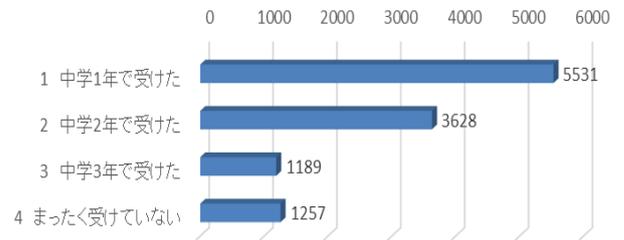
(28)外部指導を受けた学年／柔道



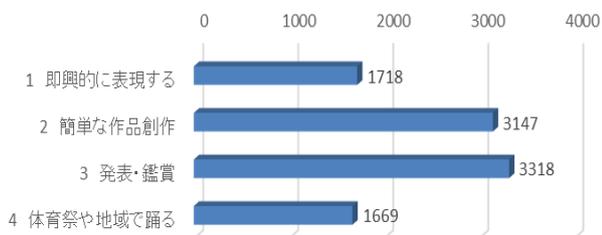
(29)創作ダンスの授業を受けた学年



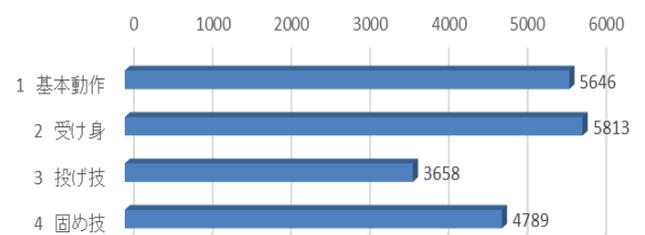
(35)柔道の授業を受けた学年



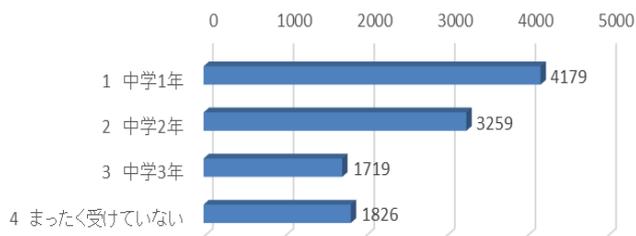
(30)創作ダンスの授業内容



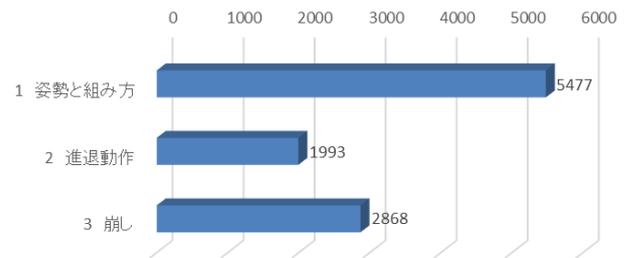
(36)柔道の授業内容は何か



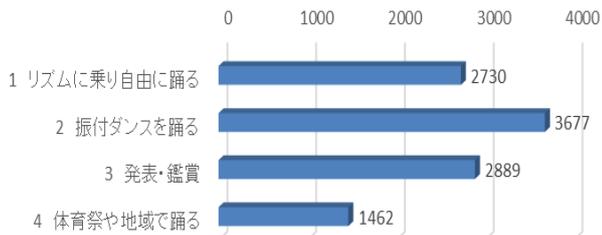
(31)リズム系ダンスの授業を受けた学年



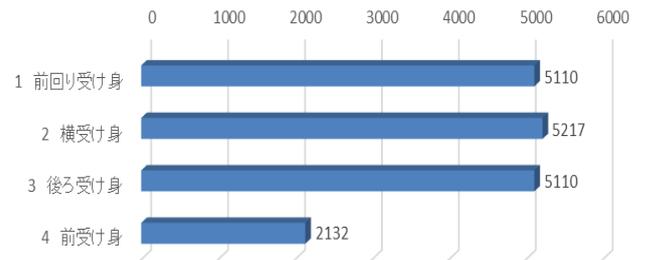
(37)柔道の基本動作は何



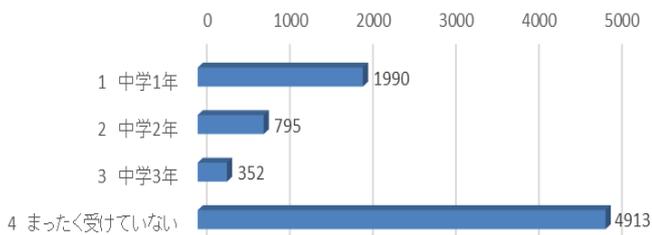
(32)リズム系ダンスの授業内容



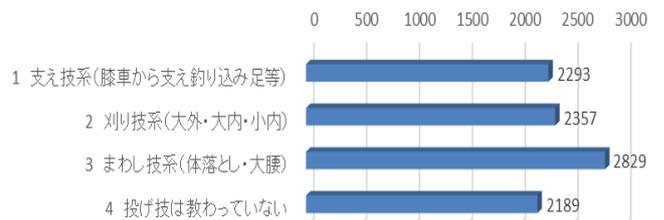
(38)柔道の受け身は何



(33)フォークダンスの授業を受けた学年



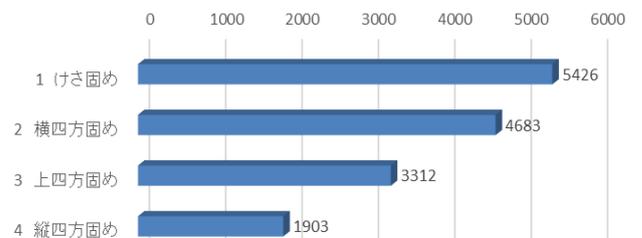
(39)柔道の投げ技は何

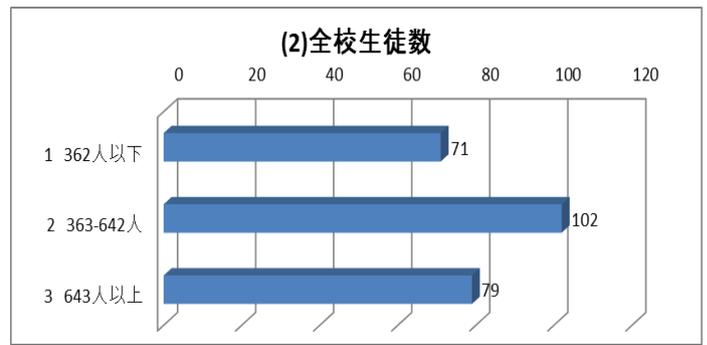
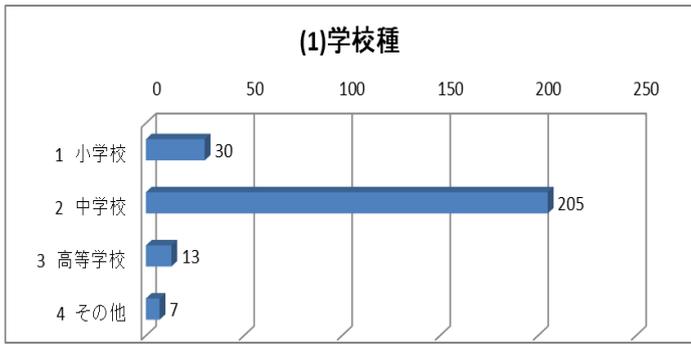


(34)フォークダンスの授業内容

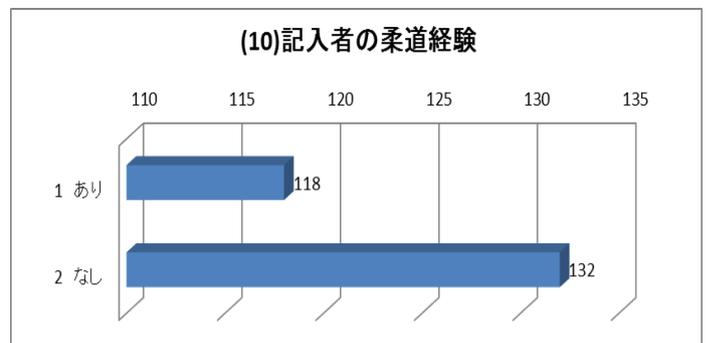
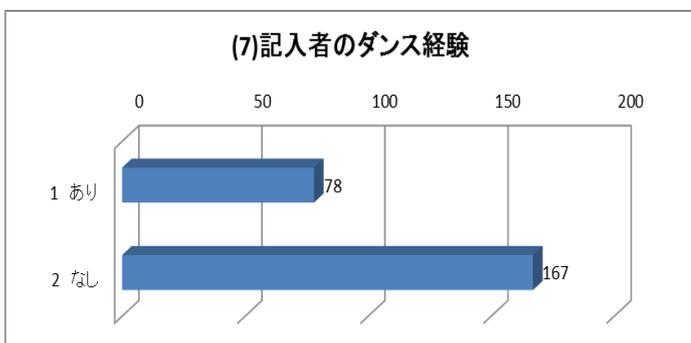
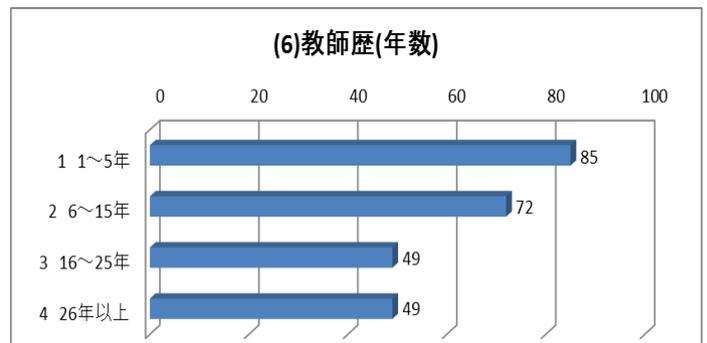
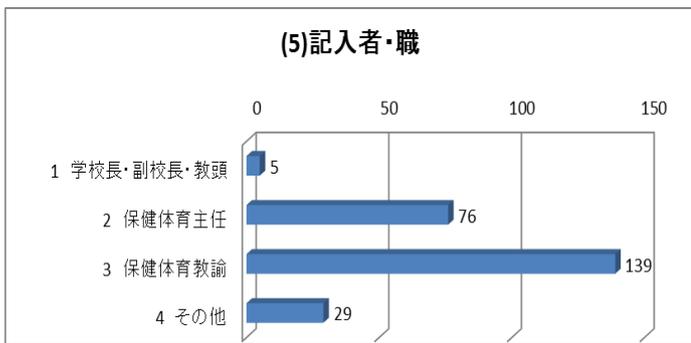
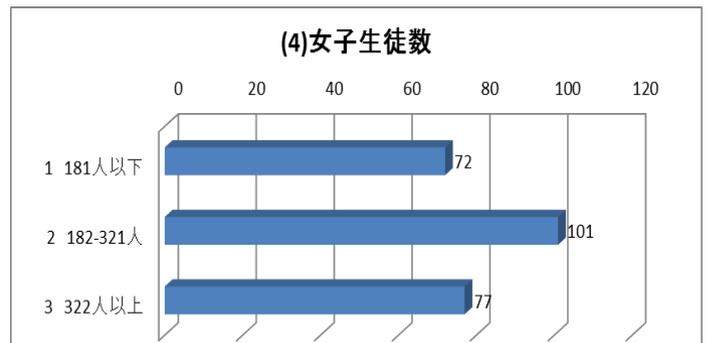
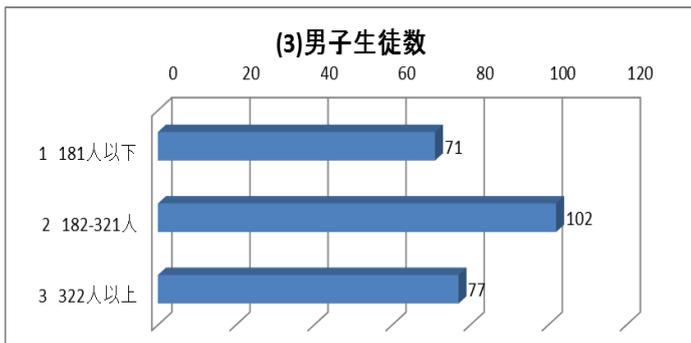


(40)柔道の固め技は何

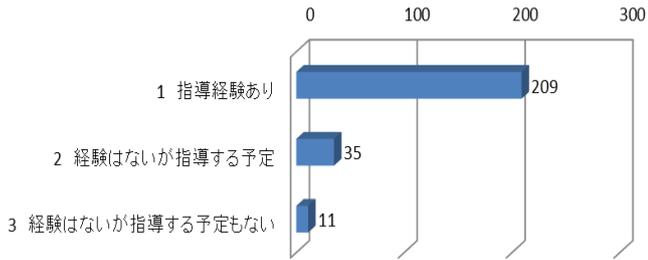




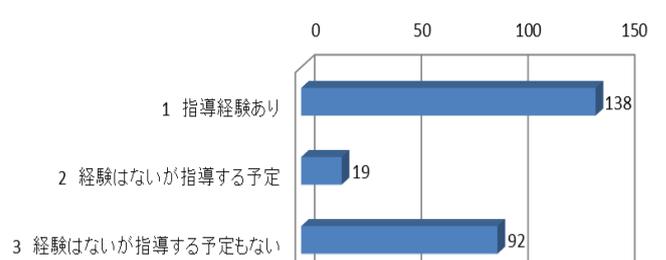
集計結果の図表（教員）



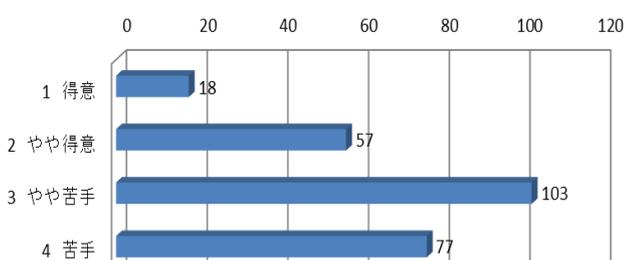
(8)記入者のダンス授業の指導経験



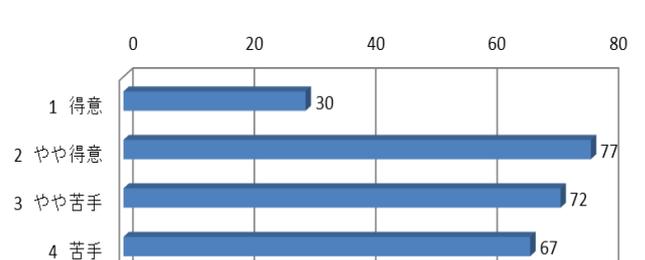
(11)記入者の柔道授業の指導経験



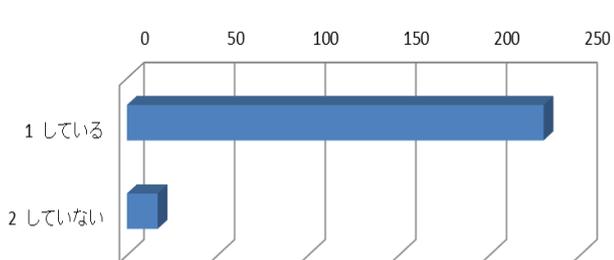
(9)ダンスは得意ですか



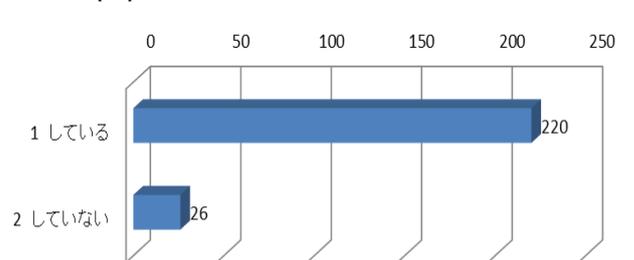
(12)柔道は得意ですか



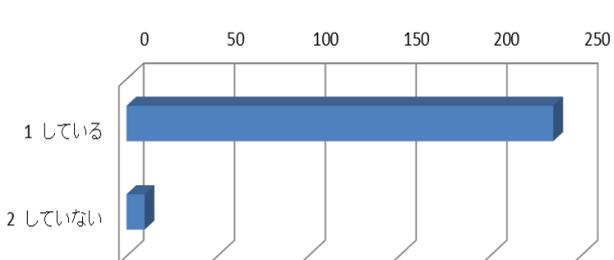
(14)授業の冒頭で授業目標を児童・生徒に示している



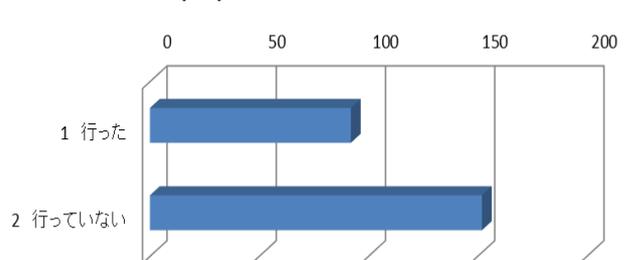
(15)授業の最後に学習の振り返りをしている



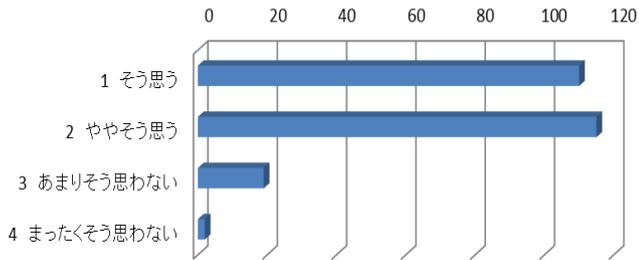
(16)児童・生徒同士で助け合うことを大切にしている



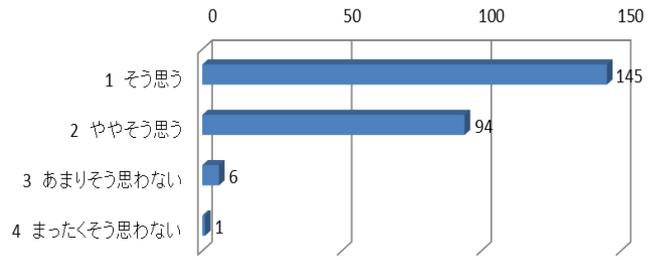
(17)昨年研究授業を行った



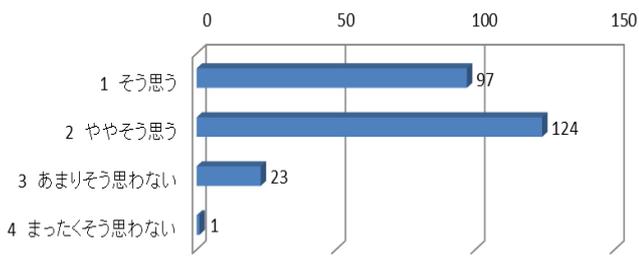
(18)運動のコツやポイントを指導している



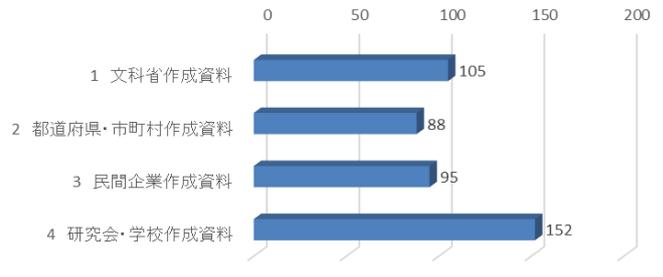
(19)児童・生徒をほめるようにしている



(20)ていねいに教えようとしている



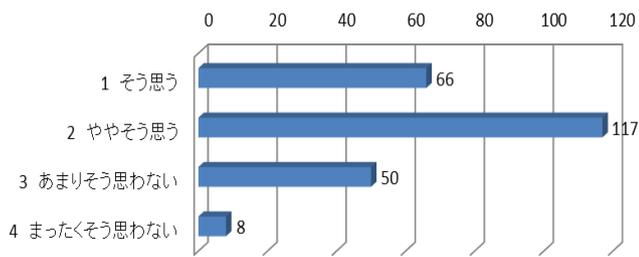
(21)どんな資料を活用しているか



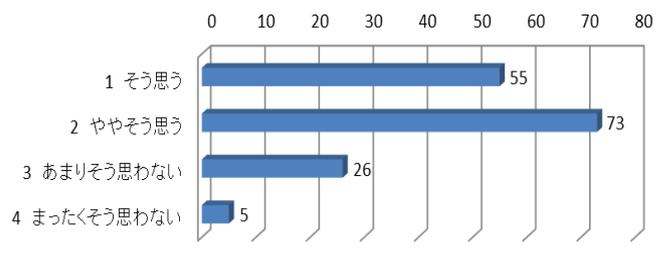
(22)努力を要する児童・生徒への取組



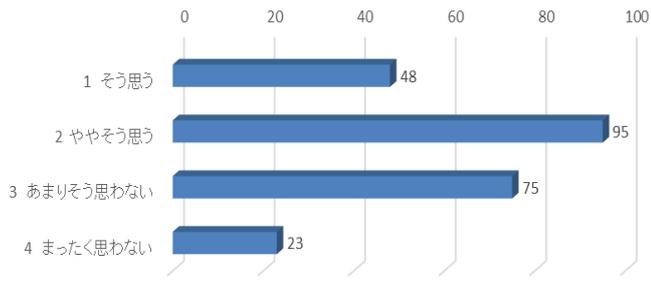
(23)ダンスの授業はやっていて楽しいですか



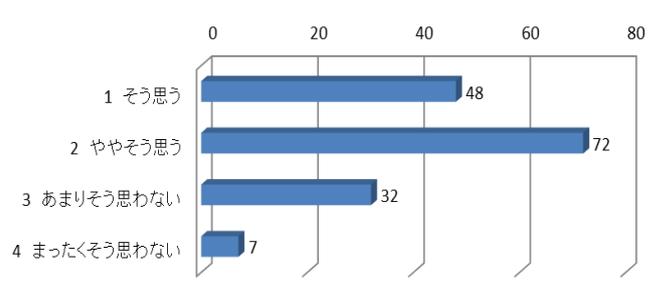
(32)柔道の授業はやっていて楽しいですか



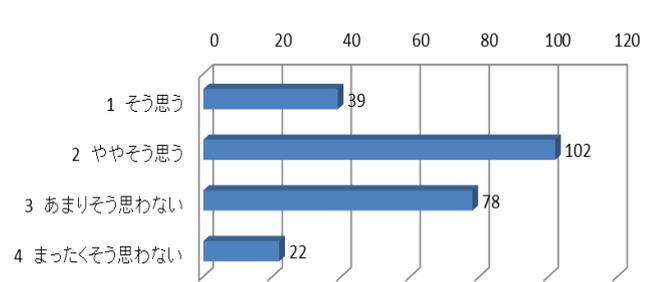
(24)ダンス授業を通して自身が踊れるようになった



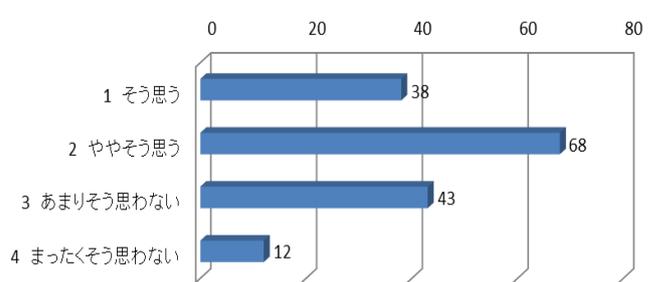
(33)柔道の授業を通して自身が上達した



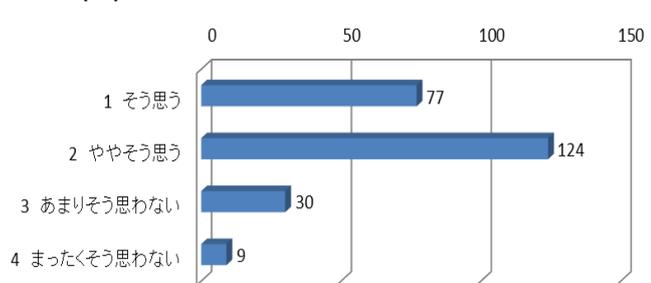
(25)ダンスを経験してスポーツにも関心が持てた



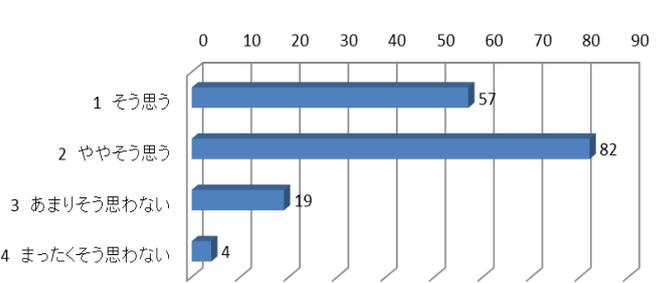
(34)柔道を経験してスポーツにも関心が持てた



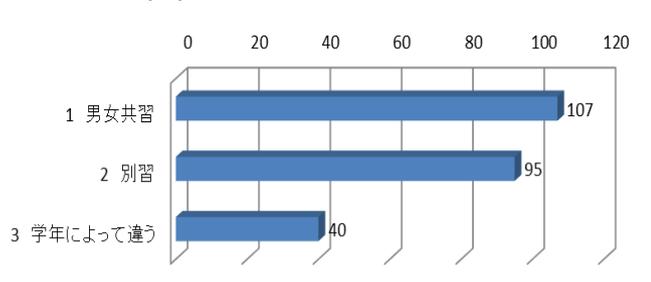
(26)ダンスは児童・生徒にとって大切なものである



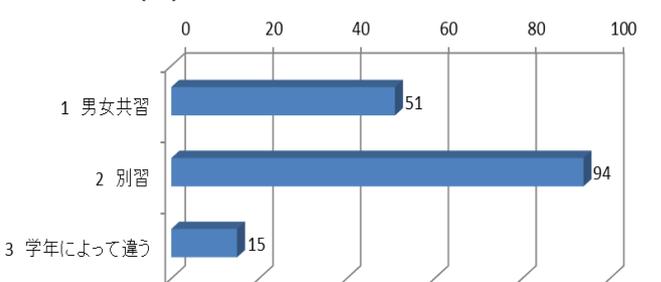
(35)柔道は生徒にとって大切なものである



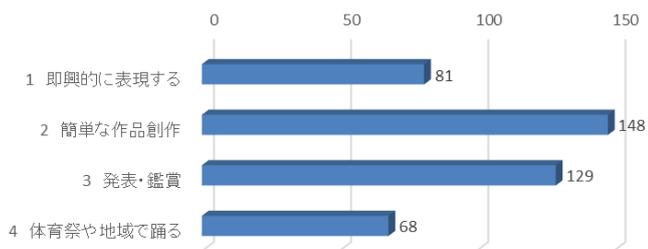
(27)ダンス授業は男女共習か別習か



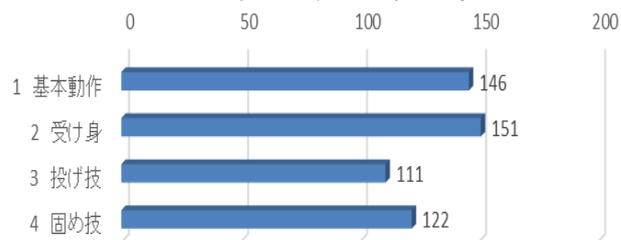
(36)柔道の授業は男女共習か別習か



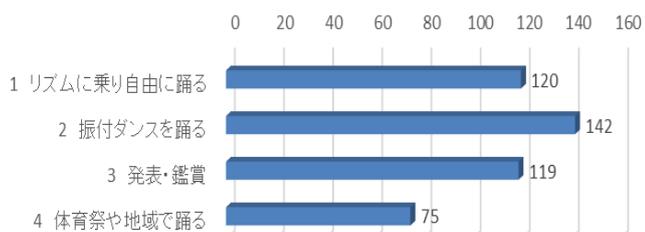
(28) 創作ダンスの授業内容は何



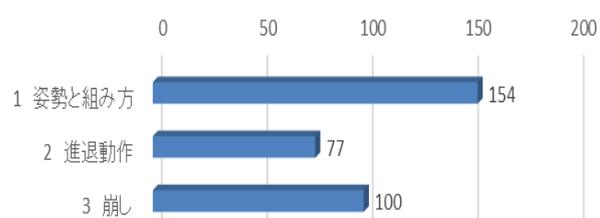
(37) 柔道の授業内容は何



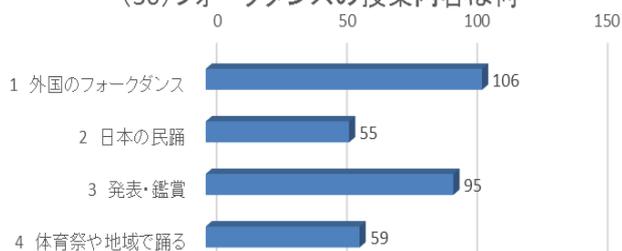
(29) リズム系ダンスの授業内容は何



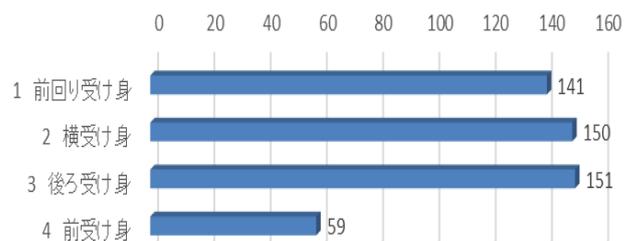
(38) 柔道の基本動作は何



(30) フォークダンスの授業内容は何



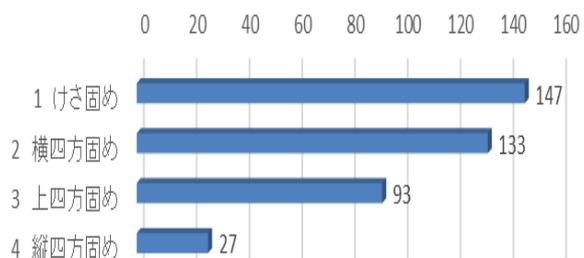
(39) 柔道の受け身は何



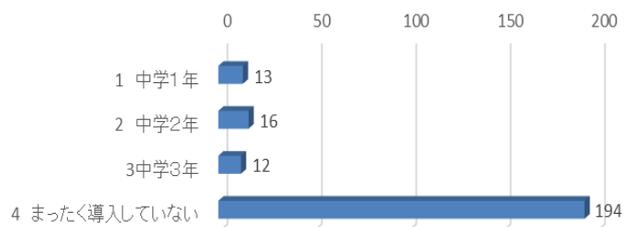
(40) 柔道の投げ技は何



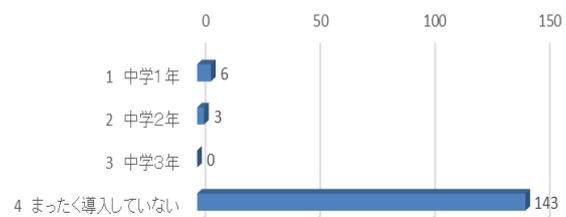
(41) 柔道の固め技は何



(31) 外部指導者導入学年・ダンス/教師



(42) 外部指導者導入学年・柔道/教師



★マークのしかた



		選択肢			
		まったくそ う思わない	あまりそ う思わない	ややそう 思う	そう 思う
5	一つのことに集中することができない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6	根気がない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7	難しいことを考えられない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8	怒りを感じる	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9	腹立たしい気分だ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10	いらいらする	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
11	疲れやすい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
12	体がだるい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

<中学校時の保健体育の授業について>当てはまるもの一つにマークしてください

- (15) 運動のコツやポイントが分かった
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (16) 体育は自分にとって大切なものであった
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (17) 先生にほめてもらえた
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (18) 先生にいていねいに教えてもらえた
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (19) ダンスの授業は楽しかった
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (20) 柔道の授業は楽しかった
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (21) ダンスの授業で踊れるようになった
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (22) 柔道の授業で技がかけられるようになった
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (23) ダンスを経験してスポーツにも関心が持てた
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (24) 柔道を経験してスポーツにも関心が持てた
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (25) ダンスの授業は男女共習か別習か
 男女共習 別習 学年によって違う ダンスの授業はなかった
- (26) 柔道の授業は男女共習か別習か
 男女共習 別習 学年によって違う ダンスの授業はなかった
- (27) 外部指導者のダンスの授業を受けた学年（複数回答可）
 中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない
- (28) 外部指導者の柔道の授業を受けた学年（複数回答可）
 中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない
- (29) 創作ダンスの授業を受けた学年（複数回答可）
 中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない

★マークのしかた



- (30) 創作ダンスの授業内容 (複数回答可)
- 即興的に表現する 簡単な作品創作 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (31) リズム系ダンスの授業を受けた学年 (複数回答可)
- 中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない
- (32) リズム系ダンスの授業内容 (複数回答可)
- リズムに乗り自由に踊る 振付ダンスを踊る 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (33) フォークダンスの授業を受けた学年 (複数回答可)
- 中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない
- (34) フォークダンスの授業内容 (複数回答可)
- 外国のフォークダンス 日本の民謡 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (35) 柔道の授業を受けた (複数回答あり)
- 中学1年で受けた 中学2年で受けた 中学3年で受けた まったく受けていない
- (36) 柔道の授業内容は何 (複数回答あり)
- 基本動作 受け身 投げ技 固め技
- (37) 柔道の基本動作は何 (複数回答あり)
- 姿勢と組み方 進退動作 崩し
- (38) 柔道の受け身は何 (複数回答あり)
- 前回り受け身 横受け身 後ろ受け身 前受け身
- (39) 柔道の投げ技は何 (複数回答あり)
- 支え技系 (膝車から支え釣 刈り技系 (大外・大内・小 まわし技系 (体落とし・大 投げ技は教わっていない
り込み足等) 内) 腰)
- (40) 柔道の固め技は何 (複数回答あり)
- けさ固め 横四方固め 上四方固め 縦四方固め

ご協力ありがとうございました。

★マークのしかた



平成26年度 全国調査票 教員用 (文部科学省委託研究)

以下の項目について、あてはまるもの一つにマークしてください

選択式の回答は、該当箇所のマーク○を塗りつぶしてご回答ください。

○: 空白マーク ●: 正しいぬりつぶし /: 不十分なぬりつぶし

記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。

この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。

- (1) 学校種
 小学校 中学校 高等学校 その他
- (2) 全校生徒数
 362人以下 363-642人 643人以上
- (3) 男子生徒数
 181人以下 182-321人 322人以上
- (4) 女子生徒数
 181人以下 182-321人 322人以上
- (5) 記入者(氏名)・職
 学校長・副校長・教頭 保健体育主任 保健体育教諭 その他
- (6) 教師歴(年数)
 1～5年 6～15年 16～25年 26年以上
- (7) 記入者のダンス経験
 あり なし
- (8) 記入者のダンス授業の指導経験
 指導経験あり 経験はないが指導する予定 経験はないが指導する予定もない
- (9) ダンスは得意ですか
 得意 やや得意 やや苦手 苦手
- (10) 記入者の柔道経験
 あり なし
- (11) 記入者の柔道授業の指導経験
 指導経験あり 経験はないが指導する予定 経験はないが指導する予定もない
- (12) 柔道は得意ですか
 得意 やや得意 やや苦手 苦手
- (13) <最近の健康状態について>当てはまるもの一つにマークしてください

		選択肢			
		まったくそ う思わない	あまりそ う思わない	ややそう 思う	そう 思う
1	泣きたい気分になる	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2	悲しい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3	さみしい気持ちだ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4	心が暗い	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5	一つのこと集中することができない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6	根気がない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

★マークのしかた



	選択肢			
	まったくそ う思わない	あまりそ う思わない	ややそう 思う	そう 思う
7 難しいことを考えられない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8 怒りを感じる	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9 腹立たしい気分だ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10 いらいらする	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
11 疲れやすい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
12 体がだるい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

<児童・生徒が受けているダンス授業について>当てはまるもの一つにマークしてください

- (14) 授業の冒頭で授業目標を児童・生徒に示している
 している していない
- (15) 授業の最後に学習の振り返りを行っている
 している していない
- (16) 児童・生徒同士で助け合うことを大切にしている
 している していない
- (17) 昨年研究授業を行った
 行った 行っていない
- (18) 運動のコツやポイントを指導している
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (19) 児童・生徒をほめるようにしている
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (20) ていねいに教えようとしている
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (21) どんな資料を活用しているか (複数回答可)
 文科省作成資料 都道府県・市町村作成資料 民間企業作成資料 研究会・学校作成資料
- (22) 努力を要する児童・生徒への取組 (複数回答可)
 個別にコツやポイントを教える 練習の工夫を促す 友達同士の教え合いを促す 自分の動きの映像を見せる

<児童・生徒が受けているダンス (表現運動) の授業について> 柔道の設問への回答は中高教員のみ

- (23) ダンスの授業はやっていて楽しいですか
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (24) ダンス授業を通して自身が踊れるようになった
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (25) ダンスを経験してスポーツにも関心が持てた
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (26) ダンスは児童・生徒にとって大切なものである
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (27) ダンス授業は男女共習か別習か
 男女共習 別習 学年によって違う
- (28) 創作ダンスの授業内容は何 (複数回答可)
 即興的に表現する 簡単な作品創作 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (29) リズム系ダンスの授業内容は何 (複数回答可)
 リズムに乗り自由に踊る 振付ダンスを踊る 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る

★マークのしかた



- (30) フォークダンスの授業内容は何か (複数回答可)
 外国のフォークダンス 日本の民謡 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (31) 外部指導者を導入している学年 (複数回答可)
 小学校低学年・中学1年・高校1年 小学校中学年・中学2年・高校2年 小学校高学年・中学3年・高校3年 まったく導入していない
- <生徒が受けている柔道の授業について> 回答は中高教員のみ
- (32) 柔道の授業はやっていて楽しいですか
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (33) 柔道の授業を通して自身が上達した
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (34) 柔道を経験してスポーツにも関心が持てた
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (35) 柔道は生徒にとって大切なものである
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない
- (36) 柔道の授業は男女共習か別習か
 男女共習 別習 学年によって違う
- (37) 柔道の授業内容は何か (複数回答可)
 基本動作 受け身 投げ技 固め技
- (38) 柔道の基本動作は何か (複数回答可)
 姿勢と組み方 進退動作 崩し
- (39) 柔道の受け身は何か (複数回答可)
 前回り受け身 横受け身 後ろ受け身 前受け身
- (40) 柔道の投げ技は何か (複数回答可)
 支え技系 (膝車から支え釣り込み足等) 刈り技系 (大外・大内・小内) まわし技系 (体落とし・大腰) 投げ技は教えていない
- (41) 柔道の固め技は何か (複数回答可)
 けさ固め 横四方固め 上四方固め 縦四方固め
- (42) 外部指導者を導入している学年 (複数回答可)
 中学1年・高校1年 中学2年・高校2年 中学3年・高校3年 まったく導入していない
- (43) 【自由記述設問】ダンスや柔道に関してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

ご協力ありがとうございました。

中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査

（職名は平成 27 年 3 月 1 日現在）

高橋 和子 横浜国立大学教育人間科学部教授
木村 昌彦 横浜国立大学教育人間科学部教授
梅沢 秋久 横浜国立大学教育人間科学部准教授

*** 報告書の作成に当たっては、次の者が協力した。**

（敬称略）

山本 光 横浜国立大学教育人間科学部准教授
田屋 多恵子 横浜市小学校体育研究会表現運動班/横浜市立矢向小学校長（表現運動）
近藤 浩人 横浜市立潮田小学校校長（表現運動）
須藤 憲司 横浜市小学校体育研究会表現運動部 部長/横浜市立桜岡小学校教諭（表現運動）
秋山 順子 横浜市立潮田小学校副校長（表現運動）
竹生田 恵美 横浜市立橘中学校教諭（ダンス）
河野 寛子 横浜市立橘中学校教諭（ダンス）
三浦 明希子 横浜市立橘中学校教諭（ダンス）
藤野 信行 横浜市立西中学校教諭（柔道）
高橋 耕平 横浜国立大学教育人間科学部非常勤職員

*** 調査に当たっては、次の者が協力した。**

菅原 浩樹 岩手県教育委員会指導主事
千田 幸喜 岩手県教育委員会事務局スポーツ健康課指導主事兼保健体育主事
斎藤 和哉 山形県教育委員会
磯貝 靖子 神奈川県教育委員会保健体育課指導主事
高山 和宣 横浜市教育委員会主任指導主事
根岸 淳 横浜市教育委員会主任指導主事
町田 大樹 横浜市教育委員会指導主事
田中 磨理子 横浜市教育委員会主任指導主事
斎藤 真弘 横浜市立中山中学校教諭
吉村 洋一 長野県教育委員会事務局長野県体育センター専門主事
中村 康男 岐阜県教育委員会 体育健康課学校体育安全担当
熊谷 佳代 岐阜大学准教授
伊藤 美智子 大阪体育大学教授
田中 浩一 神戸市教育委員会事務局社会教育部 スポーツ体育課 学校体育係指導主事
大坂 真喜子 香川県三木町立三木中学校教諭
渡部 慎一 宮崎県教育庁スポーツ指導センター指導主事
遠田 佳代子 鳥取県伯耆町立溝口中学校長
甲斐 富美子 北九州市立松ヶ江中学校教諭
江藤 真生子 琉球大学教育学部准教授

*** 資料整理等（ビデオ撮影・映像作成・調査の集計）に当たっては、次の者が協力した。**

ef+代表 北代暁也（編集著作）
横浜国立大学 研究生：伊藤史織 院生：松村智也、松井高光、根本理沙、堀内麻子
横浜国立大学 学部生：上原征大、佐々木結、村井美砂、内田涼太、黒川葵、櫻井加菜、中澤美穂、東倉ひかり
高校生 神奈川県立大和高等学校：土田春奈 相模原女子高等学校：都築成美

*** 調査実施に当たっては、次の学校が協力した。**

岩手県

花巻市立西南中学校
盛岡市立大宮中学校
宮古市立宮古西中学校

山形県

上山市立南中学校
天童市立第一中学校
酒田市立第三中学校

千葉県

我孫子市立我孫子中学校
東金市立西中学校

神奈川県

横浜市立野庭中学校
横浜市立高田中学校
横浜市立六ッ川中学校
横須賀市立浦賀中学校
横須賀市立武山中学校
横浜国立大学附属鎌倉中学校
横浜国立大学附属横浜中学校
横浜市立橘中学校
横浜市立西中学校
横浜市立田奈中学校
横浜市立霧が丘中学校
横浜市立金沢中学校
横浜市立緑が丘中学校
横浜市立東鴨居中学校
横浜市立十日市場中学校
横浜市立谷本中学校
横浜市立小山台中学校
横浜市立あかね台中学校
横浜市立中山中学校
横浜市立鴨居中学校

長野県

長野市立柳町中学校
須坂市立墨坂中学校

京都府

京都府向日市立勝山中学校

岐阜県

岐阜市立陽南中学校
岐阜市立長森南中学校
岐阜市立藍川北中学校
岐阜市立岐阜西中学校
岐阜市立梅林中学校
大垣市立北中学校
大垣市立東中学校
羽島市立羽島中学校
名古屋市立長良中学校

大阪府

堺市立鳳中学校
熊取町立熊取中学校
熊取町立熊取北中学校
熊取町立熊取南中学校
阪南市立鳥取中学校
岸和田市立久米田中学校
岸和田市桜台中学校
岸和田市山直中学校
大阪市立築港中学校

香川県

高松市立紫雲中学校
三木町立三木中学校

鳥取県

倉吉市立東中学校
鳥取市立南中学校
鳥取市立西中学校
米子市立福米中学校
米子市立東山中学校
境港市立第一中学校
境港市立第二中学校
鳥取大学附属中学校
伯耆町立岸本中学校

宮崎県

宮崎市立加納中学校
宮崎日本大学中学校

兵庫県

神戸市立鶴台中学校
神戸市立太山寺中学校
神戸市立垂水中学校
神戸市立大沢中学校
神戸市立淡河中学校
神戸市立湊川中学校
神戸市立星陵台中学校
神戸市立桜が丘中学校
神戸市立神出中学校
神戸市立西落合中学校
神戸市立高取台中学校
神戸市立東落合中学校
神戸市立唐櫃中学校
神戸市立押部谷中学校
神戸市立垂水東中学校
神戸市立星和台中学校
神戸市立多聞東中学校
神戸市立竜が台中学校
神戸市立神陵台中学校
神戸市立生田中学校
神戸市立八多中学校
神戸市立鈴蘭台中学校
神戸市立本山南中学校
神戸市立本多聞中学校
神戸市立須磨北中学校
神戸市立高倉中学校
神戸市立横尾中学校
神戸市立長田中学校
神戸市立大池中学校
神戸市立鷹取中学校
神戸市立岩岡中学校
神戸市立向洋中学校

福岡県

北九州市立松ヶ江中学校

沖縄県

那覇市立那覇中学校
豊見城市立豊見城中学校
浦添市立仲西中学校
宜野湾市立普天間中学校